

洲本市

波毛遺跡 川添遺跡

—一般国道28号（洲本バイパス）建設事業に伴う発掘調査報告書—

2000年3月

兵庫県教育委員会

は け
波 毛 遺 跡
か わ ぞ え
川 添 遺 跡

—一般国道28号（洲本バイパス）建設事業に伴う発掘調査報告書—

2000年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会



遺跡遠景（前方緑町市街、南西から）



同上（奥に先山を望む、南東から）

カラー写真図版 2
航空写真



遺跡全景（南東から）



同上（北東から）

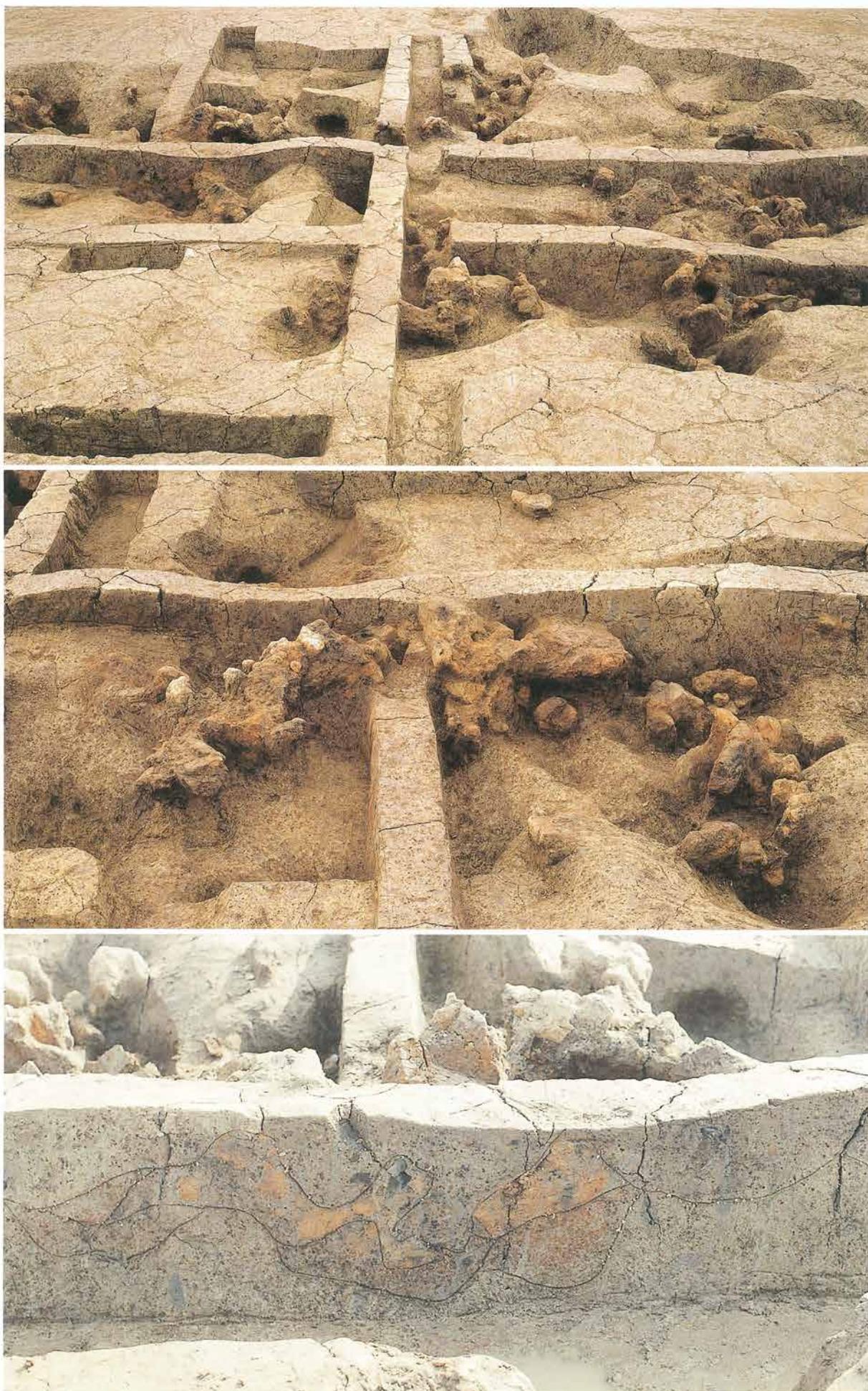


D地区第2面全景（南西から）



C地区全景（南東から）

カラー写真図版 4
D 地区第 2 面



焼土坑 S×202（北から）／同上（南から）／同上 断ち割り断面（北から）

例　　言

1. 本書は洲本市納字波毛・トカリに所在する波毛遺跡と、洲本市大野下に所在する川添遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道28号（洲本バイパス）の建設に伴うもので、建設省近畿地方建設局兵庫国道工事事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査を担当した。
3. それぞれの遺跡調査番号は下記のとおりである。

	遺跡調査番号	調査担当者
波毛遺跡 確認調査（平成3年度）	910053	深井明比古・山本 誠
全面調査（平成3年度）	910086	中川 渉・鈴木敬二・所崎明雄
全面調査（平成4年度）	920173	長谷川眞・山上雅弘・鈴木敬二
川添遺跡 確認調査（平成2年度）	900006	岡田章一・高瀬一嘉
全面調査（平成2年度）	900113	岡田章一・別府洋二

4. 本文の執筆は、岡田章一・中川 渉・山上雅弘・鈴木敬二が本文目次のとおり分担して行い、編集は中川が担当した。
5. 本書に使用した標高は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。
6. 本報告書に使用した写真のうち、航空写真は平成3年度には関西航測株式会社に、平成4年度には写測エンジニアリング株式会社に撮影を委託したものを使用した。遺構写真は、各調査担当者によるものである。また遺物写真については、（株）衣川に撮影を委託して行った。
7. 第1図の地図は、国土地理院発行2万5千分の1「都志・広田」（平成6年度発行）を使用した。
8. 本書にかかる波毛遺跡・川添遺跡の写真・図面・遺物などは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）に保管している。
9. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の助力を得た。記して感謝の意を表します。（敬称略）
波毛康宏（淡路考古学研究会）、浦上雅史（洲市教育委員会）、高橋 学（立命館大学）、寒川 旭（通商産業省工業技術院地質調査所）、高田健一（鳥取県教育委員会）

目 次

第1章 はじめに

第1節 歴史・地理的環境	(山上)	1
1. 地理的環境		
2. 歴史的環境		
第2節 調査の経過	(中川)	4
1. 波毛遺跡の調査		
2. 川添遺跡の調査		
3. その他の地点		
4. 出土品整理・報告書作成作業		

第2章 波毛遺跡

第1節 平成3年度の調査 (D地区)	(中川)	6
1. 概要		
2. 土層断面図		
3. D地区第1面の調査		
4. D地区第2面の調査		
第2節 平成4年度の調査 (A～C地区)	(鈴木・山上)	19
1. 概要		
2. C地区の調査		
3. A地区の調査		
4. B地区の調査		
第3節 小結	(中川・山上)	29
1. 弥生時代前期		
2. 弥生時代中期		
3. 弥生時代後期		
4. 古墳時代		
5. 旧河道・噴砂		
6. 水田		

第3章 川添遺跡

第1節 調査の概要	(岡田)	33
1. 確認調査		
2. 全面調査		
3. 土層断面図		
4. 調査の結果		
第2節 小結	(岡田)	35

挿図目次

第1図 波毛遺跡・川添遺跡の位置と周辺の遺跡（1：50,000）	2
第2図 土坑 S K205	16

図版目次

全 体 図

- 図版1 路線計画と遺跡の位置
図版2 波毛遺跡・川添遺跡の調査地区

波毛遺跡

- 図版3 調査地区と微地形等高線図
図版4 D地区第1面全体図
図版5 壁穴住居S H101
図版6 壁穴住居S H102
図版7 壁穴住居S H103～105
図版8 掘立柱建物S B101
図版9 掘立柱建物S B102
図版10 掘立柱建物S B103
図版11 旧河道と噴砂
図版12 D地区土層断面図
図版13 D地区第2面全体図
図版14 掘立柱建物S B201
図版15 掘立柱建物S B202
図版16 工房跡S X201
図版17 焼土坑S X202
図版18 溝S D212～218・220
図版19 土坑・溝断面図
図版20 溝S D220 断面図
図版21 C地区土層断面図
図版22 C地区全体図
図版23 壁穴住居S H01
図版24 壁穴住居S H02
図版25 壁穴住居S H03
図版26 掘立柱建物S B01・02
図版27 溝・土坑

図版28 B地区土層断面図

図版29 A地区土層断面図

図版30 A地区水田a全体図

図版31 A地区水田b全体図

図版32 A地区水田c全体図

図版33 D地区第1面出土土器(1)

図版34 D地区第1面出土土器(2)

図版35 D地区第2面出土土器(1)

図版36 D地区第2面出土土器(2)

図版37 D地区第2面出土土器(3)

図版38 C地区出土土器(1)

図版39 C地区出土土器(2)

図版40 A・B地区出土土器

図版41 D地区出土石器・鉄器

図版42 C地区出土石器・鉄器

川添遺跡

- 図版43 確認グリッド配置図
図版44 確認調査グリッド平面・断面図
図版45 調査地区と全体図
図版46 A区全体図
図版47 B区全体図
図版48 B区断面図
図版49 掘立柱建物S B01
図版50 出土土器・鉄器

写真図版目次

カラー写真図版1 航空写真

- 遺跡遠景（前方緑町市街、南西から）
- 同上（奥に先山を望む、南東から）

カラー写真図版2 航空写真

- 遺跡全景（南東から）
- 同上（北東から）

カラー写真図版3 航空写真

- D地区第2面全景（南西から）
- C地区全景（南東から）

カラー写真図版2 D地区第2面

- 焼土坑S X202（北から）
- 同上（南から）
- 同上 断ち割り断面（北から）

写真図版1 航空写真

- 大阪湾から洲本平野を望む（東から）
- 先山から遺跡を望む（北西から）
- 鮎屋ダム上空から遺跡を望む（南東から）

写真図版2 航空写真

- A・B・C地区全景（北西から）
- 同上（北東から）

写真図版3 関連写真

- 遺跡から先山を望む（南東から）
- 洲本川から遺跡を望む（北から、左手滝池川）
- 白髭神社（北から）

波毛遺跡

写真図版4 D地区第1面

- 全景（真上から）
- 同上（南東から）

写真図版5 D地区第1面

- 堅穴住居、掘立柱建物群（南東から）
- 堅穴住居S H101・102、掘立柱建物S B103（北東から）

写真図版6 D地区第1面

- 堅穴住居S H101 炭化材出土状況（南東から）
- 同上 完掘状況（南東から）
- 堅穴住居S H101と掘立柱建物S B103（北西から）

写真図版7 D地区第1面

- 堅穴住居S H101 南辺土坑（北西から）
- 同上 南辺土坑の断面（北東から）
- 同上 床面の土器出土状況（東から）
- 同上 東側柱穴の断ち割り（北西から）
- 同上 西側柱穴の断ち割り（北西から）

写真図版8 D地区第1面

- 堅穴住居S H102（南東から）
- 同上 南西-北東断面左辺（南東から）
- 同上 南西-北東断面右辺（南東から）
- 同上 北西-南東断面左辺（南西から）
- 同上 北西-南東断面右辺（南西から）

写真図版9 D地区第1面

- 堅穴住居S H103~105（北東から）
- 堅穴住居S H103~105拡張区南東壁断面（北西から）

写真図版10 D地区第1面

- 掘立柱建物S B101（南東から）
- 掘立柱建物S B102（南東から）

写真図版11 D地区第1面

- 旧河道落ち際の断面（北から）
- 旧河道と噴砂の断面（西から）

写真図版12 D地区第1面

- 噴砂の検出状況（南西から）
- 噴砂の断面（西から）

写真図版13 D地区第2面

- 北西側全景（南東から）
- 南東側全景（南東から）

写真図版14 D地区第2面

- 第2面全景（真上から）
- 掘立柱建物S B201（南から）

写真図版15 D地区第2面

- 掘立柱建物S B201の柱穴断ち割り

写真図版16 D地区第2面

- 工房跡S X201（西から）
- 同上 断面（南西から）

写真図版17 D地区第2面

- 焼土坑S X202（南から）
- 同上 断面（西から）

写真図版18 D地区第2面

土坑S K205 (北東から)

溝S D204 (北東から)

写真図版19 D地区第2面

土坑S K204 断面 (南から)

溝S D210 断面 (西から)

溝S D211 断面 (西から)

溝S D213 断面 (南西から)

溝S D215・216 断面 (南東から)

溝S D217 断面 (南東から)

溝S D218 断面 (北東から)

溝S D220 遺物出土状況 (南から)

写真図版20 D地区第2面

溝S D220 南側断面 (南から)

同上 北側断面 (北から)

写真図版21 C地区

全景 (南西から)

全景 (南東から)

写真図版22 C地区

C-2区全景 (北西から)

同上 (南東から)

写真図版23 C地区

C-1区全景 (北西から)

同上 中央部 (南東から)

写真図版24 C地区

竪穴住居S H01 検出状況 (北東から)

同上 完掘状況 (北西から)

写真図版25 C地区

竪穴住居S H02 検出状況 (南西から)

同上 完掘状況 (南西から)

写真図版26 C地区

竪穴住居S H03 完掘状況 (北東から)

同上 鉄鉗出土状況 (アップ)

写真図版27 C地区

土坑S K04 (北東から)

土坑S K05 土器出土状況 (南東から)

土坑S K06 (北東から)

写真図版28 B地区

全景 (北西から)

北東壁断面 (南から)

写真図版29 A地区

水田a全景 (真上から)

同上 (北東から)

写真図版30 A地区

水田a全景 (北西から)

同上 (北西から)

A-1区 水田b全景 (北西から)

写真図版31 A地区

水田a西端小畦畔 (北西から)

同上 (東から)

写真図版32 A地区

水田a大畦畔1隣接の水口 (北から)

A-1区 水田a大畦畔1と西側小畦畔 (南西から)

A-1区 水田b大畦畔1と東側水路 (南西から)

写真図版33 A地区

水田a～c南東半部 (北西から)

同上 (南西から)

同上 (真上から)

写真図版34 A地区

水田a大畦畔2西側小畦畔 (南から)

同上 (北から)

写真図版35 A地区

水田a～c南東半部 (南東から)

水田c大畦畔2 (南東から)

写真図版36 A地区

水田a～c南東半部全景 (真上から)

水田a・b北西半部全景 (真上から)

写真図版37 A地区

水田b北東半部 (南東から)

A-1区 水田b水路 (北西から)

A-1区 水田b水路東側小畦畔近景 (南西から)

写真図版38 A地区

A-1区 水田b水路土留め杭

A-1区 水路除去後 (北西から)

水田b水路付近足跡

写真図版39 A地区

北東壁断面 大畦畔1 (南西から)

北東壁断面 水路 (南西から)

写真図版40 A地区

北東壁断面 小畦畔 (大畦畔2の西側)

北東壁断面 大畦畔2 (南西から)

- 写真図版41 D 地区第1面出土土器(1)
写真図版42 D 地区第1面出土土器(2)
写真図版43 D 地区第1面出土土器(3)
写真図版44 D 地区第1面出土土器(4)
写真図版45 D 地区第2面出土土器(1)
写真図版46 D 地区第2面出土土器(2)
写真図版47 D 地区第2面出土土器(3)
写真図版48 D 地区第2面出土土器(4)
写真図版49 D 地区出土石器・鉄器
写真図版50 C 地区出土遺物(1)
写真図版51 C 地区出土遺物(2)
写真図版52 A・B 地区出土遺物

川添遺跡

写真図版53 全体

調査前風景（南東から）

調査区全景航空写真

写真図版54 A・B 区

A 区 全景（東から）

B 区 遺構検出状況（北から）

写真図版55 B 区

掘立柱建物 S B 01（北から）

土坑 S K 01・02（西から）

写真図版56 出土土器

写真図版57 出土瓦・鉄器

第1章 はじめに

第1節 歴史・地理的環境

1. 地理的環境

波毛遺跡・川添遺跡の位置する洲本市は淡路島中部の大坂湾側に所在する。同市の市街地は市域東端の海岸沿いに広がるが、この市街地は南背後に立地する洲本城の城下町として中世に成立し、江戸時代には阿波蜂須賀藩の政庁が置かれることによって発展した。また、明治期にも郡役所などが設置されたことにより、洲本は長く淡路の政治・経済の中核を担ってきた。その後、昭和15年に市制が敷かれ、昭和30年前後の町村合併によって市街地近郊の農村部との合併が進み今日に至っている。

波毛遺跡は市域南西端の納地区に位置する。同地区は町村合併までは1村であったが、合併時に緑町と洲本市に分離し、波毛遺跡・川添遺跡の両遺跡はいずれも洲本市域側に所在する。波毛遺跡は河川が形成する沖積地に立地し、同遺跡の北側には洲本川と滝池川の合流点が隣接する。そして周辺は現在一面に水田が広がる農村地帯となっている。今回調査した波毛遺跡A・B・C地区は洲本川の西岸、D地区は洲本川と滝池川の間、川添遺跡は滝池川の東岸の山裾に立地する。

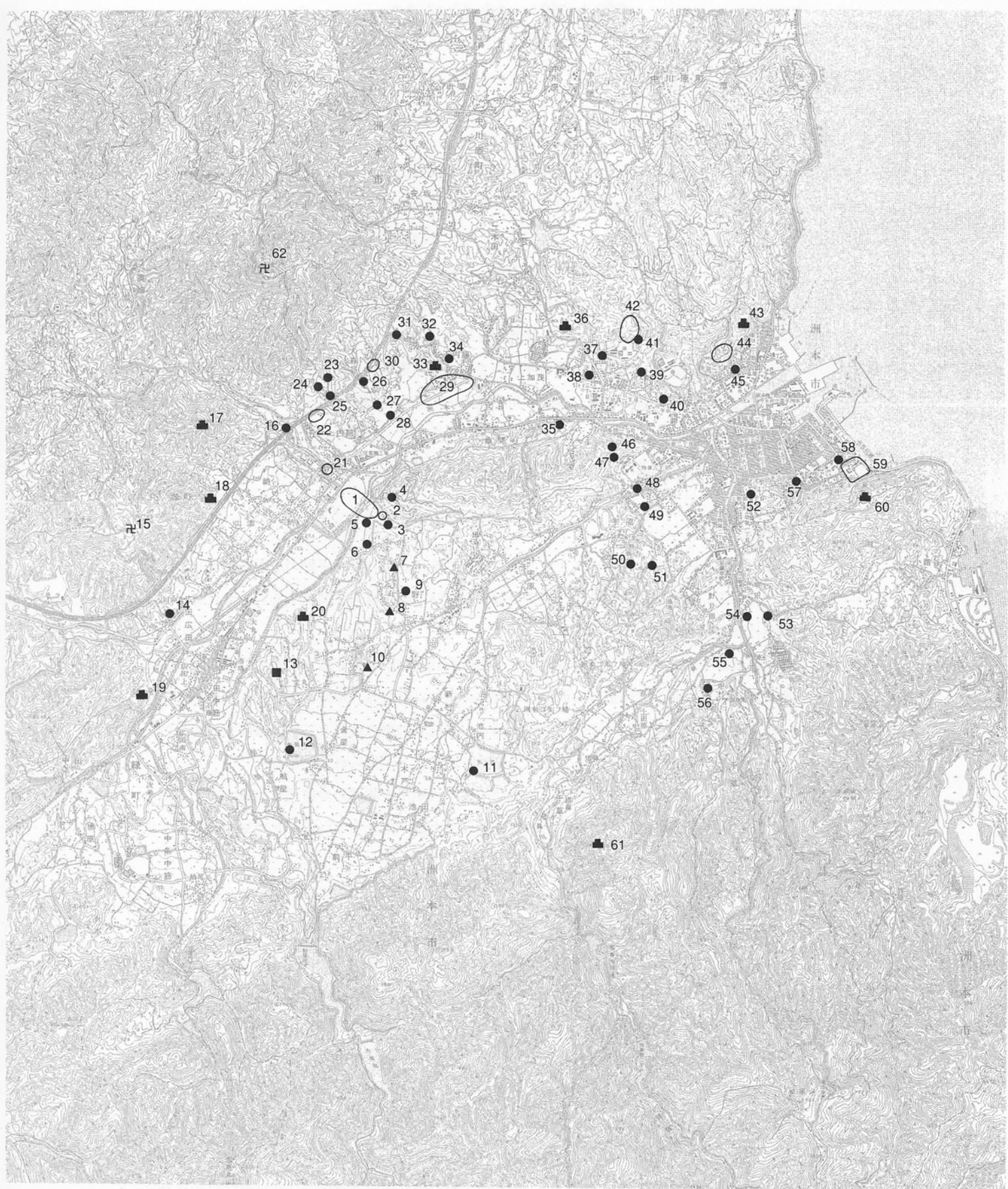
2. 歴史的環境

洲本平野周辺は淡路島内でも遺跡の分布密度の高い地域である。特に沖積平野の広がる洲本川の中流から下流にかけては多くの遺跡が集中する。ここでは波毛遺跡の調査成果に関連する弥生時代以降の遺跡について簡単に周囲の遺跡について述べる。

弥生時代の遺跡ではやはり洲本川流域の沖積地とその縁辺に遺跡が集中するが代表的なものは武山遺跡と下内膳遺跡があげられる。武山遺跡は洲本川下流の沖積地に位置し、中期前半の方形周溝墓が見つかっている。この遺跡は規模など不明な点が多いが洲本川下流域の拠点集落とされる遺跡で、時期的にも弥生時代全般の土器が出土しており長く営まれた遺跡であることが知られている。

下内膳遺跡は先山の山麓に位置する遺跡で、集落はやはり洲本川中流域の沖積地に位置する。前期から後期にかけての遺物が出土しており、紀伊の影響を受けた土器が出土していることで知られ、洲本川中流域の拠点集落と考えられている遺跡である。

こうした長期間継続する拠点集落に対して、中期後半以降からは洲本川中流域の沖積地を望む中位段丘の縁辺や、洲本平野の北を縁取る丘陵地帯に、断続的な集落が営まれるようになる。丘陵上に位置する代表的な遺跡として、大森谷遺跡・下加茂岡遺跡が上げられる。大森谷遺跡は先山遺跡の山麓丘陵上に立地する遺跡で、中期末から後期後半にかけての遺跡である。竪穴住居跡が検出され、遺物には河内・紀伊・瀬戸内東部の影響が認められる。ほかに段丘の縁辺に位置する遺跡としては森遺跡が調査されている。中期後半の竪穴住居跡が検出され、主に中期後半と後期後半の遺物が出土している。中期後半の遺物には簾状文を描いた土器等、畿内的な影響を有している。なお、それまで遺跡の分布しなかつた、千草川流域にも遺跡が中期後期になると出現しはじめる。千草川の支流である樋戸遺跡や太郎池遺跡が知られる。また、これらの集落遺跡とは異なり、弥生時代後期になると海浜に面した地域で、製塩が開始されたことが宮崎遺跡で確認されている。この他、緑町の広田堂丸遺跡では扁平紐六区袈裟襷文



第1図 波毛遺跡・川添遺跡の位置と周辺の遺跡（1：50,000）

銅鐸が出土している。

古墳時代は下内膳遺跡と森遺跡が集落遺跡として知られ、古墳は16基が確認されている。下内膳遺跡は前期に属する竪穴住居が検出され、紀伊の影響を受けた土器を持つ。森遺跡は中期から後期にかけての遺跡で、竪穴住居8棟が検出された。6世紀後半の住居には作り付けの籠が附属する。弥生時代に成立した製塩遺跡はこの時期にさらに盛行しており旧城内遺跡や山下町居屋敷遺跡などが知られている。

古墳は淡路島全体に少ないが、洲本平野周辺もその例外ではない。また、墳形も円墳に限られ、前方後円墳は認められない。分布も洲本川下流域の丘陵上や旧海浜に面した丘陵上に多く、洲本川中流域や千草川流域には少ない。特に、弥生時代以降、下内膳遺跡を中心に多くの遺跡が認められる洲本川中流域では、わずか1基が認められるにすぎない。

前期古墳は下加茂コヤダニ古墳のみであるが、同墳の主体部は竪穴石室であったようで、島内で唯一三角縁神獸鏡が出土した古墳として知られている。前期の可能性のある古墳としてはこの他、宇山牧場1号墳がある。同墳は大正年間の畜産試験場建設に際して五銖銭数枚と素文鏡1面が出土したという。

中期に属する確実な古墳は今のところなく、その様相を述べることはできない。但し、バベの森古墳・下加茂岡古墳・宇山牧場2号墳などは後期より若干時期が古くなる可能性が残されている。バベの森古墳・下加茂岡古墳の2墳は緑泥片岩を使用した箱式石棺を埋葬主体とした古墳として知られる。

後期古墳も全体には数が少なく、群集墳は下加茂岡古墳群が知られるのみである。同古墳群は円墳4基と墳形不明の2基からなり2号墳は横穴式石室を主体部に持つ。この他の古墳は単独で立地しており、曲田山古墳・亀谷古墳・明田丸山古墳・先山古墳などが知られる。

律令期になると淡路島は淡路国とされ、津名郡と三原郡の2郡が置かれた。洲本周辺は津名郡に属し諸説があるものの「物部」・「加茂」・「広田」の各郷があった。各郷の位置は物部郷が千草川流域、加茂郷が洲本川の下流域から中流域にかけて、広田郷が洲本川中流域から上流域とされる。また、淡路国は紀伊から阿波にかけて通る南海道のルートとなるが、この沿線となる洲本平野には大野駅が置かれた。大野駅は現在の洲本市大野付近に比定されている。

周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1.	波毛遺跡	22.	森遺跡	43.	炬口城跡
2.	川添遺跡	23.	尾筋丸山遺跡	44.	宇山牧場古墳群
3.	栗林遺跡	24.	ハタ遺跡	45.	脇遺跡
4.	先山遺跡	25.	尾筋岡遺跡	46.	亀谷山遺跡
5.	戸狩遺跡	26.	大森谷浜田遺跡	47.	亀谷古墳
6.	寺田遺跡	27.	大森谷里遺跡	48.	馬木遺跡A地点
7.	土生寺窯跡	28.	方城遺跡	49.	馬木遺跡B地点
8.	新宮窯跡	29.	下内膳遺跡	50.	太郎池遺跡
9.	野上遺跡	30.	大森谷遺跡	51.	深田遺跡
10.	宮林瓦窯跡	31.	野上遺跡	52.	曲田山古墳
11.	池の内大池遺跡	32.	西の森遺跡	53.	明田丸古墳
12.	金屋池遺跡	33.	安宅氏館	54.	明田遺跡
13.	伝堂丸銅鐸出土地	34.	道下池遺跡	55.	野上遺跡
14.	宮の筋遺跡	35.	尾崎遺跡	56.	丁遺跡
15.	大宮寺	36.	彦山城跡	57.	居屋敷遺跡
16.	大西遺跡	37.	下加茂岡遺跡	58.	山下町居屋敷遺跡
17.	羽風山城跡	38.	下加茂遺跡	59.	旧城内遺跡
18.	山添城跡	39.	空の谷遺跡	60.	洲本城跡
19.	広田城	40.	武山遺跡	61.	猪鼻城跡
20.	勝間城跡	41.	下加茂コヤダニ古墳	62.	先山先光寺
21.	寺中遺跡	42.	下加茂岡古墳群		

奈良時代の遺跡としては集落遺跡と窯業遺跡がある。集落遺跡と考えられるものに下内膳遺跡・里池遺跡・馬木遺跡・中村遺跡などがあるが、下内膳遺跡では官衙的な要素を持つ建物群が検出された。

また、窯業遺跡は庄慶陶瓦窯址・土生寺陶瓦窯址・新宮窯址・官林瓦窯址などが知られ、庄慶陶瓦窯址では調査が行われた。

中世になると淡路では鎌倉時代に佐々木氏、室町時代に細川氏が守護職に就き、三原郡の養宜の地に館を構えた。しかし、戦国時代になると細川氏の内紛に乗じて、同氏の被官身分から台頭した三好氏によって、永正16年(1519年) 淡路細川氏は没落させられる。この事件の頃、三好方の有力国人である安宅氏が洲本城を築城し、洲本を淡路経営の拠点の1つとしたようである。これによって、淡路における洲本の政治拠点としての位置が確立された。この戦国期になると洲本周辺にも多数の城館が築城されるようになる。洲本平野では安宅氏館、勝間城(緑町)、中ノ堂(同左)などの館ないし丘城や、山城では洲本城・炬口城・猪鼻山城・彦山城・羽風山城(緑町)・山添城(同左)・広田城(同左)などが築かれた。

この内、安宅氏館では丘陵の麓から16世紀代の遺物が見つかっており、猪鼻山城では礎石建物の存在が明らかになっている。しかし、彦山城は土取りによって昭和40年代に破壊され、猪鼻山城でも建物発見の動機となったのは主要郭の破壊に伴う調査が契機であった。

第2節 調査の経過

1. 波毛遺跡の調査

分布調査

建設省近畿地方建設局兵庫国道工事事務所は洲本市街における交通混雑を緩和させ、神戸淡路鳴門自動車道とのアクセスを図るため、洲本市炬口～納の区間に一般国道28号(洲本バイパス)の建設を計画した。事業に先立ち、同事務所から依頼を受けた兵庫県教育委員会は、平成元年12月および平成2年4月に道路建設予定地内における埋蔵文化財の分布調査を実施した。その結果、8箇所の地点(No.1～8地点)で遺物の散布や古墳状隆起などを認めた。

確認調査

この成果を受けて、平成3年7月に納地区のNo.1・2地点で確認調査を行った。掘削した6本の試掘溝(トレンチ)のうち洲本川と滝池川に挟まれたトレント1・2では古墳時代と弥生時代中期の2面の遺構面を検出し、住居跡や柱穴などの存在を確認した。洲本川左岸のトレント3では弥生時代中期の遺構面を検出し、住居跡や溝などの存在を確認した。さらに現国道まで達する区間に設定したトレント4～7では、中世以前の水田面を複数面検出した。全体としてはトレント1～3の区間が自然堤防上の居住域であり、トレント4～7の区間が水田耕作を行う後背湿地と考えられる。

全面調査

全面調査は洲本川と滝池川に挟まれたD地区($2,202\text{m}^2$)を平成3年12月～平成4年3月に、洲本川から現国道までのA～C地区($6,671\text{m}^2$)を平成4年5月～12月の期間で行った。

2. 川添遺跡の調査

確認調査

前述の分布調査の成果を受けて、平成2年6月13日～6月22日にかけて大野下地区のNo.4地点で確認調査を行った。調査は市道大野桑間線から滝池川までの範囲で、19箇所の試掘坪（グリッド）のうち滝池川寄りのNo.16～19グリッドにおいて遺構・遺物の存在を確認した。

全面調査

確認調査の結果、工事予定地の内、遺物包含層、遺構の存在が確認された滝池川右岸の約1,000m²について、平成2年12月19日～平成3年3月15日にかけて全面調査を実施した。

3. その他の地点

分布調査で指摘した8箇所の地点のうち、滝池川河床にあたるNo.3地点は現河川であり、採集した遺物もNo.2・4地点からの混入と考えられるため、調査は実施しなかった。

古墳状隆起とされた宇原地区のNo.5地点については平成4年1月に再調査を行い、墳丘裾部が工事掘削範囲に含まれないことを確認した。

桑間・宇山・炬口地区のNo.6～8地点については、今後用地買収等の進捗に伴って調査を実施する予定である。

4. 出土品整理・報告書作成作業

出土品の整理作業は平成10・11年度の2箇年度に分けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

平成10年度

土器・石器の接合・補強、実測・拓本、復元、写真撮影を行った。また金属器については保存処理、実測、写真撮影を行った。

調査担当職員 岡田章一、中川渉、山上雅弘、鈴木敬二

整理担当職員 加古千恵子・長濱誠司

整理担当嘱託員 栗山美奈、八木和子、宮田麻子、本窪田英子、小山みゆき、和田寿佐子、石野照代
茨木恵美子、前田千栄子、飯田章子、鈴木まき子、横山キクエ、竹内泰子
萩原聰美、岸野奈津子、岡田美穂、山口幸恵、真子ふさ恵、宮野正子、前川悦子
藤川紀子

日々雇用職員 岡井とし子、溝上くみ、川村由紀

平成11年度

遺物実測図・遺構図のトレースおよび遺構・遺物図版と写真図版のレイアウトを行い、原稿執筆・編集作業を経て、印刷・報告書刊行に至った。

調査担当職員 岡田章一、中川渉、山上雅弘、鈴木敬二

整理担当職員 岡田章一

整理担当嘱託員 杉本淳子、岡田美穂

第2章 波毛遺跡

第1節 平成3年度の調査（D地区）

1. 概要

D地区は洲本川と滝池川にはさまれた沖積地に位置しており、北西—南東方向に調査区を設定した。調査区は5面の水田にまたがるが、特に北東側の半分は水田の段差で1段低くなっている。調査では上下2面で遺構を検出した。

上層の第1面では古墳時代中期の集落および古墳時代～平安時代にかけての旧河道を検出した。主な遺構には古墳時代中期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡などがある。なお旧河道が埋積した上面では、地震の痕跡を示す噴砂も認められた。

第2面では弥生時代前期～後期の集落を調査し、弥生時代前期の土坑、中期後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・焼土坑、後期の溝などを検出した。

2. 土層断面図

図版12に調査区北西壁から一部北東壁にかけての断面図（A-A'・B-B'断面）を掲載した。この図では西側の微高地から東側の旧河道に至る様子が見て取れる。ただし微高地の落ち際が現代の水路で失われているため、微高地と旧河道の土層のつながりを直接確かめられなかった。

第1面の遺構は6b層上面で検出した。遺構面の標高は10.7～10.1mで、西寄りに微高地の中心があつて遺構も集中しており、東へ行くほど低く遺構も疎らになる。また北東側半分は水田の段差の影響で1段低く、北隅の旧河道以外はほとんど遺構が認められなかった。旧河道肩部の黒色シルト層（C-C'断面の2a層）からは古墳時代中期の土器が出土しており、第1面の時期には河道が機能していたことが判る。その後この河道は9世紀代の須恵器を含む洪水砂（⑨層）で埋まり、以降は洪水による堆積と水田耕作による土壤化を交互に繰り返している（①～⑧層）。

第2面の遺構は第1面との間に7層をはさんで、約40cm下層の8a層上面で検出した。遺構面の標高は10.3～9.4mで、やはり西寄りに微高地の中心があつて遺構も集中している。この時期に河道が存在していたかどうかは北西壁の断面では不明であったため、旧河道の断ち割り断面（C-C'断面）で観察した。しかし古墳時代中期の堆積（2a層）以前の堆積層（3b層）には遺物が含まれておらず、やはり河道の形成時期を判断する根拠は得られなかった。

3. D地区第1面の調査

竪穴住居S H101（図版5）

調査区西隅で南東側の約1/3を検出したが、残りは調査区外である。平面プランは方形で、北東—南西辺が5.0m、検出面からの深さが0.4mである。構造は4本柱で、そのうちの2本を検出した。柱の掘り方の直径は0.3m、深さは0.5mほどである。壁際には周壁溝をめぐらせ、南東辺から2本の柱に向かって直角に溝をつないでいる。さらに南東辺壁際の中央からやや東寄りに、径1.2×0.55m、深さ0.4mの土坑を設けており、埋土には炭・焼土を含んでいる。

なおこのS H101はいわゆる焼失住居で、建築材の一部が炭化して放射状に横たわっている。また床面付近にも炭・焼土の混じった層の堆積が認められる。

床面付近の遺物には、南東辺壁際の土坑肩部から出土した土師器甕(5)、西側の柱穴横の土師器高杯(3)などがある。

出土遺物（図版33-1~7）

埋土・床面および壁際の土坑から土師器壺・鉢・高杯・甕、須恵器杯蓋・甕、フイゴ羽口が出土し、そのうち7点を図化した。

土師器

直口壺(1)

扁球形の体部から、直線的な口縁部がやや上外方に伸びる。体部外面の上半部は横方向のミガキ、内面の下半部はハケメで仕上げ、口縁部の内外面には縦方向のミガキを施す。口径8.3cm、胴部最大径16.0cmである。

鉢(2)

椀形の鉢で、底部はほとんど平坦面をもたない。口径9.0cm、器高5.7cmである。

高杯(3・4)

3は皿状の杯部をもち、口縁端部は平坦に収める。脚部は欠失している。口径13.7cmである。

4は脚部の破片で、杯部と裾部を欠失している。

甕(5)

やや下膨れの球形の体部から、口縁部がくの字に屈曲する。表面の調整は磨滅のためよく判らないが、おそらくナデによるとみられる。口径14.4cm、器高21.8cmである。

フイゴ羽口(6・7)

いずれも羽口先端の断片で、熱を受けて赤変し、縁にガラス状の物質が付着している。6は外径4.9cm、内径1.5cm、7は外径6.0cm、内径2.1cm程度に復元できる。

竪穴住居S H102（図版6）

S H101の約10m南東に位置する。平面プランは西隅が突出する歪な方形で、北東-南西辺が4.6m、北西-南東辺が4.8m、検出面からの深さが最大0.3mである。構造は4本柱で、柱の掘り方の直径は0.2m弱、深さは0.4mほどである。壁際の周壁溝はなく、床面中央に0.3×0.4mの範囲の焼土面がある。

北東辺壁際の床面から、土師器小型丸底壺(10)、磨石(S 2)が出土している。

出土遺物（図版33-8~11、41-S 2・M1）

埋土・床面および柱穴から土師器小型丸底壺・高杯・壺・甕、磨石、鉄製釣針、炭化米が出土し、そのうち6点を図化した。

土師器

小型丸底壺(8~10)

8は小振りの体部から口縁部が大きく開く。口径9.6cm、器高6.5cmである。

9は扁球形の体部から口縁部が屈曲して開くが、口径は胴部最大径を超えない。口径9.0cm、胴部最大径9.7cm、器高9.0cmである。

10は扁球形の体部から口縁部が鋭く屈曲し、口径は胴部最大径を凌ぐ。口径11.0cm、胴部最大径10.2cm、器高10.8cmである。

高杯(11)

杯部は水平な底面から、稜をもって上外方に直線的に開く。脚部との結合部には円板充填を行うが、脚部以下は欠失する。口径22.3cmである。

石器

磨石(S2)

長楕円形の平滑な自然礫で、両端と側面に使用痕が認められる。長さ139.8mm、幅69.3mm、厚み57.3mm、重さ784.3gである。

鉄器

鉄製釣針(M1)

錆びでほとんど実体が判らなかったが、X線写真で逆鉤が認められたことから釣針であることが判明した。残存しているのは弯曲部から逆鉤にかけての部分で、先端と元部は欠失している。失われた先端部にも逆鉤があるならば、2重の逆鉤をもつ釣針となる。残存長29.2mm、径2.9mmである。

竪穴住居S H103～105（図版7）

調査区西隅の南西壁断面で竪穴住居の落ち込みを確認したため、調査区を一部拡張して精査した。その結果、互いに切りあった3棟の住居跡を検出した。切り合い関係は古い方からS H103→S H105→S H104の順である。

最も新しいS H104は、調査区の中で北西半部のみ検出した。平面プランは方形で、北東一南西辺が5.55m、検出面からの深さが0.4mである。構造は4本柱で、そのうちの2本(P5・6)を検出した。柱の掘り方の直径は0.35m、深さは0.5mほどである。壁際には周壁溝をめぐらせ、床面中央に径0.5mの焼土面とその周囲を取り巻く炭層の広がりがある。北西辺壁際の床面から、土師器壺(14)・高杯(18)が出土している。

S H105はS H104から北東へ約1m平行にずれた場所にあり、南西側の大半をS H104に切られたため、北隅と北東辺の一部を検出できたにすぎない。平面プランは方形で、柱間からみてS H104と同程度の規模だったとみられる。検出面からの深さは0.25mで床面の大半は残っていないが、周壁溝がめぐっていたことは判明した。構造は4本柱で、そのうちの2本(P7・8)を検出した。柱の掘り方の直径は0.2～0.35m、深さは0.55～0.65mである。

最も古いS H103はS H104から北西へ約2m平行にずれた場所にあり、南東半部をS H105に切られている。また北東辺も側溝の掘削で失われている。4本の柱(P1～4)の配置からみて、平面プランはやや歪な長方形の可能性があり、北東一南西辺が4.4m、北西一南東辺が5.5m程度に復原できる。検出面からの深さは0.1mで、3棟の住居は新しいものほど深くなっている。柱の掘り方の直径は0.3m、深さは0.45mである。周壁溝は認められなかった。

出土遺物（図版33-14～18、41-M2・M3）

S H103からは土師器鉢・鍋・壺・甕・手づくね土器、鉄滓が出土し、そのうち2点を図化した。またS H104からは土師器壺・鉢・甕・高杯・小型丸底壺、須恵器甕、鉄刀子、鉄滓が出土し、そのうち

7点を図化した。須恵器甕は両面のタタキを磨り消した破片であったが、図化はできなかった。S H105の遺物は土師器壺・高杯・小型丸底壺の細片ばかりで、図化にはいたらなかった。

S H103出土遺物

土師器

鉢(12)

椀形の鉢の口縁部の破片である。口径13.8cmである。

鍋(13)

体部上半から口縁部にかけて直立する大型の鍋で、強めのナデで頸部を緩く区画する。口縁部はやや肥厚する。体部内外面は縦方向のハケメ、口頸部内面は横方向のハケメで仕上げる。口径はおよそ32cmである。

S H104出土遺物

土師器

壺(14)

丸い肩部から口縁部が鋭く外反する。肩部外面は縦方向のハケメで仕上げる。口径13.8cmである。

鉢(15)

椀形、丸底の鉢である。外面はユビナデとユビオサエ、内面はイタナデとユビナデで仕上げる。口径12.0cm、器高5.2cmである。

甕(16)

緩く外反する口頸部の破片である。口径15.8cmである。

高杯(17・18)

17は椀状の杯部の破片で、脚部を欠失している。口径20.1cmである。

18は全形を窺える高杯である。杯部は水平な底部の側方に面をとり、その上から口縁部が立ち上がり外反する。口径19.8cm、底径12.7cm、器高16.6cmである。

鉄器

鉄刀子(M2・M3)

M2は刃部から関部にかけての破片で、刃部と柄部の大半を失っている。残存長30.2mm、幅15.5mmである。

M3は柄部の破片で、刃部を失っている。残存長53.5mm、幅11.5mmである。

掘立柱建物 S B101 (図版8)

調査区分西壁際の中央付近に位置する。梁間2間×桁行3間の総柱建物で、柱間は梁間が2.1~2.3m、桁行が1.5~2.0m、面積は24.2m²である。12本の柱のうち、外側の10本は掘り方の直径0.3~0.4m、深さ0.5~0.6mで比較的大きいのに対し、内側の2本は直径0.2~0.25m、深さ0.2~0.3mで、補助的な柱であったとみられる。建物の方位は桁行がN50° Eである。

柱穴から図化できるような遺物は出土しなかった。

掘立柱建物 S B102 (図版9)

S B101の北東側に約3mの間隔をおいて位置する。梁間2間×桁行3間の建物で、柱間は梁間が1.8~1.9m、桁行が1.2~1.6m、面積は14.4m²である。柱の掘り方は直径0.2m、深さ0.1~0.45mで、S B101に比べて貧弱な柱を用いている。建物の方位は桁行がN58° Eで、S B101と大差ない数値である。また建物の北西辺に沿って細い溝があり、雨落ち溝とみられる。

柱穴から図化できるような遺物は出土しなかった。

掘立柱建物 S B103 (図版10)

S H101の南東側に約1mの間隔をおいて位置する。2間×2間の建物で、柱間は1.6m、面積は10.2m²である。柱の掘り方は直径0.3~0.4m、深さ0.4~0.6mである。建物の方位はN50° Eで、S B101とはほぼ同じである。柱穴から図化できるような遺物は出土しなかった。

旧河道 S R101 (図版11・12)

調査区の北東半部は現代の水田の段差の影響で1段低くなっているが、元々微高地に対して低い部分で、遺構も疎らである。このうち調査区の北隅にあたる箇所で、旧河道の輪郭を検出した。

旧河道は調査区の北西壁から北東壁にかけての角を円く抉り取るように曲流している。図版12下右の断ち割り断面図（C-C'断面）を観察すると、水平堆積をみせる自然堤防に対して急激な崖面を形成しており、攻撃斜面だったために受けた浸食作用の結果が見て取れる。この崖面は、2a層に古墳時代前期～中期の土器(22~30)が含まれるため、第1面の遺構が営まれた時期には既に存在していた。しかし第2面と旧河道の層位関係は不明で、崖面の形成時期がどこまで遡るかも確定できない。

河道は9世紀代の須恵器(19~21)を含む分厚い洪水砂（1b層）で一気に埋積しており、平安時代頃には水田化（1a層）していたようである。

なおこの1a層の上面で、地震の痕跡を示す噴砂を検出した。噴砂の方位は大きくN40° WとN60° Wのものがあり、いずれも跋行状に細砂～粗砂を噴出させている。断面観察によると、これは1b層が液状化して1a層以上を突破したもので、北東壁断面（B-B'断面）ではC-C'断面の1a層に対応する⑨a層より上位の⑦b層を貫いている部分が認められる。ただしE-E'断面では逆に噴砂が1a層による土壤化作用を受けており、噴砂を引き起こした地震が1回切りではなかったことを示している。この地域は百数十年周期の南海地震の震源となる南海トラフに近いことから、平安時代～現代までこうした現象が繰り返し起こっているものと見なされる。

出土遺物 (図版34-19~30、図版41-S1)

洪水砂層（1b層）から平安時代の須恵器杯・壺が、黒色シルト層（2a層）から古墳時代前期～中期の土師器壺・小型丸底壺・高杯・手づくね土器・甕・椀、有孔円板が出土し、そのうち13点を図化した。

須恵器

杯A (19)

底部の破片で、切り離しは回転ヘラキリによって行う。底径10.3cmである。

杯B (20)

輪高台をもつ底部の破片で、切り離しは回転ヘラキリによって行う。底径8.5cmである。

壺底部(21)

内傾する輪高台をもつ底部の破片である。高台の高さは1.8cmあり、一部に焼け歪みが認められる。体部外面には格子タタキの痕跡が残る。底径7.9cmである。

土師器

壺(22・23・27)

22は二重口縁の破片で、口縁端部を平たく収める。口径15.7cmである。

23は体部の破片で、外面を縦から斜め方向のハケメ、内面を斜め方向のケズリで仕上げる。22・23の胎土は褐色がかった色調を呈していて他の土器とは異なっており、両者は同一個体の可能性もある。

27は二重口縁をもつ小型の壺で、口縁部外面を2条の強いナデで凹線風に仕上げる。口径10.0cm、器高10.6cmである。

小型丸底壺(24~26)

24は扁球形の体部から口縁部が屈曲し、内湾気味に立ち上がる。底部は平たく作る。体部から口縁部の内面はイタナデで仕上げる。口径10.0cm、器高10.6cmである。

25・26は扁球形の体部から口縁部が屈曲し、直線的に開く。25は口径8.8cm、器高7.7cm、26は口径8.0cm、器高8.7cmである。

手づくね土器(28)

手づくね成形で、椀形に仕上げている。口径6.8cm、器高4.6cmである。

高杯(29・30)

29は杯部の破片で、水平な底部から面をもって口縁部が開いている。口径16.4cmである。

30は口縁端部を失っているが、椀形の杯部をもつ高杯である。脚柱部内面には横方向のヘラケズリを施している。底径10.4cmである。

石製品

有孔円板(S1)

明緑灰色を呈する軟質石材の円板に双孔を開けている。ただし向かって右側の孔は貫通しないままの孔と切り合っており、さらに反対側から穿った孔もわずかに覗いている。4つの孔のうち右側の3つは穿孔方向がはっきり判る状態で、未完成といえる。表面の研磨も図化した方の面はある程度なされているが、裏面は全く施されていない。側面も部分的に面をとっているものの完全ではない。従って、S1は製作途中の失敗品とみられる。大きさは直径39mm前後、厚み3.7mm、重さ9.2gである。

包含層出土の遺物（図版34-31~38）

第1面の包含層からは古墳時代の須恵器杯・壺・甕・高杯、土師器小型丸底壺・壺・甕・高杯・椀、鉄滓などが出土している。この中に窯壁が融着した須恵器甕の破片が2点あり、付近の窯跡から持ち込まれたものとみられる。8点の土器を図化した。

須恵器

杯蓋(31)

口縁部は高く立ち上がり、端部に凹線状の面をとる。天井部も高く、外面をロクロケズリで調整する。口径13.0cm、器高4.5cmである。

壺(32)

大きく外反する口頸部の破片で、口縁端部内面には匙面をとり、外面には凹線を施す。頸部外面には2条の凹線を巡らし、その間に櫛描波状文を施す。口径15.6cmである。

土師器

小型丸底壺(33・34)

33の体部下半は手づくり成形で、ユビオサエの痕が残る。口縁部は体部から緩く屈曲して直線的に開く。口径8.8cm、器高5.6cmである。

34は扁球形の体部から口縁部がくの字に屈曲して直線的に開く。外面にはハケメの痕跡が残る。口径10.3cm、器高8.6cmである。

壺(35)

二重口縁をもつ壺で、体部上半までが遺存している。二重口縁の外面の稜は甘く、端部は面をとる。肩部はほとんど張らず、胴部最大径は中位のようである。口径14.6cmである。

甕(36)

体部は寸胴で、長胴になるとみられる。外面はハケメで仕上げる。口縁部は短く開き、接合痕が顕著である。口径15.4cmである。

高杯(37・38)

37・38は杯部底面から口縁部が稜をもって上外方へ開く。脚部との接合面には円板を充填する。38の脚部は磨滅が著しいため、図上で接合復元している。37は口径16.4cm、38は口径16.4cm、器高11.5cmである。

4. D地区第2面の調査

豎穴住居S H200（図版12）

調査区北西壁西寄りの断面（図版12上の断面図参照）で、幅4.8m、深さ0.3mの大きさの豎穴住居の落ち込みを確認した。しかし住居の続きは側溝より内側に届いておらず、大部分は調査区外に残されていたが、洲本川の堤防の下にあたるため掘削は不可能であった。わずか数10cmの側溝を隔てて輪郭が途切れているところからみて、住居は方形プランであったとみられる。

住居構造は不明であるが、壁際には周壁溝をめぐらしていた。また床面近くが熱を受けて赤変し、焼土・炭・炭化材を含むところから、焼失住居だったようである。遺物は土器の細片ばかりで、時期の判るようなものはない。

掘立柱建物S B201（図版14）

調査区西隅付近に位置する。梁間1間×桁行5間の建物で、柱間は桁行の1.1～1.4mに対し、梁間が3.7～3.8mもあるが、棟持ち柱は認められない。面積は24.7m²である。柱の掘り方は直径0.2～0.3m、深さ0.6～0.8mである。建物の方位は桁行がN65° Eである。

柱を抜き取った後の柱痕からは弥生土器が出土しており、片付けあるいは祭祀に伴う埋納行為とみられる。特にP7では大きく割った大型壺(40)の破片を重ねて柱痕内に突っ込んでおり、何か特別に柱穴を埋めようとした配慮が感じられる。

また包含層掘削・遺構精査の際にS B201の上面辺りで出土した弥生土器があり、時期的にも矛盾がないため、ここに併せて掲載する。

出土遺物（図版35—39～50）

39～44は柱穴内から、45～50はS B201周辺の精査時に出土した土器である。

弥生土器

甕(39・50)

39はP6から出土した。39・50とも口縁部が頸部で強く屈曲し、端部を上につまみ上げて外面に面をとる。体部は肩が張らず、口径を上回ることはない。口径は39が14.5cm、50が21.3cmである。

壺体部(40・46)

40はP7の柱痕から出土した大型の壺の体部で、口頸部と底部の破片は含まれていなかった。体部外面の文様は上から櫛描直線文3条、櫛描斜格子文、櫛描直線文2条、櫛描波状文の順に施す。外面の下半部は縦方向のヘラミガキ、内面はハケメで仕上げる。残存高は39.5cm、胴部最大径は36.2cmである。

46は肩部から頸部にかけて緩やかな曲線を描く大型の壺で、口縁部と胴部以下を欠失している。頸部文様として6条の簾状文がある。頸部径はおよそ18cmである。

鉢(41)

P4から出土した。残存率が低いため口径・傾きが不明確なものの、口径36cmに達する大型の鉢に復元した。体部は扁球形で、口縁端部を玉縁状に肥厚させる。大型の器形の割に器壁は5～6mmと薄く、口縁部から内面にかけてはスリップをかけて丁寧に仕上げている。一方、体部外面は斜め方向のタタキのままである。底部は欠失しているが、脚部が付く可能性もある。

台付き鉢(42)

P7およびS B202のP3・P8から同一個体の破片が出土した。体部下半から脚部にかけてが遺存しており、丸い底部に器台状の脚部が付く。脚部の中位には円形の透かしが恐らく6単位で入り、下半に3条の凹線を施す。脚部内面は横方向のヘラケズリで調整する。底径は16.6cmである。

高杯(43・44・49)

いずれも杯部の底面から口縁部が垂直に立ち上がる高杯で、脚部を欠失している。43は口縁部の上下端に1～2条の凹線を施す。口径は43が20.3cm、44が24.4cm、49が21.6cmである。

短頸壺(45)

口縁部は頸部で短く屈曲し、端部を拡張させて3条の凹線文を施す。口径は30.0cmである。

壺蓋(47)

低平な器形で、口縁端部は平たく収まる。頂部は欠失しているため、つまみの部分は不明である。口径は17.4cmである。

無頸壺(48)

内傾する体部の端部を内側につまみ出し、平坦な口縁部をつくる。口縁部外面には2条の凹線を施す。口縁部の孔は1箇所しか残っていないため、本来の単位は不明である。口径は15.6cmである。

掘立柱建物 S B202（図版15）

調査区西隅で、S B201の北4mに位置する。調査時には認識していなかったが、柱の並びや出土遺

物などから、梁間1間×桁行3間以上の建物が復元できると考えられる。柱間は梁間が2.3~2.5m、桁行が0.9~1.4mで、現状の面積は8.1m²である。柱の掘り方は直径0.15~0.35m、深さ0.2~0.7mである。建物の方位は桁行がおよそN85°Eで、ほぼ東西方向を向いている。

柱を抜き取った後の柱痕から弥生土器とサヌカイトの剥片が出土している。中でもP3・P8からはS B201のP7出土の台付き鉢(42)に接合する破片が出土しており、2つの建物が同時に廃絶したことを物語っている。サヌカイトの剥片はP1・P4から出土しており、特にP1には接合資料を含む14点の剥片が詰め込まれていた。

なお建物の中軸の延長線上付近に位置するP9や、P4脇のP10、直口壺(59)が出土したSD201内の落ち込み(P11)も建物に関連する柱の可能性がある。

出土遺物（図版36-51・52・59、図版41-S4~S7）

建物とそれに関連する柱穴から弥生土器とサヌカイトの石器が出土している。そのうち台付き鉢(42)は前述しているので省く。

弥生土器

広口壺(51)

P9とSD201から出土した土器が接合した。頸部から口縁部が大きく外反し、端部の文様帶に3条の凹線文を施す。頸部から肩部にかけては櫛描波状文と櫛描直線文を交互に繰り返す。口径は21.0cmである。

壺(52)

P8から出土した。平底から体部が鋭角に立ち上がる。磨滅しているが、内面の調整はナデによるものとみられる。底径は5.7cmである。

直口壺(59)

P11から出土した。口縁部は緩く開きながら立ち上がり、端部を平たく収める。口縁部外面には3条の凹線文、頸部にはキザミメを施す。内外面ともハケメで調整する。口径は19.5cmである。

石器

削器(S4・S5)

台形の剥片の一側縁を刃部としているが、刃部にほとんど二次加工が認められない。側縁および片面に自然面を残している。S4は長さ53.2mm、幅63.1mm、厚さ12.0mm、重さ45.2g、S5は長さ69.5mm、幅69.0mm、厚さ21.0mm、重さ110.5gである。

楔形石器(S6・S7)

三方の側縁を切断もしくは自然面を残した台形の剥片の、残る一側縁とそれに相対する側縁に剥離を施す。S6は長さ48.5mm、幅38.5mm、厚さ17.5mm、重さ26.5g、S7は長さ26.3mm、幅34.5mm、厚さ7.0mm、重さ7.8gである。

工房跡S X201（図版16）

調査区中央部の北東壁際付近に位置し、SD209北端東側の一段低い場所に立地する。平面プランは隅丸長方形で、長軸4.1m×短軸2.6m、深さ0.2mの竪穴住居状の掘り込みを呈している。しかし規模が小さいことや、柱穴・周壁溝・中央土坑といった上屋構造に関連する施設が無いなど、一般的な住居

とは構造が著しく異なっている。一方、床面の南半部では径1.8mの範囲に炭・焼土が広がり、南に片寄った箇所で盛んに火を焚いていたようである。この他、砥石(S3)が出土していることなども加味すると、何らかの工房跡と考えられる。

出土遺物には弥生土器・砥石がある。

出土遺物 (図版36-53・54、図版41-S3)

弥生土器

直口壺(53)

口縁端部上面は平坦で、端部外面に強いナデを施す。内面はハケメで調整する。口径は12.4cmである。

甕(54)

口縁部は頸部から水平に近く屈曲する。胴部最大径は口径を凌がない。内面はハケメで調整する。口径は17.7cmである。

石 器

砥石(S3)

緻密な凝灰岩質で、不整な直方体をしている。一部欠損しているものの、ほぼ各面を使用している。

長さ84.3mm、幅34.3mm、厚さ14.5mm、重さ85.2gである。

焼土坑 S X202 (図版17)

調査区中央部のやや東寄りに位置し、S X202から南南東へ15mの距離にある。精査時に焼土のブロックをいくつか検出したため、畦を設定して焼土の部分を残しながら掘り下げた。その結果、東西4m、南北3mほどの範囲一面に、不整形な掘り込みと焼土塊の盛り上がりからなる遺構を表出した。これは浅い掘り込みを伴って強い燃焼を繰り返した結果とみられ、特に強く焼けた箇所が散在する状況である。ただし断面観察では1回ごとの単位を明確にすることはできなかった。燃焼はかなりの高温に達したとみられ、完全に焼土と化している部分は濃いトーン、熱を受けて赤変している部分は薄いトーンで表している。

埋土からは若干の土器片が出土したのみで、他にこの遺構の目的を示すような遺物は得られなかった。また数箇所で土のサンプリング・洗浄を行ったものの、生産の残滓といえるような遺留物も見つからなかった。

結局このS X202は大掛かりな火を何度も焚いたという痕跡を残すばかりで、その性格に結びつくような遺物、例えば羽口・鋳型・鉱滓・破損品などといった手掛けりは1つも得られなかった。そこでここでこの遺構を焼土坑と呼ぶことにし、性格については現段階では保留せざるをえない。

出土遺物 (図版36-55)

弥生土器

甕(55)

底部の細片で、熱を受けて表面が多孔質になっている。底径は4.8cmである。

土坑 S K204 (図版19)

調査区北東壁側で、S X202から北西8mに位置する。平面円形で、径0.5m、深さ0.3mである。

土坑の底から弥生土器の甕の体部が出土している。

土坑 SK205 (第2図)

調査区南隅に位置し、SD217に中央を分断されている。平面橢円形で、径1.7×1.0m、深さ0.15mである。断面観察で埋土の一部が被熱のために赤変している箇所を認めたが、平面的な広がりは判然としなかった。

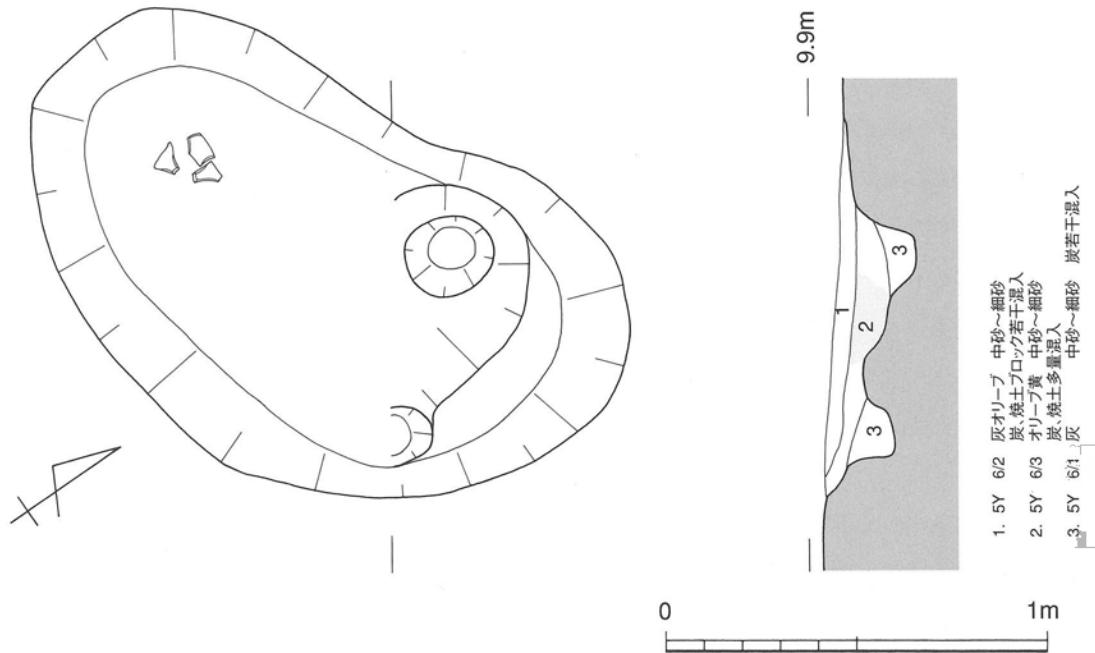
土坑の底から弥生時代前期の甕(56)が出土しており、今回の調査で唯一の前期の遺構である。

出土遺物 (図版36-56)

弥生土器

甕(56)

口縁は緩やかに開き、端部にキザミを施す。体部はや丸みをもつが、胴部最大径は口径に及ばない。頸部には2条のヘラ描き直線文を施す。口径23.9cmである。



第2図 土坑 SK205

溝 SD201 (図版15)

調査区北西壁から南東方向へ直線的に延び、SB202の北東隅をかすめて途切れている。大きさは幅0.3m、深さ0.3mほどだが、SB202に接する付近で切り合いなどのために輪郭が乱れており、遺物もその辺りを中心に出土している。

出土遺物 (図版36-57・58・60、図版41-M4・M5)

弥生土器・鉄器が出土している。

弥生土器

短頸壺(57・58)

57は口縁部の細片であるが、口径25cm余の大型の壺に復元した。口縁端部には3条の擬凹線文を施す。

58は口縁端部に3条の擬凹線文を施したあと、下端にキザミメを行う。体部は口径を大きく凌いで丸く膨らみ、肩部にもキザミメをめぐらす。体部外面は縦方向のハケメで調整し内面にはユビオサエの痕跡を残すものの、厚みを5mm以下に仕上げているところからみてヘラケズリを行った可能性がある。口径23.9cmである。

鉄器

鉄鎌(M4)

長三角形の身部から丸く抉り取ったような関部を経て茎部にいたる。ただし身部の側縁に刃は付けられていない。先端と茎部以下を欠失しているため全形は不明だが、鉄鎌かそれに類する尖頭器の断片とみられる。残存長は33mmである。

鉄鉈(M5)

鉄鉈の破片とみられるが、残りが悪く身部の形状はよく判らない。残存長は37mmである。

溝S D209(図版13・19)

調査区中央を南北方向に横切っており、北端は現代の水田の段差に切られて途切れている。現状の規模は幅0.7~1.7m、深さ0.2mほどで、溝の底は平たく掘り込まれている。傾斜は南から北へ向かって下るが、比高差は26mの延長の中で僅か20cmで、約0.8%の緩やかな勾配である。

S D209は微高地の裾部を廻り込むような場所にあり、この溝を境として西側には建物や住居、東側には工房や焼土坑が設けられている。おそらく居住域と生産域を隔てる区画の意味合いをなすものとみられる。

遺物は弥生土器の壺の小片が出土しているのみである。

溝S D210・211(図版13)

調査区北西壁から東に向かって、1m前後の間隔をおいて2本の溝が並んでいる。S D210はやや円弧を描くように南へ膨らみながら、S D211は直線的に延びており、いずれも旧河道にぶつかった所で途切れている。大きさはS D210が幅0.5~0.9m、深さ0.65m、S D211が幅0.3~0.4m、深さ0.3mで、微高地を乗り越すように鋭角に掘り込まれている。傾斜は西から東へ向かって下り、S D210は約1.4%、S D211は約2.0%の勾配をもつ。

2つの溝から遺物は出土しなかった。

溝S D212~218・220(図版18~20)

調査区の南東端では遺構面の標高が9.8m前後で、居住域に比べて30cm以上低くなっている。この辺りまで来ると柱穴などの遺構はほとんどなく水田土壤層が広がっているが、明確な水田畦畔は認められなかった。さらに水田土壤層を除去した面で多数の溝を検出した。そのうち規模の大きいS D220は、最も標高の低い調査区東隅を南北方向に横切っている。その他のS D212~218は南西壁からS D220あ

るいは南東壁に向かって延びている。これらはS D212・213・218とS D214~217に大きく分けることができる。

S D212・213は南西壁からS D220に向かって細かく蛇行しながら途中で合流し、複雑な軌跡を残す。またS D220に短く取り付くS D218もこれらとよく似ており、こうした幅や深さが一定しない溝は人為的なものかどうか不明である。遺物が全く出土しておらず所属時期は不明であるが、S D212・213はS D215・216を切っている。

S D214は南西壁から東に向かって直線的に延び、途中で途切れている。幅0.4m、深さ0.1mである。S D215・216は南西壁から南東方向に延びたあと、S D215のみ直角に折れてS D220に至る。S D216はそのままS D217につながって南東壁まで直進する。S D215は幅0.3~0.4m、深さ0.2m、S D216~217が幅0.3m、深さ0.15mである。切り合い関係はS D216~217がS D215・S K205を切っている。遺物はS D214から焼土が10数点、S D215から焼土数点と弥生時代中期の甕の破片が出土しており、S X 202があるいは同様な別の遺構との関わりを窺わせている。

S D220は南東壁から北東壁に向かって南北に延びている。幅3.5~4.5m、深さ1.1~1.4m、溝の肩部の標高9.4m前後で、他の溝に比べて格段に大きく、かつ最も低い所に通していることからみて、排水用の水路と考えられる。傾斜は南から北へ向かって下り、約3.3%の勾配をもつ。遺物は下層の緑灰色シルト層・最下層の暗オリーブ灰色シルト層を中心に、弥生時代後期の土器が多く出土している。特に溝の底近くでは、完形品を含む土器のまとまりがみられた。

出土遺物（図版37~61~72）

S D220から弥生土器と焼土塊・サヌカイト剥片が出土しており、12点の土器を図化した。そのうち71は上層から、64・65は下層から、それ以外は最下層からの出土である。

弥生土器

広口壺(61・62)

61は丸く腰を張った体部からまったく肩を張らずに頸部に至り、撫で肩状のプロポーションをとる。口縁部は端部の下側に粘土を貼り付けて文様帶を作り、5条の擬凹線文を施す。外面と内面の頸部以上は丁寧なヘラミガキで調整しており、特に粘土の接合部に対応してミガキの方向を変え、入念に接合痕を消しつつ見栄えの効果を狙っているようである。色調は明るい黄橙色で、精良な胎土を用いている。口径17.0cm、器高30.8cmである。

62は丸い体部から頸部がやや内傾気味に立ち上がり、口縁部が上外方に開く。頸部と口縁部・体部の接合部分の屈曲が特徴的である。体部内面の下半は板状工具で調整しているが、器壁は全体に分厚く重い。色調はくすんだ灰黄色で、胎土には砂粒を多く含む。口径17.0cm、器高26.5cmである。

壺底部(63)

やや上げ底状をなす底部である。底径4.6cmである。

鉢(64)

扁球形の体部に小振りの底部が付き、外面に粗いミガキを施す。口縁部は短く屈曲し、端部を丸く收める。口径12.5cm、器高8.6cmである。

直口壺(65)

体部は球形・丸底で、外面をハケメで仕上げる。口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸く收める。

口径12.9cm、器高13.2cmである。

大型甕(66・67)

器壁が厚く調整も粗い大型の甕の口縁部で、口径30cm前後となる。口縁部外面には煤が付着している。

66は短く屈曲する口縁部に粗い段のようなナデを加え、端面を波状に押さえる。内外面をハケメで調整しているが、本来はタタキ成形であろう。残存率が少なく不明確なもの、口径35.0cmに復元した。

67は鉢状の体部から口縁部が短く外反する。体部はタタキ成形のあと内外面ともハケメで調整し、口縁部も内面と端面にハケメを施す。口径29.0cmである。

甕(68~72)

68~70はタタキ成形のままの甕で、タタキの方向は横位に近い。68は口径13.3cm、器高19.0cm、69は口径18.0cm、70は底径3.8cmである。

71・72は外面を縦方向のハケメ、内面を横方向のハケメで調整した甕である。71は口径17.2cm、72は底径3.5cmである。

第2節 平成4年度の調査（A～C地区）

1. 概要

調査区は現国道から洲本川までの地区で、延長距離にして約250mの範囲について調査を行った。この範囲は確認調査の結果、洲本川の川岸部分で弥生時代の集落跡、残りの部分で水田跡が存在することが判明した。

調査は工事用道路で地区が分断されるため、地区をA・B・Cの3地区に分割し実施した。また、工事用道路部分については、通行に支障があるため同時に調査を進めることができなかった。そこで中央部分の調査終了後に工事用道路部分を実施した。これらの拡張した地区には大小5地区がある。それぞれの地区名はA-1・A-2・A-3・B・C-1・C-2地区とした。

2. C地区の調査

C地区は、D地区とは洲本川をはさんで反対側にあたる洲本川の北西岸に位置する。地形的には洲本川左岸の自然堤防状の微高地上に立地している。この微高地上を北西-南東方向に調査区を設定した。遺構面は一面で、弥生時代中期の竪穴住居跡、土坑のほか、弥生時代中期～後期にかけての溝を検出した。この遺構面上の遺物包含層では、弥生時代中期から古墳時代にかけての土器等が出土した。

土層断面図

調査区南西壁の土層堆積状況図を図版21に提示した。Aラインの11層、Bラインの6層、Cラインの11層上面で遺構を検出した。遺構面の標高は、竪穴住居跡等の遺構が存在する範囲は10.4m前後である。洲本川に近い調査区南東部では標高が9.5mより低くなる。遺構面よりも上層には、後世の水田土壤が数多く堆積していることから、弥生時代の集落が廃絶した後の波毛遺跡(C地区)は、主として水田等の耕作に利用され続けたものと考えられる。

豊穴住居 S H01 (図版23)

洲本川左岸の自然堤防上に立地する。平面プランは円形で、直径は3.6~3.8mである。これは波毛遺跡で検出した住居跡のなかで、最も規模の小さなものである。最大径80cm、深さ30cmの中央土坑をはさんで、北東、南西の両側に柱穴を2箇所のみ検出した。

出土遺物 (図版38-78~83、図版42-S 9)

豊穴住居跡の埋土中から弥生時代中期の高杯、壺、甕および打製石鏃などが出土した。

弥生土器

高杯(78・80)

78は高杯の脚部で、裾端部は肥厚している。外面はヘラミガキで仕上げ、内面は削られ器壁が薄く仕上げられている。底径12.0cmである。

80は杯部の破片で、口径は21.5cmである。

壺(79)

口縁部は、上方に向かって緩やかに外に開き、その外面に4条の凹線文が施されている。口径18.0cmである。

甕(81・82)

81は体部の外面に縦方向のハケメ調整が施されている。体部内面はナデで仕上げられ、所々に指頭の圧痕が残されている。口縁部は頸部から鋭角に開き、その端部は上方につまみあげられている。口径は14.75cmである。

82は体部の内外面ともナデで仕上げられている。口径は16.0cmである。

鉢(83)

半球形の体部に、ほぼ水平に開く口縁部を持つ。底部は残存していない。口径は23.4cmである。

石 器

打製石鏃 (S 9)

有基式の打製石鏃である。全長41.1mm、全幅24.6mm、厚さ7.7mmで、重さは4.2gである。

豊穴住居 S H02 (図版24)

豊穴住居 S H01の約10m北東に位置する。自然堤防の末端付近に立地するために削平されて遺存状況が悪い。溝や土坑などの別の遺構により寸断されている。平面プランは円形で、直径は最大で6.3mである。柱穴6本で屋根を支えたものと考えられる。南東側は後世に削平されたため検出できなかった。中央土坑は直径が60~80cm、深さは40cmである。

出土遺物 (図版38-84~87、図版42-S 8)

豊穴住居跡の埋土中で、弥生時代中期の高杯、打製石鏃のほか、古墳時代のものと考えられる高杯、時期不明の短頸壺などを検出した。

弥生土器

高杯(84・85)

いずれも脚部の破片で、裾端部が肥厚している。84は外面がヘラミガキで仕上げられ、内面も丁寧に削られている。底径は14.9cmである。

85も外側がヘラミガキで仕上げられているが、内面が磨かれた痕跡は認められない。底径は16.0cmである。

鉢 (87)

口縁部の破片で、端部は折り曲げられて肥厚している。口径は16.2cmである。

土師器

S H02は周辺の複数の土坑と切り合っており、土師器はこれらの遺構から混入したものと考えられる。

高杯 (86)

椀形の体部の杯部で、口径は15.9cmである。

石 器

打製石鏸 (S 8)

有基式の打製石鏸であるが、S H01で出土した石鏸 (S 9) と比べて切先の形態が丸い。全長31.5mm、全幅20.4mm、厚さ6.3mmで、重さは3.6gである。

豎穴住居 S H03 (図版25)

豎穴住居S H02の約5m北東に位置する。豎穴の周壁付近をわずかに検出しえたのみで、遺構の大半は調査区外に位置する。直径は約7mと推定され、柱穴の数や中央土坑の規模形状などは不明である。

出土遺物 (図版38-88、図版42-M6)

豎穴住居跡の埋土中で弥生時代中期の甕を検出したほか、周壁溝から鉄製の鉗が出土した。

弥生土器

短頸壺 (88)

球形の体部に短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張されている。口縁端部の下端に刻み目がおよそ1cm間隔で並んでいる。体部は外側がハケメ、内面上部はヘラミガキの痕跡が認められる。

鉄 器

鉄製鉗 (M6)

鉗の刃先の破片で、豎穴住居跡の周壁溝内で出土した。全長5.2cm、全幅1.8cm、厚さ0.5cmである。刃は先端から2cmのところからやや上方に反っている。

掘立柱建物 S B01 (図版26)

豎穴住居S H01の約5m西側に位置し、掘立柱建物S B02の南東に隣接する。S B01・02は互いの範囲が一部重複するため、両者は同時に存在したものではないと判断される。柱穴の残りが悪いため、特に北西辺の柱穴を検出できなかった。梁間2間×桁行4間の建物で、柱間は1.5mである。建物の方位は桁行がN35° Eである。

それぞれの柱穴から、図化可能な遺物は出土しなかった。

掘立柱建物 S B02 (図版26)

梁間2間×桁行3間の建物で、柱間は1.5mである。柱穴の規模は20~35cmで、その中で確認された柱痕の直径は10~15cm程である。建物の方位は桁行がN25° Eである。

それぞれの柱穴から、図化可能な遺物は出土しなかった。

柱穴から出土した遺物（図版38-89）

高杯の脚部で、裾端部付近に6箇所の丸い透かし穴が存在する。内外面の調整は器表面が摩滅しているため不明である。底径は13.9cmである。

土坑SK01（図版27）

最大径1.5m、深さ30cmの楕円形の土坑である。

出土遺物（図版39-95~100）

埋土中で弥生時代中期の高杯、甕、壺（広口壺、細頸壺）などを検出した。

弥生土器

高杯(95)

椀形の杯部の破片である。杯部の内外面ともヘラミガキを密に施している。口縁部付近には刻み目のある突帯が2条存在する。これらの突帯には棒状浮文が2本一組で貼り付けられている。口縁端部は平坦に整形され、その上に円形浮文が3~4mm間隔で並べられている。口径は21.0cmである。

壺(96・97・99・100)

97は直口壺の口縁部である。上方に向かって緩やかに外に開き、その外面に3条の刻み目のある突帯が施されている。突帯上に2本一組の棒状浮文が施されている。口径は16.8cmである。

99は広口壺の口縁部で、口径は25.8cmである。

96は広口壺の胴部上半部の破片である。文様はいずれも櫛描で、斜格子文の下に直線文、さらに刺突文が配置されている。

100は広口壺の底部と考えられる。外面はタタキの痕跡が残されているが、ヘラミガキが施されたためかその痕跡は消えかけている。内面は下から上に削られている。底径は6.7cmである。

鉢(98)

球形の体部で、口縁部はほぼ水平に開く。体部内外面はヘラミガキが施されている。口径は26.45cmである。

土坑SK02（図版27）

最大径1.3m、深さ30cmの楕円形の土坑である。

出土遺物（図版39-101~104）

埋土中で、弥生時代中期の壺（広口壺、細頸壺）を検出した。

弥生土器

直口壺(101・102)

101は直口壺の口縁部および頸部である。色調は白味がかった明るい灰色で、胎土は直径2mm以上の砂粒を含まない精良なものである。口縁部の一部が丸く切り取られ、片口が形成される。文様は、口縁部上位に2条、中位に3条の貼付突帯が付けられる。体部中位の突帯には2本一組の棒状浮文が付けられる。これらの突帯の間に櫛描および波状文と直線文が交互に施文される。器表面には、外面は縦方向

のヘラミガキ、内面はハケメの痕跡が認められる。口径は11.7cmである。

102は直口壺または細頸壺の体部と考えられる。外面には縦方向のヘラミガキが施された後、櫛描直線文および波状文が上から順に施文される。

広口壺(103・104)

103は水平に開く口縁部の端部が下方に拡張されている。この口縁部の下端には刻み目がヘラ状工具で施されている。口縁部下方の頸部には縦方向のヘラミガキが施されている。口径は23.3cmである。

104は広口壺の底部と考えられ、外面に縦方向のヘラミガキが施されている。底径は6.15cmである。

土坑 S K04 (図版27)

S B01の南東側に隣接する、全長3m、全幅1m、深さ40cmの土坑である。

出土遺物 (図版39-105・106)

埋土中で、弥生時代中期の甕、広口壺の口縁部を検出した。

弥生土器

甕(105)

体部は寸胴形で、その上の口縁部は徐々に外反する。口径は15.4cmである。

広口壺(106)

口縁部の下端には刻み目がヘラ状工具で施されている。頸部の外面に縦方向のハケメの痕跡が認められる。口径は26.8cmである。

土坑 S K05 (図版27)

土坑 S K04の北西に位置する、全長3.3m、全幅0.8m、深さ40cmの土坑である。

出土遺物 (図版39-107~109)

埋土中で、弥生時代中期の壺（無頸壺、短頸壺）、甕を検出した。

弥生土器

鉢(107)

内傾する口縁部外面に2条の刻目突帯が付けられている。体部の断面形は突帯の下方で内側に屈曲している。調整は内外面とも横方向のヘラミガキである。

短頸壺(108)

口縁端部がやや外反している。口径は21.8cmである。

壺(109)

大型の壺または鉢の底部である。他の壺の底部と比較して体部の傾斜が緩いため、鉢の底部である可能性も高い。外面の器表面は縦方向のヘラミガキが施されている。底径は12.2cmである。

土坑 S K06 (図版27)

土坑 S K04・05の北西に位置する、全長2.2m、全幅0.9m、深さ18cmの隅丸長方形の土坑である。

出土遺物 (図版39-111・112)

埋土中で、弥生時代中期の高杯、短頸壺を検出した。

弥生土器

高杯(111)

杯底部から脚部にかけての破片である。底部から脚部にかけて一体的に成形し、底部は脚の中央の孔に円盤を充填して形成されている。脚部は裾に向かって緩やかに外反している。

短頸壺(112)

口径18.35cmの短頸壺の破片である。

土坑 S K07 (図版27)

S B01・02の西側に位置する、全長4m以上、全幅2m、深さ10cmの土坑である。

出土遺物 (図版39-110)

埋土中で弥生時代中期の広口壺を検出した。

弥生土器

甕(110)

口縁端部は下方に拡張されている。口径16.3cmである。

溝 S D03 (図版27)

調査区中央を北西-南東方向に延びる溝で、全長30m、幅30cmである。豊穴住居や掘立柱建物が立地する自然堤防を、垂直に横切る形で掘られている。

出土遺物 (図版38-73~76)

埋土中で弥生時代後期の土器を検出した。このうち甕などを4点図化した。

弥生土器

甕(73~75)

73は小型の甕の底部である。外面は体部から底部にかけてタタキにより調整されている。内面は下から上に向けてヘラケズリが施されている。底径は3.7cmである。

74は球状の体部の甕である。底部の直上から体部が緩やかに内湾する。底径は3.25cmである。

75は小型の甕である。緩く外反する口縁部の外面は2段、内面は3段の指頭圧痕の列が見られる。体部は外面がタタキ、内面はナデで調整されている。体部から底部にかけて外面がなでられおり、指頭圧痕が残されている。器高は10.0cm、口径9.35cm、底径は2.9cmである。

鉢(76)

外反する体部は緩やかに内湾する。体部外面はタタキの痕跡が螺旋状に巡らされている。器高は8.32cm、口径14.5cm、底径3.35cmである。

溝 S D14 (図版27)

調査区中央部で検出した南西-北東方向に掘られた溝である。後世の暗渠とほぼ同一の位置に並行して掘られているため、中央部ではこの溝は暗渠に切られている。

出土遺物 (図版38-77)

弥生時代中期の広口壺が出土した。

弥生土器

広口壺(77)

大きく開いた口縁部上面に2列の刻目突帯を配している。口縁端部は下方に拡張されているが、その端面にも櫛状工具で施文した列点文が施されている。口径19.9cmである。

包含層出土の遺物（図版38-90～94、図版42-M7）

包含層は弥生土器、土師器が出土している。このうち土師器の甕・把手、弥生土器の壺の底部・器種不明品の脚部が出土している。

出土遺物

土師器

把手(90)

ミニチュア瓶、甕などの把手と考えられる。全長2.35cm、最大径2.5cmである。

甕(94)

球形の体部に外反する口縁部を持つ。体部の外面は縦方向のハケメを施している。内面は縦方向のハケメ調整をした後、上半部のみ板ナデを施している。口縁部の外面は横ナデ、内面は斜め方向のハケメが認められる。器高は12.9cm、口径14.5cm、腹部最大径は16.9cmである。

弥生土器

脚部(91)

高杯の脚部と考えられる。外反する脚の端部は垂直下方向に拡張されている。この拡張部と脚裾部とに丸い穿孔が見られる。穿孔は各10箇所、合計20箇所認められる。調整は外面ではヘラミガキを密に施しているが、内面は板ナデで粗い仕上げをされるのみである。底径は6.75cmである。

壺(92)

大型壺の底部と考えられる。底部は5.2cmである。

甕(93)

弥生時代後期の甕で、胴長の体部に外反する口縁部を持つ。体部外面は右上がりのタタキの痕跡が認められ、内面はハケメ調整が施されている。口縁部の調整は、外面は横方向のナデ、内面は横方向のハケである。ハケの原体は体部の調整に用いたものとは異なり、歯の間隔が細かいものを用いているようである。

鉄 器

鉄製穂摘具(M7)

全幅78.5mm、全長37.8mm、厚さ9mmの鉄片である。両端を折り曲げ、そこに木片を挟み込み、把手にして用いたと考えられる。刃は両刃である。

3. A地区の調査

A地区は国道28号線に隣接した地点で、遺跡の西端にあたる。調査の都合上A区・A-1区・A-2区・A-3区に分割して調査を実施した。遺跡周辺の地形は全体的には洲本川が形成した沖積地上に立地する。A地区は洲本川まで東端で150mほどの距離を持つが、大きくは同河川の後背湿地にあたる。

地区西北方向の丘陵上には寺中遺跡が立地するが、この丘陵から延びる段丘地形が遺跡の北側に広がる影響で、調査区周辺は北西から南へむけて下り、南側の埋没谷(図版3参照)へと続く。

現状地形では地区内は3枚の水田にわたるが、調査区周辺の標高は11.6m前後で、それぞれの水田の間に高低差は認められない。現在の水田は長さ100m、幅20~25m前後で、東西方向に長軸を持つ長方形水田である。

調査によって、当地区では7~8枚の水田土壤層が確認でき、全域に亘って水田址が検出された。水田の検出にあたっては、洪水砂が直面上を覆っているものについては比較的検出が容易であった。しかし、上層の土壤層との間に砂層を挟まない水田層については、面検出が困難なため面調査を断念した。このため、調査した水田土壤層は3面である。各層は上からそれぞれ水田a・b・cとした。

水田aは、6~8層除去後に検出される遺構面で、9~11・15・16の上面を遺構面とする。畦畔は主に16層上面で残存状況が良好で、調査区中央で南北に走る大畦畔が検出できた。水田bは、8・9・12~15層除去後に検出される遺構面で、16~18層上面で明瞭に検出できた。水田cは、18~20層除去後に検出される遺構面で、21・22層上面を遺構面とする。

なお、22層の下部に南北方向に走る自然河道があるが、この上層からは弥生時代の遺物が出土している。

水田a

A地区の東端を除いて検出できた水田で、概ね全域を洪水砂が覆っていた。中央付近に南北方向の大畦畔1が認められ、東側には小畦畔によって区画された水田址がみつかった。また、東側でも小畦畔が見つかり3~4枚の水田を復元できた。水田の平面形状は長方形ないし正方形を呈し、水田面の高さは標高10.7m前後である。水田面は北西が高く、南側と西側に向かって傾斜する。

水田が比較的よく検出できたのは西側および中央付近である。水田の各筆の規模は大きいもので長辺9m、短辺4m前後、小さいもので1辺4m前後である。大きいものは長方形を呈するものが多く、小さい規模のものには正方形に近いものが多い。

水田区画の方向は概ね南北方向に近い軸をもつようであるが、西側にゆくほど軸が東にずれる傾向がある。これに対し、大畦畔1周辺から東にかけては南北方向に近い方位をもつ。このように方位が変化するのは、北側からのびる丘陵地形の傾斜面が影響していると考えられる。ただし、大畦畔1については屈曲せず一定方向を向く。

水田区画を観察すると。水田1筆ごとに小畦畔によって区画され、大きくは大畦畔によって区画される。小畦畔の規模は幅0.3~0.5m前後で、検出面での高さ5~10cm前後を測る。大畦畔1は調査区中央を横断するもので、南北方向に通っている。幅1.1m、検出面での高さ15~20cmである。水田間の接続は大半が直交して碁盤目状になるが、一部に食い違い状に交差するものも見られる。水口は2箇所で観察できたが、大半の区画には水口は観察できなかった。いずれもコーナー付近で開口するものである。このため水田の水掛かりは大半が田越し水利に頼っていたと考えられる。

水田b

水田bは西側が水田aと同じ面を共有する。このため、調査区西側で検出された水田aの遺構はすで

に水田 b の段階から存在したことになる。従って、水田 b の時期にのみ存在した遺構は大畦畔 1 東側の水路とその周囲の小畦畔のみである。水田 b 期のみの小畦畔の規模は水田 a と同じであるが、水田区画は水田間の畔が基盤目状に直行して接合せず、食い違いになっているものが多い。水口は 1 箇所検出できたがコーナー付近ではなく、水田の長辺中央付近に開口部が設けられている。

さらに、水田面には両側に土手を伴う溝が流れている。土手の規模は両側で異なっており、北側が大きく、南側が小さい。北側が高さ 0.3m 前後、幅 0.9m 前後、南側が小畦畔程度である。さらに溝の土手内側には土留めのための木杭が打ち込まれていた。杭は深いもので 50cm 前後の深さに達しており、下層の砂層の深部におよんでいた。溝は北側（A - 3 区部分）では北西から南東に向かって走るが、途中で大きく曲がり調査区を横断するように設けられている。同様のカーブを持つ畦畔がないことと、調査範囲が限られるためどのような理由で水路が曲がっているのかははっきりしないが、水路を構築して用水を流していたことが確認できた。

この他、溝の周囲でわずかな範囲であるが足跡を検出した。しかし、検出範囲が限られたため歩行方向等は復元できなかった。

水田 c

水田 c は調査区東端のごく 1 部で検出された水田面である。検出できた畔は調査区を横断して南北に通る大畦畔 2 と、これから分岐する 3 本の小畦畔である。水田区画を復元できる部分は全くない。水田面の検出レベルは標高 10.5 ~ 10.55m 前後である。

大畦畔 2 は南北方向に走るもので幅 1.2m、検出面での高さ 0.2m である。小畦畔は幅 0.3 ~ 0.4m、検出面での高さは 0.1m 前後である。

自然流路

調査区の中央、各水田層の下層に旧河道が検出できた。規模は幅 5.5m、深さ 2.8m を測る。この河道は固く締まった明緑灰色細砂層を V 字形に開析して南側に流れている。さらに、この河道の下層には 1 ~ 1.5m 前後の植物遺体層が見られた。植物遺体層の上層付近からは少量の弥生土器が出土している。

また、旧河道の埋没は一時期に行われたものではなく徐々に下層から堆積が進み、最終的には溝程度のものが機能していたと思われる。さらに水田 b・c の時期には沼地状となり、この水の排水のために前述の水田 b の溝が設けられたと考えられる。

出土遺物（図版 40）

A 区出土の遺物のうち図化できたものは 17 点（113 ~ 129）である。113 ~ 116 は自然流路の上層、117 ~ 129 は 3 層からの出土である。

113 ~ 118 の 6 点は弥生時代中期～後期の遺物である。113 は壺の頸部、114 は高杯の脚部、115・116 は壺ないし甕の底部である。115 は甕、116 は壺の可能性が大きい。117 ~ 118 は壺の底部と考えられる。

119 ~ 123 の 5 点は古墳時代の遺物である。119・120 は壺身、121 ~ 123 は壺蓋である。119・120 はかえりが直立するが端部はまるくおさめる。121 は天井部がまるみを帯び、口縁部との境はややあまい。これにたいして 122 は天井部と口縁部の境に稜をもつ。123 はかえりが付く蓋である。但しがえりは小さく

退化した形態である。このため 123 は 7 世紀後半に下る可能性がある。その他の遺物は 6 世紀代に位置づけられる、ただし 122 は 6 世紀のなかでもやや古いと考えられる。

124～127 は 13 世紀代の須恵質捏鉢である。産地は不明であるが口縁部が上下に拡張するタイプのものである。

128・129 は土師質土器である。128 は小型甕、129 は高台付碗である。128 は平安後期、129 は平安時代中期頃の製品と考えられる。

時 期

A 地区では出土した遺物が少量のため、各水田層の時期の詳細は不明な点が多い。出土した遺物は大半が 3 層より上層のものである。但し、3 層には近世陶磁器が含まれているため、近世以降の水田土壤であることが確実である。この他に遺物が出土しているのは水田 a の砂層直上から出土した古代前後の遺物細片と自然流路上面から出土した弥生土器がある。わずかな材料であるが、この 2 点から水田の時期を検討しておきたい。

まず、水田 a 直上出土の土器からは同水田の使用時期が古代前後であったことが推測される。そして、水田 b は水田 a と水田面を共有することから水田 a と大きく時間差はないと考えられる。次に、水田 c は自然流路の埋没後から水田 a・b よりかなり古い時期に営まれた水田と考えられる。自然流路は上層から出土した遺物からみて、弥生時代にはすでに埋没していたことが確実と思われる。

以上のことから、水田 a は奈良時代以前、水田 c は弥生時代に近い時期、水田 b は水田 a に近い時期の可能性を持ちながら、その間の時期が考えられる。自然流路については出土土器から弥生時代に機能していたと考えられる。

また、自然流路上層から弥生土器が出土したが、これらの土器を供給した集落が問題となる。C 地区では同時期の集落を検出している。しかし、距離から考えると旧河道に混入した土器の供給源は、調査地区外側の南側ないし北側の段丘上に求めたほうが妥当ではないかと思われる。但し、段丘上には今のところ周知の遺跡は発見されていないため今後の調査に期待が寄せられる。

4. B 地区の調査

B 地区は A 地区・C 地区に挟まれた地区で、現在の水田面は標高 11.5～11.3m 前後を測る。A 地区と同様、全域に亘って水田土壤が確認され、いくつかの小畦畔が確認できた。但し、A 地区のように、良好な洪水砂の堆積が見られないため、平面調査は不可能であった。

B 地区の最終検出面（10-a 層）は標高 10.2m～10.3m である。このレベルは最終の水田面と思われるもので、A 地区の水田 c に併行する可能性が高い。この想定を前提とすれば、地形的には当地区は A 地区の北端から序々に下る斜面の延長にあたると理解できる。また同層は B 地区の中でもさらに下がり続け、中程から平坦になっている。恐らく C 地区の北端に至るまでこの高さのままと考えられる。

出土遺物は A 地区から連続する近世土壤層に土師器碗（130）が僅かに含まれていた。このような状況のため、水田の時期については A 地区との平行関係から考える以外には方法がない。従って、最終検出面の水田面が水田 c に対応するならば当地区でも弥生時代前後から奈良時代までの水田土壤を確認したことになる。

B地区から出土し図化できた土器は前述の130の1点である。130は須恵質碗で体部に水挽痕跡を顯著に残す個体である。時期は12世紀後半と考えられる。

第3節 小 結

波毛遺跡では平成3・4年度の2箇年にわたって、国道28号の洲本インターチェンジ出入口から洲本川を越えて滝池川にいたる延長約350m、面積8,873m²の範囲について発掘調査を行った。調査の結果、洲本川両岸の小規模な微高地には弥生時代～古墳時代の集落が立地しており、微高地の背後には弥生時代～奈良時代の水田跡が広がっていることが判明した。今回の調査によって洲本川中流域の沖積平野における集落遺跡の実態、土地利用の一端を初めて垣間見ることができたと考えられ、以下要点を簡単にまとめてみる。

1. 弥生時代前期

見つかった遺構はD地区南隅の土坑SK205（挿図2）のみで、集落の本体は調査範囲内から外れているものと考えられる。土坑からは2条の沈線を施した甕が出土しており、この地域の沖積地の開発が遅くとも前期中段階には始まっていたことを示している。

2. 弥生時代中期

集落の立地

中期後半にはD地区西北側とC地区東南側に集落が営まれるようになる。C・D地区は洲本川の対岸に位置していて、両地区の関係を層位的に捉えることはできない。そこで状況証拠から類推すると、C地区の微高地は洲本川側に傾斜し、D地区北側でも旧河道が見つかっていることから両地区の間に河道が存在することは間違いない。しかしながら旧河道からの出土遺物は古墳時代以降のものであり、弥生時代当時にも河道であったという証拠は得られていない。遺構の連続性からみて、C・D地区の微高地が一続きのものであった可能性も考えられるが、現段階では判断を保留しておく。

微地形等高線図（図版3）を見ると微高地の中心は洲本川右岸の上流側に位置しており、集落はそちらに向かって広がっていることが推定できる。その付近は従来「戸狩遺跡」として周知されていた地点で、今回調査した「波毛遺跡」と一体のものになる可能性がある。

遺構の配置・内容

見つかった遺構には竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝などの他、工房跡とみられる竪穴や大掛かりな火を焚いた痕跡の焼土坑といった生産に関連するものがある。このうち住居や建物といった居住施設が微高地の中心に近い洲本川寄りにかたまっているのに対し、生産関連の遺構はD地区の中でも溝SD209に隔てられた微高地縁辺に位置しており、火を用いる遺構を集落の外れに隔離して配置する意図が見受けられる。

竪穴住居はC地区の3軒（SH01～03）が円形プランで、6本柱のものと2本柱の小型住居がある。D地区のSH200は方形プランになると推定できる。

掘立柱建物のうちC地区の2棟は所属時期がはっきりしない。D地区の2棟(SB201・202)は廃絶時に柱穴内へ土器・サヌカイトを埋納しており、確実に時期を抑えることができる。特にSB201のP7とSB202のP3・8には同一個体の台付き鉢(42)が分納されており、2つの建物の廃棄が同時であったことを物語っている。また大型壺(40)やサヌカイト剥片(S4~7)の意識的な埋納状況は特筆できる。なおSB201・202のように桁側にのみ柱が連なり、梁間には柱が存在しない構造の建物は、姫路市六角遺跡⁽¹⁾に同時期の類例が3棟ある。

工房跡としたSX201は堅穴住居状のプランを呈するが、柱穴・中央土坑がなく、床面に炭・焼土が顕著に広がることから、何らかの生産に関わる作業小屋的な遺構と考えた。また焼土坑SX202については屋外でより大規模な火を用いた生産活動の痕跡と理解できるが、用途に結びつくような遺物(例えば鉱滓・鋳型・フイゴ・工具・未成品など)が一切出土していないため性格は不明である。弥生時代のこうした大きな焼土遺構は管見にして類例を多く知らないが、博多湾の海浜部に面した福岡市唐原遺跡⁽²⁾では300基以上の炉跡が見つかっており、土器焼成・日常の煮沸用・海産物の加工といった機能が想定されている。こうした遺構の解釈には遺跡の立地・風土に応じた個別的な理解が必要なのかもしれない。いずれにせよ波毛遺跡のSX202の機能については今後の課題とし、類例の増加を待ちたい。

年 代

淡路地域では当該時期の土器編年が確立していないため、神戸市西区玉津田中遺跡の編年観⁽³⁾に照らしてみる。掘立柱建物廃絶の時期を示すD地区のSB201・202およびその周辺出土の土器は「直口壺・無頸壺・高杯・台付き鉢などに凹線文を多用し、凹線文上には加飾しない」といった特徴からみて、概ね玉津田中遺跡編年の「IV-2期」段階に相当するものである。C地区のSH01~03の土器も大差ない時期とみてよい。一方C地区のSK01・02の土器は「直口壺・高杯の貼付け突帯に棒状浮文で加飾する」「広口壺の口縁端部があまり拡張しない」など「III-1~2期」に位置付けられる。従ってC・D地区の弥生時代中期の集落は、III様式~IV様式にかけて存続したものと判断できる。なお玉津田中遺跡の土器と比較すると、播磨に特徴的な壺頸部の指頭圧痕文突帯が見られないのが印象的で、地域性を表している。

3. 弥生時代後期

後期の遺構はD地区東端の溝SD220のみで居住域自体は周辺の別地点に移っている。しかし溝からは完形に復元できる土器がまとまって出土しており、そう遠くない場所、おそらく東側の段丘上に生活の拠点を設けているのであろう。SD220は微高地が下がりきった傾斜変換点を現滝池川の流路に沿って北流しており、用水あるいは排水の機能を持つとみられる。

出土土器の年代は「比較的丸い体部の鉢」などからみて「庄内期」の範疇で捉えられる。なお広口壺(61)は体部と頸部の境が不明瞭な撫で肩状のプロポーションで、口縁部の文様帶に擬凹線文を施しており、紀伊の影響を受けているとみられる⁽⁴⁾。

4. 古墳時代

集落の立地

古墳時代の集落はD地区の西寄りに位置しており、弥生時代中期の居住域とほぼ重なっている。ただしC地区とD地区の間が河道となって崖面が形成されており、C地区は居住域の範囲外となっている。遺構面のレベルは40cm前後高くなっており、弥生時代以来幾度かの洪水を被っていることが知られる。

遺構の内容

見つかった遺構には竪穴住居(S H101~105)と掘立柱建物(S B101~103)がある。S H102を除く遺構の方向はN50°Eに揃っており一連の遺構であったとみられ、近接する竪穴住居群は同時並存というよりも一連の遺構の年代幅を示している。

竪穴住居はいずれも方形4本柱であるが、燃焼施設の構造が少しずつ異なっている。S H102は床面中央にはほとんど掘り込みを伴わない焼土面をもつ。S H104も床面中央に同様な焼土面があり、周囲に炭層が広がる。S H101は南東壁中央に燃焼用の土坑を設ける。竪穴住居についても先述の玉津田中遺跡で変遷案⁽⁵⁾が提示されており、波毛遺跡例をそこに当てはめてみると、S H102・103はVI期(古墳時代前期～中期)、S H101はVII期(古墳時代後期)にあたる。S H101の類例は西淡町雨流遺跡⁽⁶⁾にみられる。

年 代

住居跡の年代を出土遺物からみてみる。まずS H102は底部を円盤充填した高杯と小型丸底壺のセットと須恵器が出土していないことから、前期～中期初頭に比定できる。

S H104からは内外面のタタキを磨り消した須恵器甕の破片が出土しており、一連の住居であるS H103～105は中期に位置付けられる。

S H101の須恵器は細片ばかりで時期を判断できるものはなかったが、土師器の甕・高杯からみて後期の初め頃の年代を与えられる。

出土遺物からみた年代観と遺構の所見はよく合致しており、波毛遺跡の古墳時代の集落は前期若しくは中期の初め頃から後期初頭まで継続していることが判る。

5. 旧河道・噴砂

先述したようにC地区とD地区の間には旧河道が通っており、D地区の北端にその一部がかかっている。下層の黒色シルト層からは古墳時代前期の土器が出土しており、その時期には河道が形成されていたことを示している。その後河道は厚い洪水砂で一気に埋積されており、洪水砂層からは9世紀代の須恵器(19～21)が出土している。洪水砂の上面は土壤化して水田となっている。

なおこの水田土壤層の上面で、数条の噴砂を検出した。噴砂は土壤層下の洪水砂が液状化したもので、9世紀代以降の地震によるものと考えられる。また図版12のD-D'・E-E'断面の観察によると、土壤層を引き裂く噴砂と逆に土壤化を受けた噴砂があり、地震が1回切りでなかったことを示している。通産省工業技術院地質調査所の寒川 旭氏の鑑定によると、百数十年周期の南海地震に伴う可能性が高いとみられる。噴砂はC地区側の旧河道でも観察されており、同じ成因によるものであろう。

6. 水田

洲本川両岸の小規模な微高地の後背には広く水田跡が広がっていたようである。しかし水田面が洪水砂に覆われて面的な調査が可能なのはA地区のみであった。A地区の水田跡は弥生時代以後～古代前後まで耕作されたもので、1辺10m未満の小規模な水田区画である。水田の平面形状は基本的には長方形ないし方形であった。これらの水田を耕作した集落については立地やこれまでの調査の成果からみて、段丘上が最も有力な場所と考えられる。

また、A地区内では埋没した自然流路が横切っているのを検出した。図版3の微地形等高線図によると、遺跡の南側で洲本川に流れ込む埋没谷の存在が判明しており、今回検出できた自然流路はこの埋没谷に向かって流れていたことが推測される。

註

- (1) 兵庫県教育委員会1994『六角遺跡』
- (2) 福岡市教育委員会1989『唐原遺跡Ⅱ－集落址編－』
高田健一氏より類例の御教示を受けた。
- (3) 篠宮 正1996「弥生時代中期中頃から後半の土器」『玉津田中遺跡－第6分冊（総括編）－』兵庫県教育委員会
- (4) 土井孝之1989「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
野田地区遺跡4区C・D地区灰色粘土出土の壺（273頁-408に掲載）とプロポーションが酷似しており、この器形は紀伊地域の後期を通じて系譜を辿ることができる。
- (5) 多賀茂治1996「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡－第6分冊（総括編）－』兵庫県教育委員会
- (6) 兵庫県教育委員会1990『雨流遺跡』

第3章 川添遺跡

第1節 調査の概要

1. 確認調査

確認調査は道路のセンターラインに沿って 2 m × 2 m の坪（グリッド）を一列にほぼ 20 m 間隔で 19箇所設定して実施した。

掘削方法は人力掘削を原則としたが、No. 1～No. 7 グリッドについては、近年の盛土による堆積が厚いことが予想されたため、グリッドを 3 m × 3 m に拡張し、盛土の除去はバックホーによって行い、以下の層については人力掘削によって調査を行った。

調査の結果、No. 1～No. 7 グリッドについては、近年の盛土が厚さ 2～3.5 m にわたって堆積しており、旧耕土（2 a 層）、粗粒シルト（3 b 層）の堆積が認められ、遺物の出土はなく、遺構の存在は認められなかった。

No. 8～No. 15 グリッドは湿田もしくは旧河道の様相を呈しており、遺物はほとんど出土していない。

調査地の北側に設定した No. 16～No. 19 グリッドは滝池川の氾濫によって形成された微高地上に位置し、遺跡の存在が予想された。調査の結果、No. 18 グリッドでは 4 b 層上面で直径 15 cm、深さ 30 cm の柱穴が検出された。柱穴の底には川原石が埋置されており、川原石を取り除くとさらにその下に布目瓦が埋置されていた。

No. 19 グリッドでは遺物包含層が 2 層にわたって堆積（5 a 層、7 a 層）しており、上層の 5 a 層からは、8 世紀後半～9 世紀前半の須恵器の杯蓋が出土している。

同様に No. 16、No. 17 グリッドについても、明確な遺構は検出されなかったが、No. 18 グリッドとほぼ同様の土層堆積状況を示しており、遺物包含層及び No. 18 グリッドで確認された遺構検出面と同一面と考えられる面の存在を確認した。

2. 全面調査

前回の確認調査の結果から、No. 16～No. 19 グリッド間（STA. No. 276～STA. No. 280）の約 1,000 m²について全面調査を実施した。

遺跡名については小字名より、川添遺跡と命名した。遺跡は丘陵裾から広がる段丘と滝池川に挟まれた位置にあり、現地目は水田及び荒れ地である。

調査では遺跡の中央部をほぼ南北に横断する市道を境に、その東側を A 区、西側を B 区として実施した。盛土・水田耕土・床土については機械力によって除去し、遺構面直上に堆積する遺物包含層については人力で掘削した。

3. 土層断面図

調査地点は元来、水田であったが、洲本バイパスの工事に伴って、調査時点では既に休耕しており、一部地点には厚さ 10～30 cm にわたって盛土がなされていた。

基本的な土層堆積は、現水田耕土の下層は第 16 層 10 Y R 2/5 灰黄褐色極細砂～第 24 層 10 Y R 4/4 細砂混

極細砂まで、極細砂およびシルト層が10数層に渡って堆積しており、この堆積状況から複数の水田面とその間に堆積する洪水砂層が確認された。調査では、前回の調査で柱穴が確認された20層10Y R4/4褐色細砂層上面を遺構確認面として遺構の検出を試みた。

4. 調査の結果

遺構

A区ではほぼ南北に延びる大畦畔状の高まりが幅約2.5m、長さ30mで検出され、その大畦畔の西側に沿って走る幅約1m、深さ約20cmの溝（S D01・02）を検出した。また、B区では、平安時代中頃～後半の2間×2間の掘立柱建物及び畦畔状の高まり、小柱穴群、土坑等を検出した。

以下、主な遺構について若干説明する。

大畦畔 A区の中央をほぼ南北方向に延びる。水田面からの比高は約10～15cmである。この大畦畔の西側にはS D01・02が並行して走る。B区でも同様の畦畔が断面観察の結果、2条東西方向に走ることがわかった。

S D01 大畦畔の西側を並行して走る。幅約1.5m、長さ約13m、確認面からの深さ約20～25cmを測り、北側で途切れている。埋土中からの出土遺物は弥生時代後期と思われる土器片が若干認められる程度で、遺構の所属時期については明らかではない。

S D02 S D01と同様に大畦畔の西側を並行して走る溝である。S D01の延長上にあり、同一の性格をもつものと思われる。幅約0.9m、長さ約5m、確認面からの深さ約15cmを測り、南側で途切れている。埋土中からの出土遺物は認められず、所属時期については不明である。

S K01 B区南端で検出された楕円形の土坑である。長軸約1.5m、短軸0.8m以上、確認面からの深さ0.6mを測る。埋土中より近世中頃の唐津焼片が検出されており、近世の畠地に伴う施設と考えられる。

S K02 S K01の西側でS K01に切られる形で検出された土坑である。やはり畠地に伴う施設と考えられる。

掘立柱建物 S B01 B区の南東部で検出された、8基の柱穴で構成される2間×2間規模の掘立柱建物である。柱穴の規模は直径約25～35cmの円形で、確認面からの深さは20～30cmを測る。柱穴内には拳大の石が詰められており、柱を抜いたあと意図的に埋められたものと推定できる。石の中には焼けたものもあり、炭の入った柱穴もあるため火災にあった可能性も考えられる。柱穴内より瓦器椀や土師器皿の出土が見られ、これらの遺物から、この建物の所属時期は12世紀中頃から後半の時期が考えられる。

遺物

川添遺跡から出土した遺物は非常に少なく、全体で280入りコンテナに1箱程度である。したがって、今回は図化が可能なものは全て掲載することにした。以下順にその内容について述べる。

1は瓦器椀である。高台は断面三角形状を呈する低い貼付け高台で、体部はやや内彎気味に斜め上方に立ち上がる。口縁端部はやや丸みを帯びる。器面の磨滅が著しいため調整については観察が困難であるが、内外面ともナデ調整が加えられ、また体部外面には指頭圧痕が見られる。口縁端部を丸く收める点など和泉型瓦器椀に類似するが、恐らくは在地産のものと考えられる。類似する和泉型瓦器椀の年代

観に従えば、II-2期からII-3期、すなわち12世紀中頃～後半の時期が与えられる資料である⁽¹⁾。

2は須恵器杯の底部である。底部外面にはヘラケズリ痕が認められる。底部内面・体部外面にはナデ調整が加えられている。いわゆる杯Bに相当し、高台が外側に開き気味である点から、8世紀後半～9世紀初頭の時期が考えられる。3は土師器皿である。平底で体部は斜め上方に立ち上がる。回転台を使用して成形されている。4は土師器甕の口縁部である。内・外面ともヨコナデ調整が施される。胎土中には砂粒を比較的多く含んでいる。細片のため時期については断定しがたいが古墳時代のものと考えられる。5は土師器の甕もしくは壺の口縁部である。器面は磨滅が著しく調整は不明である。6も土師器の甕もしくは壺の口縁部である。口縁端部をナデて若干外反させている。古墳時代前期の時期が考えられる。7は土師器甕の口縁部である。口縁部外面に縦方向のハケ目が一部見られる。古墳時代の所産であろう。8は弥生土器の壺の底部である。器面は磨滅が著しく、調整技法は不明である。色調は明赤橙色を呈し、胎土中には砂粒を多く含んでいる。所属時期の詳細は不明である。9は丸瓦の破片である。外面に板ナデ調整が施される。内面には明瞭な布目痕は認められない。焼成は堅緻であり、外面は淡赤褐色を呈する。所属時期の詳細は不明であるが、内面に布目痕が認められないことから、中世後半～近世初頭の時期が考えられる。10は平瓦片である。2枚が融着した形で検出され、柱穴内で根石の下から検出されたものである。須恵質で堅緻に焼成されている。内面には粗い布目痕が認められ、凸面には叩きが見られない。所属時期は破片のため詳細は不明であるが、調整技法の特徴などから、中世前半の可能性が高い。11は長さ78.5mm、最大幅29.5mm、最大厚8mmを測る鉄製品である。錆化が著しく用途については不明である。

第2節 小 結

上記のように今回の調査では、12世紀中頃～後半の掘立柱建物と所属時期は明確ではないが水田面が検出された。水田を除くと遺構密度は薄く、また出土遺物も弥生時代後期～近世までの幅広いものであるが量的には少ない。包含層からは鉄滓や炉壁片・窯壁片・吉瓦が出土しており、近辺に窯跡や鍛冶関係の遺跡が存在する可能性がある。また弥生時代後期の土器の存在は低地からの出土であり、洲本川北岸にある丘陵上の同時期遺跡との関係を考える上で重要な資料である。

註

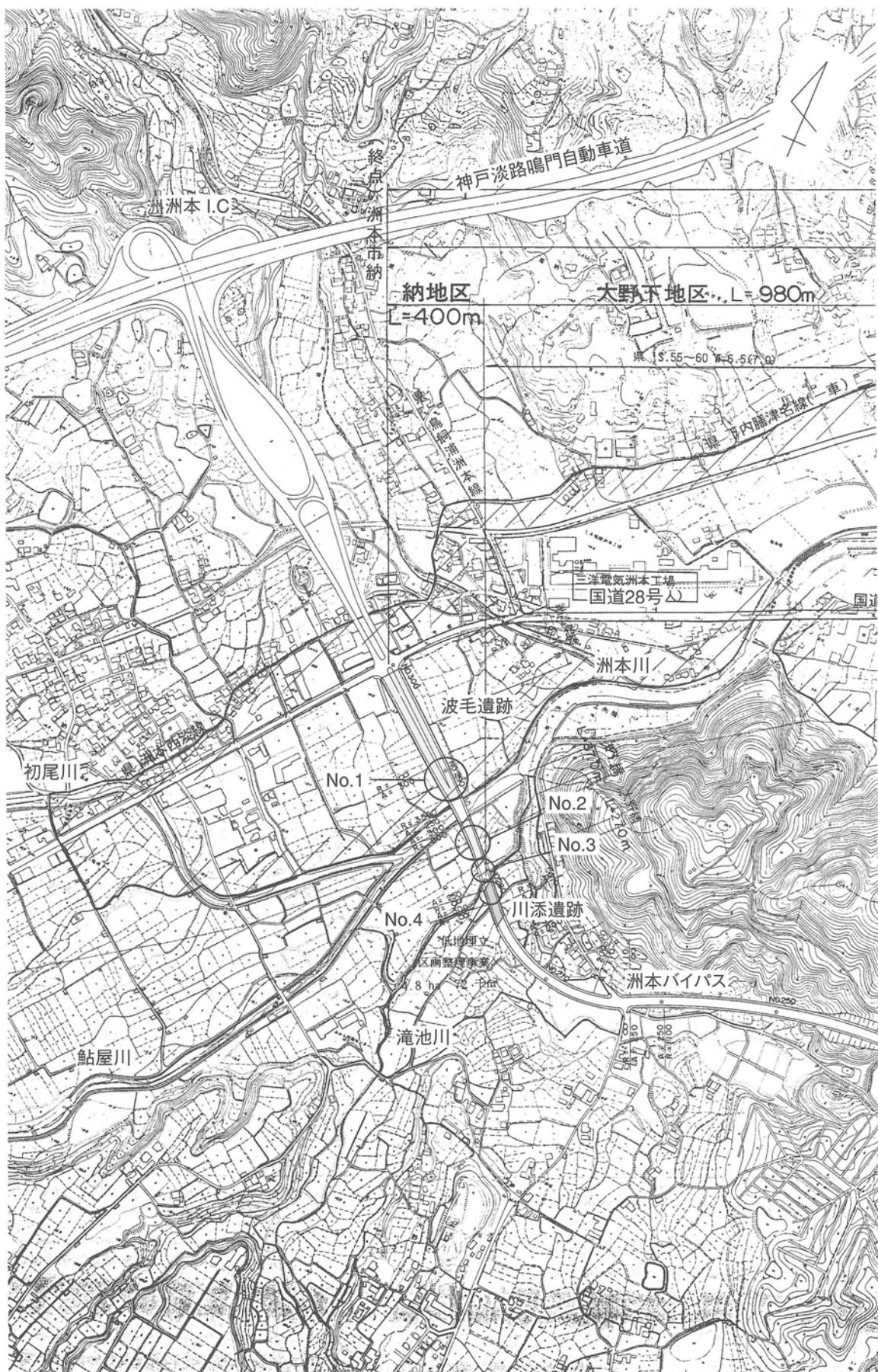
- (1) 尾上 実・森島康雄・近江俊秀1995「瓦器碗」『中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

圖 版

全体図

図版1

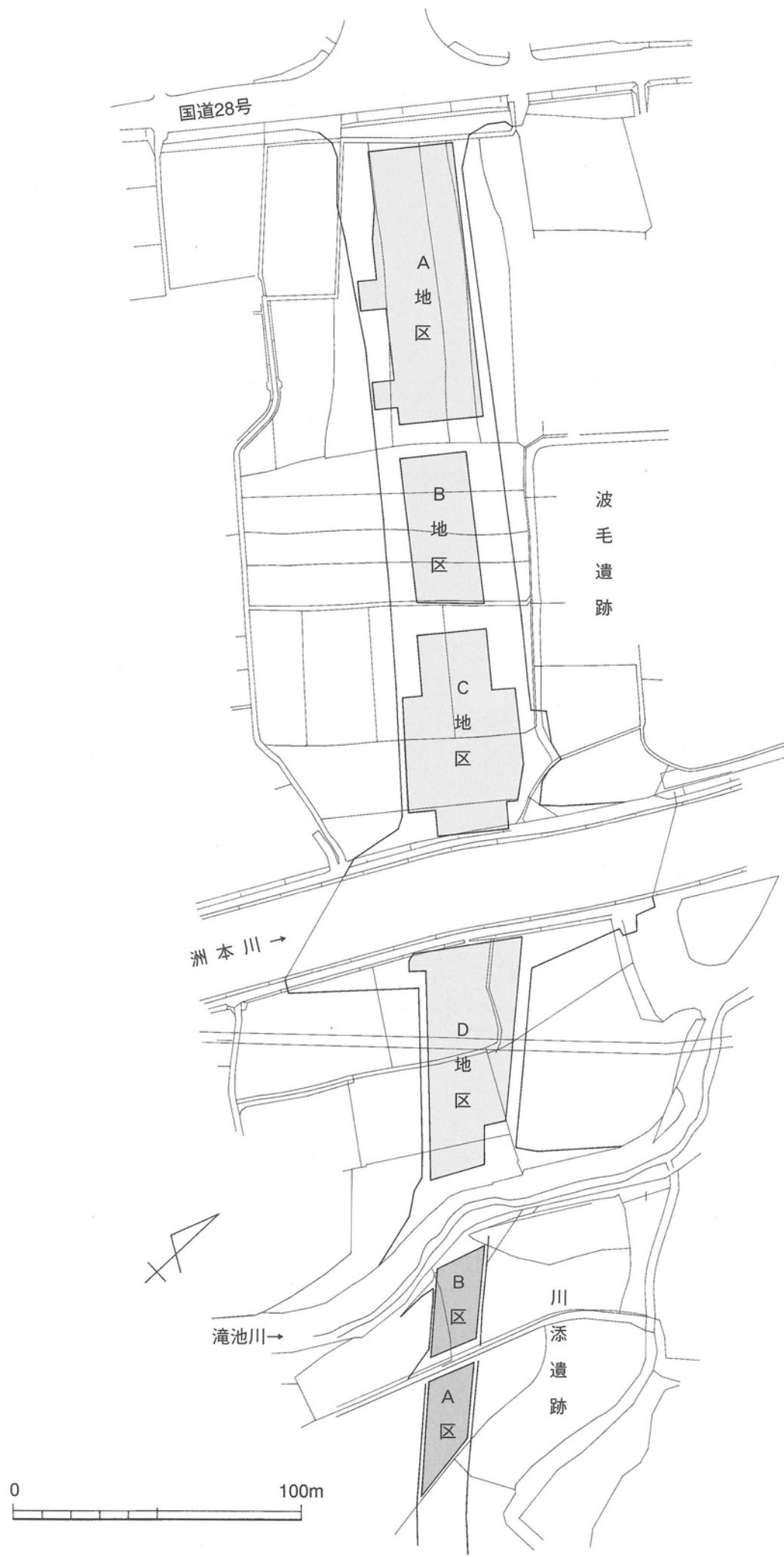
路線計画と遺跡の位置



図版2

波毛遺跡・川添遺跡の調査地区

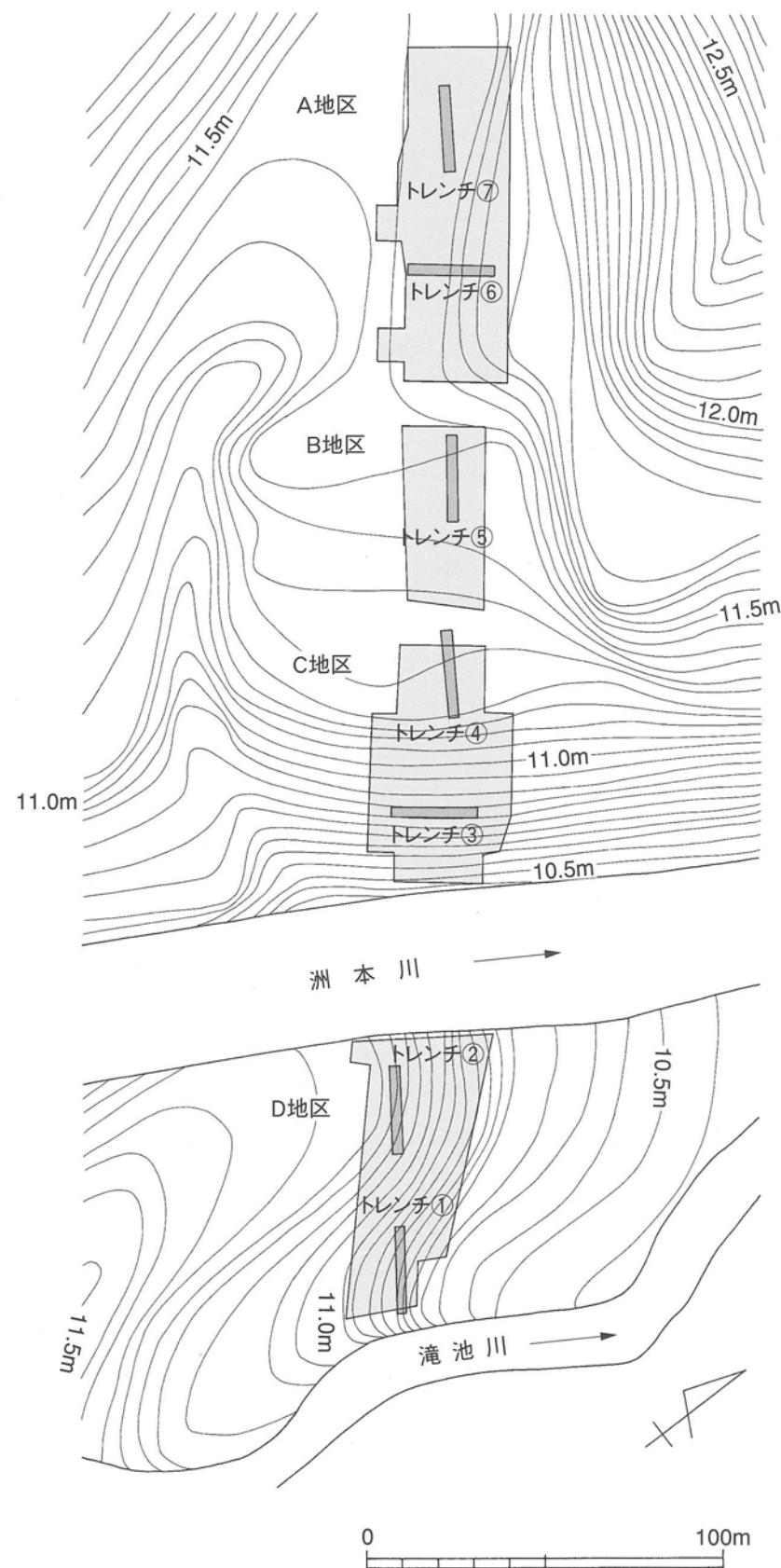
全体図



波毛遺跡

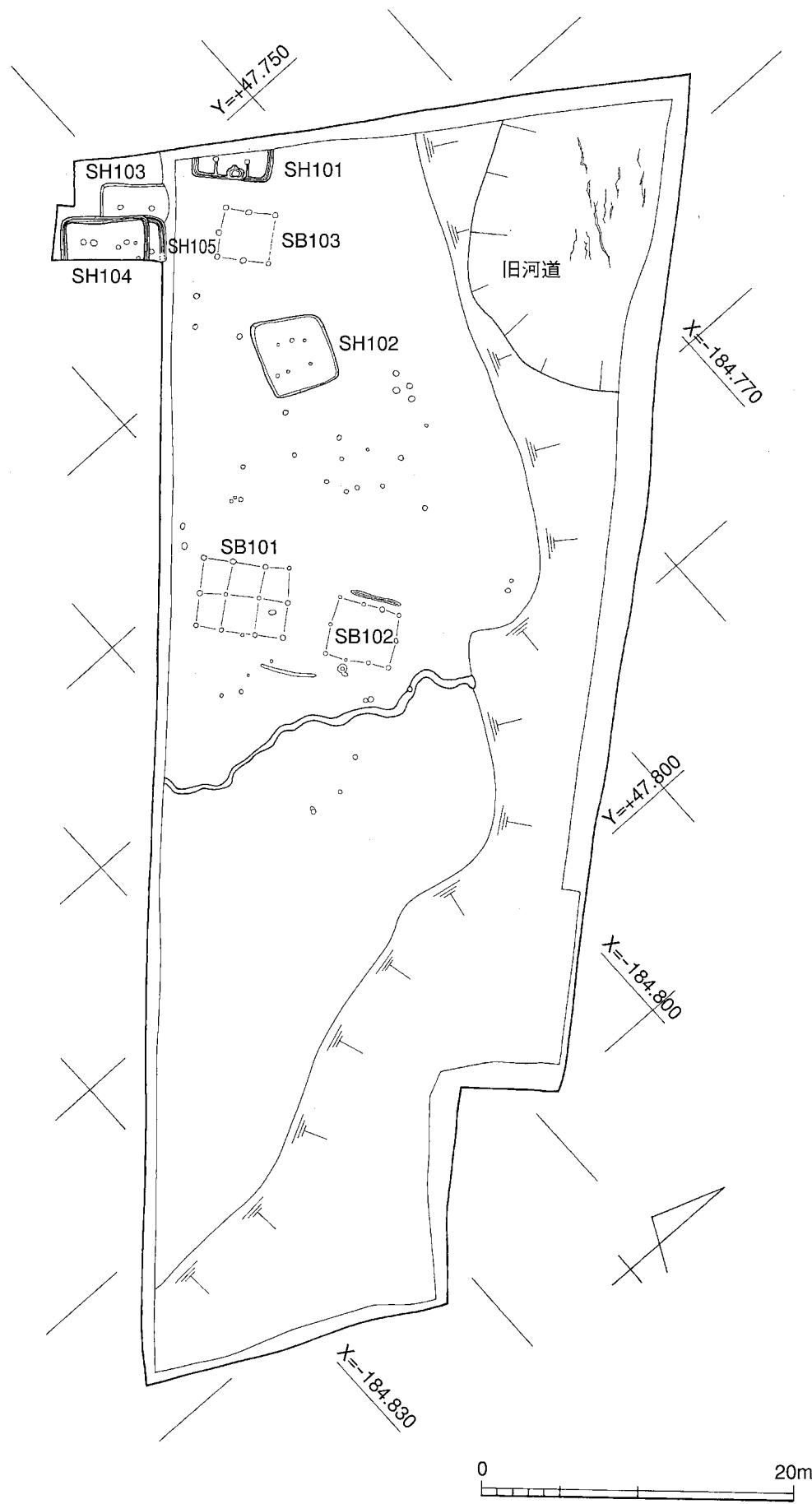
図版3

調査地区と微地形等高線図



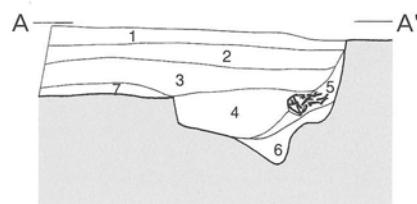
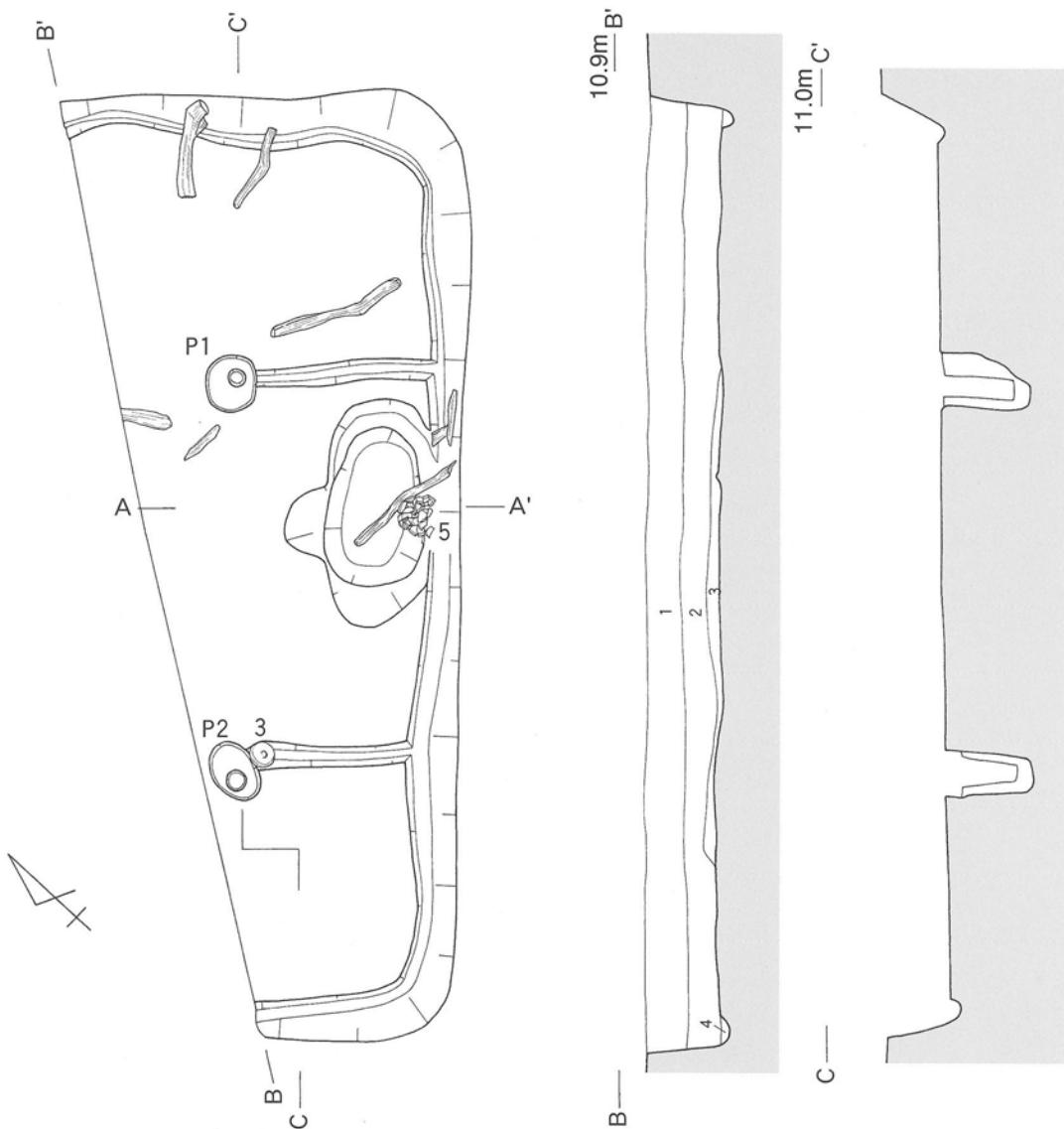
図版4
D地区第1面全体図

波毛遺跡



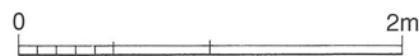
波毛遺跡

図版5
竪穴住居 S H101



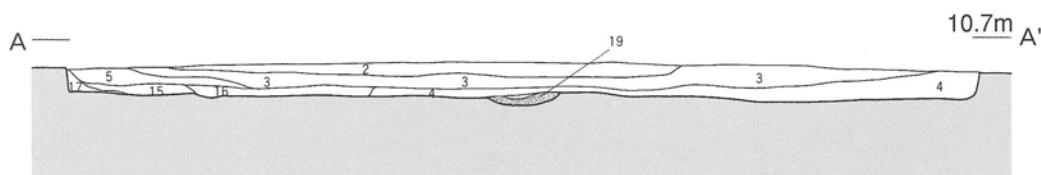
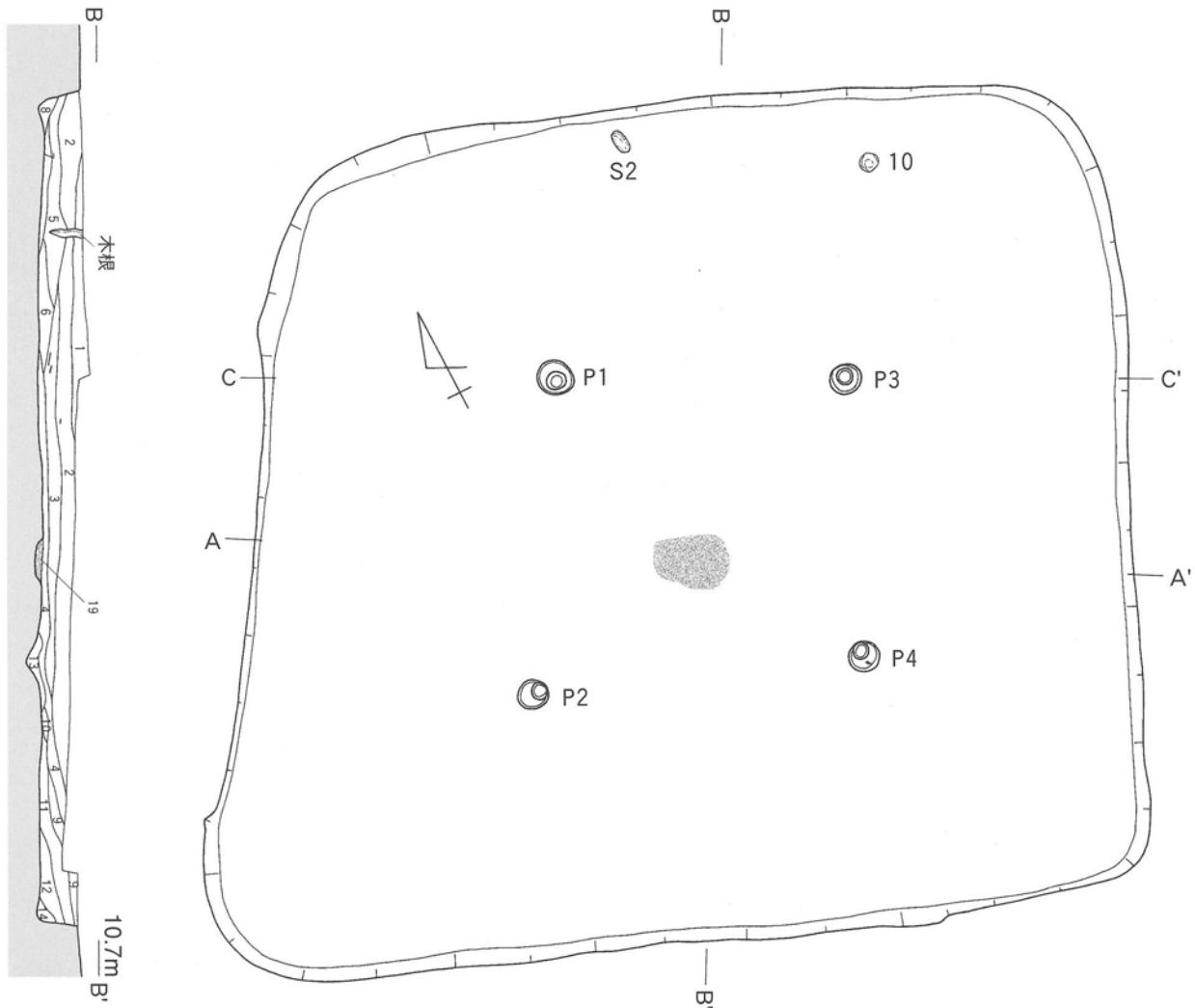
- | | |
|-------------------|---------------------------|
| 1. 5Y 5/1 灰 | シルト質極細砂(焼土、炭、土器片含む) |
| 2. 2.5Y 6/1 黄灰 | シルト質極細砂(焼土、炭、土器片含む) |
| 3. 2.5Y 5/2 暗灰黄 | シルト質極細砂(焼土、炭、土器片含む) |
| 4. 10YR 5/3 にぶい黄褐 | シルト(焼土、土器片含む。特に上面は焼土が密) |
| 5. 10YR 4/4 褐色 | シルト質極細砂(炭、土器片含む) |
| 6. 10YR 4/3 にぶい黄褐 | シルト質極細砂(炭、焼土含む) |
| 7. 2.5YR 5/2 暗灰黄 | 極細砂(炭、熱により赤く変色した焼土を多量に含む) |

- | | |
|-------------------|---------------------------|
| 1. 5Y 5/1 灰 | シルト質極細砂(焼土、炭、土器片含む) |
| 2. 2.5Y 6/1 黄灰 | シルト質極細砂(焼土、炭、土器片含む) |
| 3. 2.5Y 5/2 暗灰黄 | シルト質極細砂(焼土、炭、土器片含む) |
| 4. 10YR 5/3 にぶい黄褐 | シルト(焼土、土器片含む。特に上面は焼土が密) |
| 5. 10YR 4/4 褐色 | シルト質極細砂(炭、土器片含む) |
| 6. 10YR 4/3 にぶい黄褐 | シルト質極細砂(炭、焼土含む) |
| 7. 2.5YR 5/2 暗灰黄 | 極細砂(炭、熱により赤く変色した焼土を多量に含む) |



図版6
竪穴住居S H102

波毛遺跡



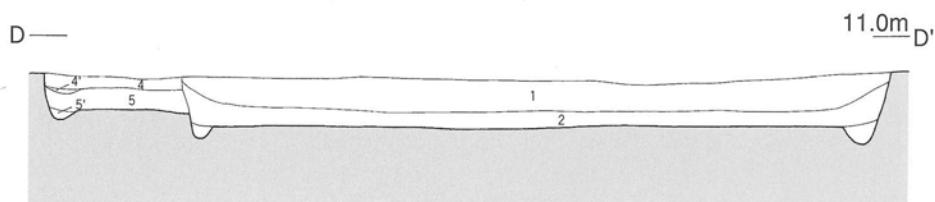
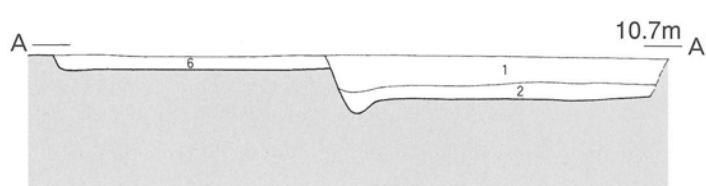
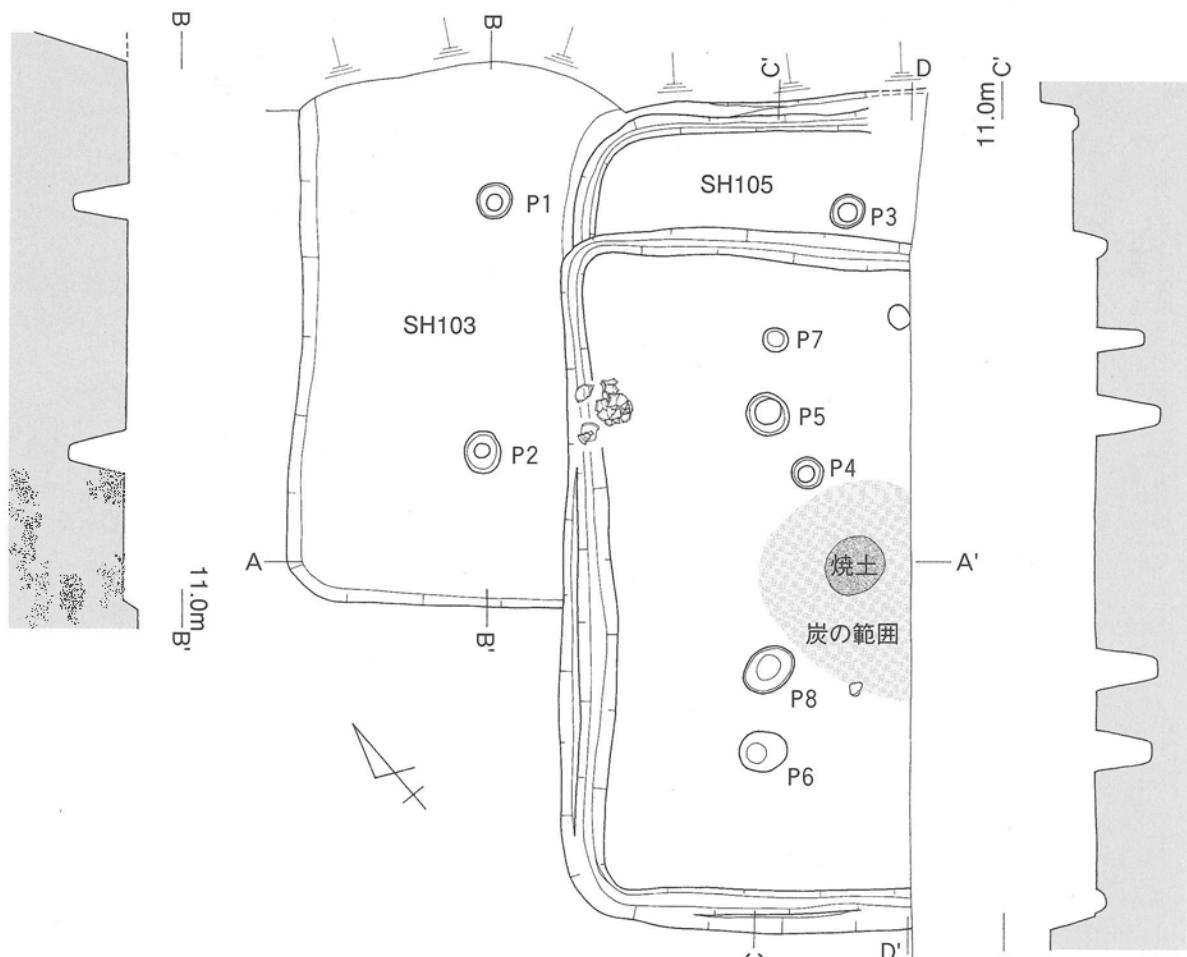
1. 2.5Y 5/3 黄褐	細砂～極細砂(粘性、土器含む)	14. 2.5Y 5/1 灰褐	細砂～極細砂(炭微量)
2. 2.5Y 5/4 黄褐	細砂～極細砂(　　°　　)	15. 12と同じ	
3. 2.5Y 4/1 黄灰	細砂～極細砂(炭、焼土、土器含む)	16. 13と同じ	
4. 2.5Y 5/4 黄褐	細砂～極細砂(炭微量)	17. 8と同じ	
5. 2.5Y 6/4 にぶい黄	細砂～極細砂	18. 2.5Y 6/2 灰黄	細砂～極細砂(焼土、炭)
6. 2.5Y 5/2 暗灰黄	細砂～極細砂(焼土ブロック、炭、灰)	19. 5YR 5/4 にぶい赤褐(被熱)	
7. 7.5YR 5/1 灰褐	細砂～極細砂(焼土、焼土ブロック、炭)		
8. 2.5Y 6/2 灰黄	細砂～極細砂(焼土ブロック、炭、土器片含む)		
9. 2.5Y 6/4 にぶい黄	細砂～極細砂(土器含む)		
10. 2.5Y 6/3 にぶい黄	細砂～極細砂		
11. 2.5Y 6/3 にぶい黄	細砂～極細砂(9.より粘性が強い)		
12. 2.5Y 6/3 にぶい黄	細砂～極細砂		
13. 2.5Y 4/1 黄灰	細砂～極細砂(焼土ブロック、炭、灰、土器含む)		

0 2m

波毛遺跡

図版 7

竪穴住居 S H103~105

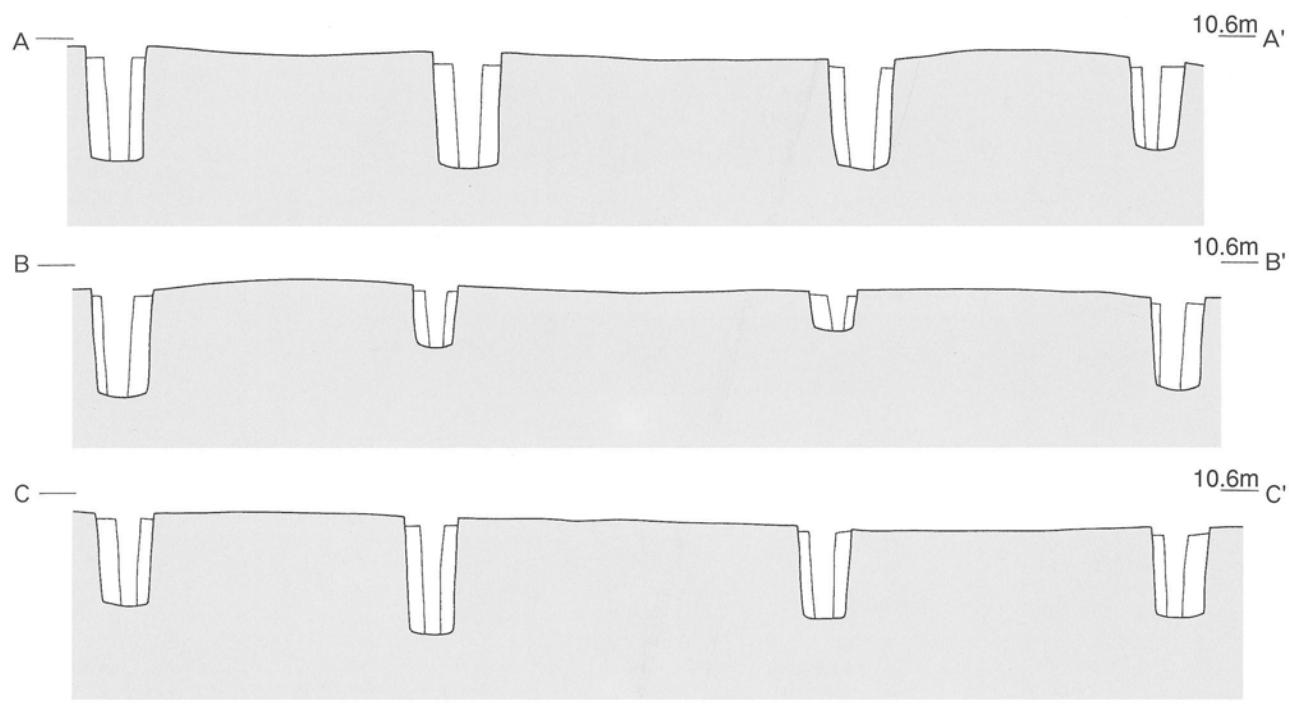
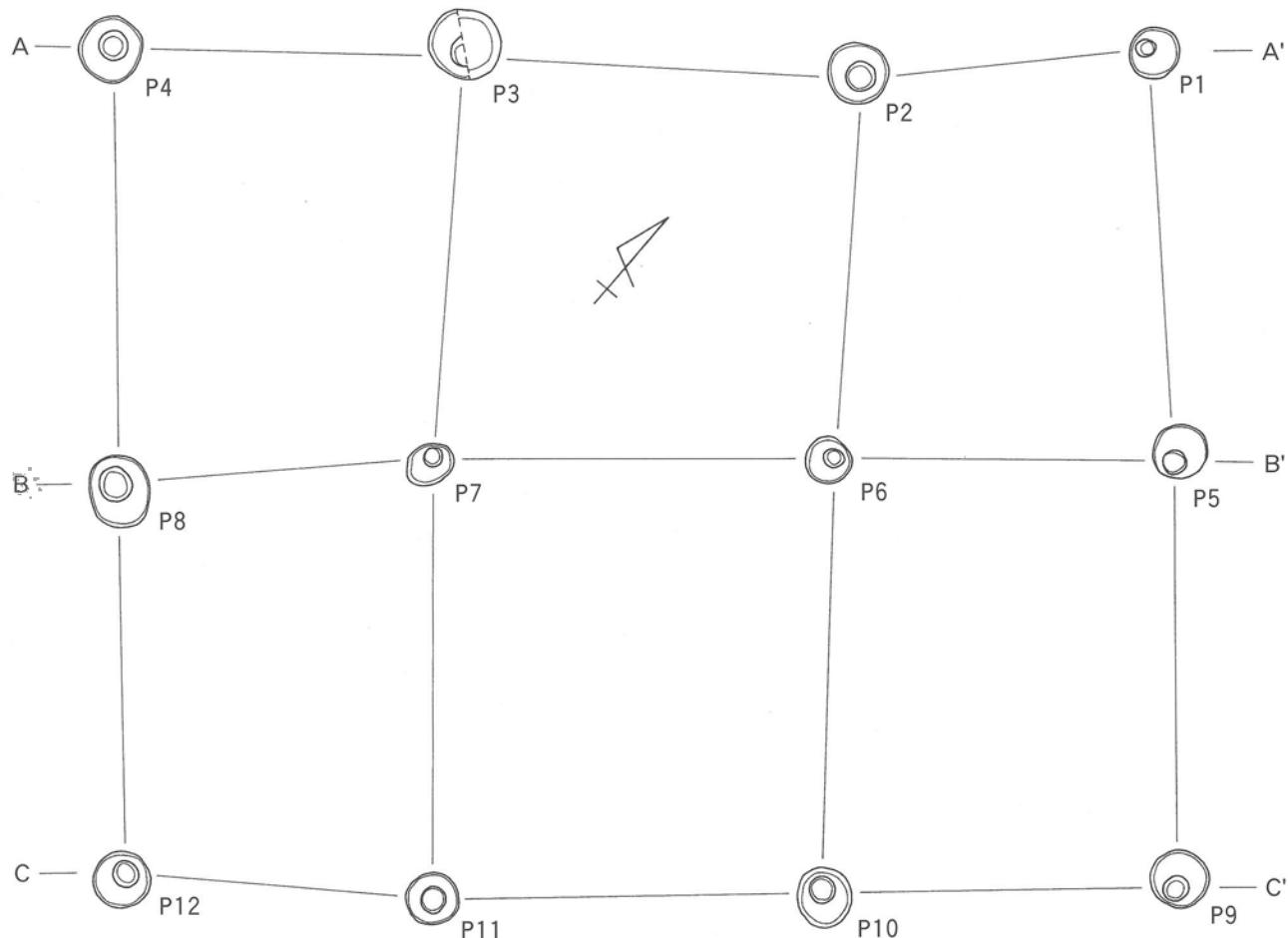


- | | | |
|-------------------|---------------------|-------|
| 1. 2.5Y 4/2 暗灰黄 | シルト質極細砂(土器片含む) | |
| 2. 2.5Y 4/1 黄灰 | シルト質極細砂(土器片、炭、焼土含む) | SH104 |
| 3. 10YR 3/3 暗褐 | 〃 | |
| 4. 10YR 5/3 にぶい黄褐 | 〃 | |
| 4' | 〃 | |
| 5. 10YR 5/4 〃 | 〃 | SH105 |
| 5' | 〃 | |
| 6. 10YR 4/1 褐灰 | シルト質極細砂 | SH103 |



図版8
掘立柱建物 S B101

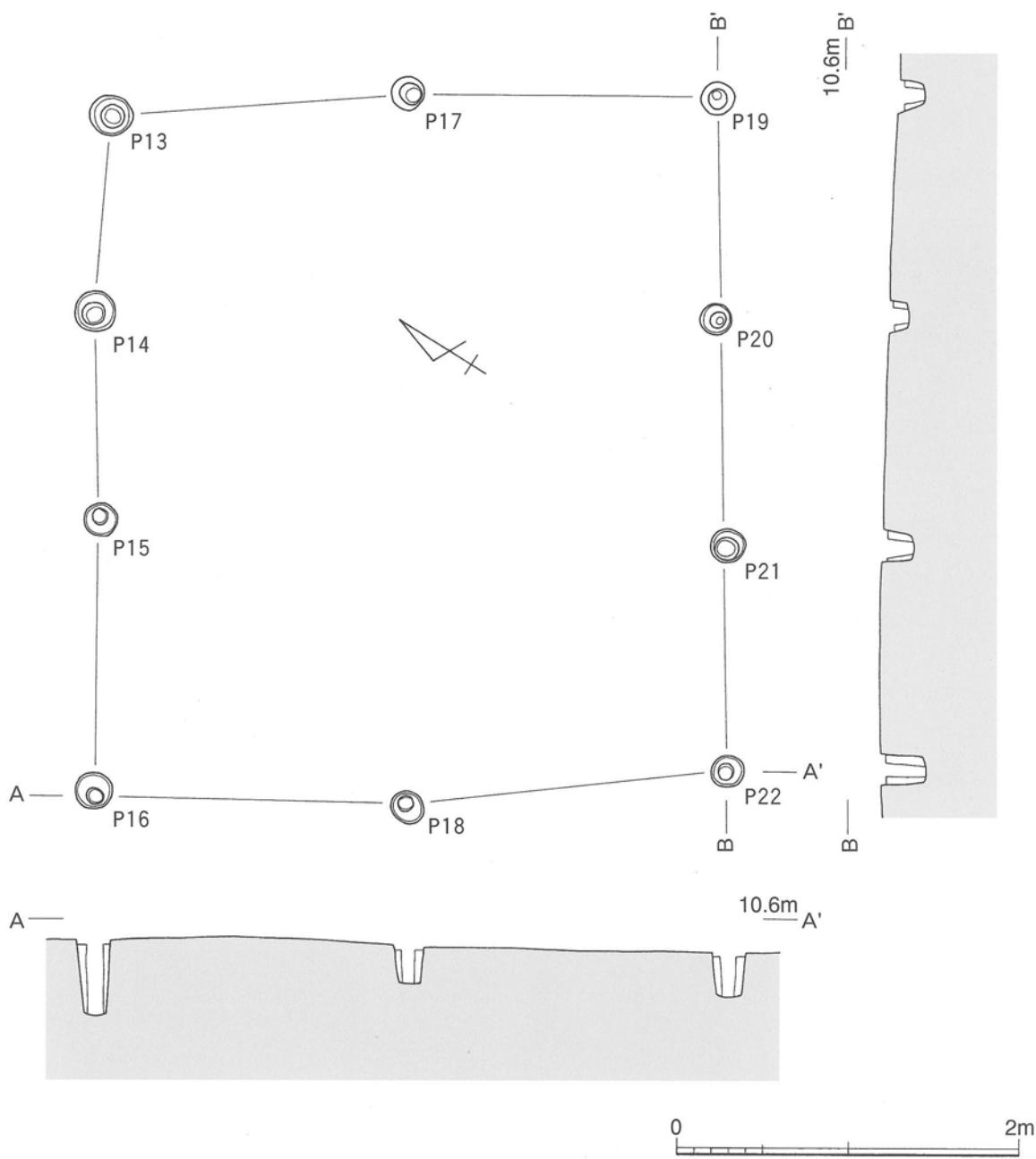
波毛遺跡



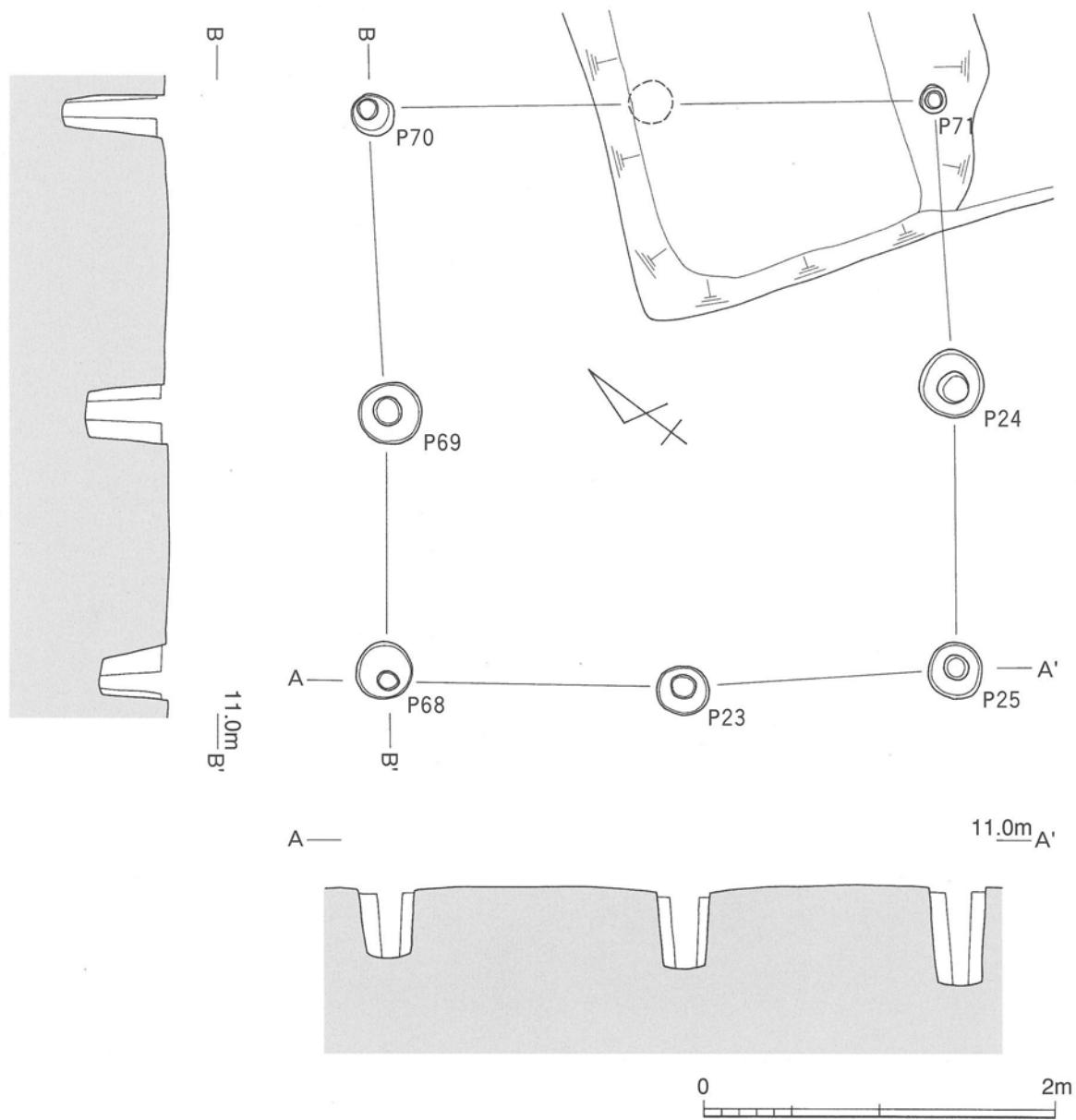
0 2m

波毛遺跡

図版 9
掘立柱建物 S B 102



波毛遺跡



波毛遺跡

図版11
旧河道と噴砂

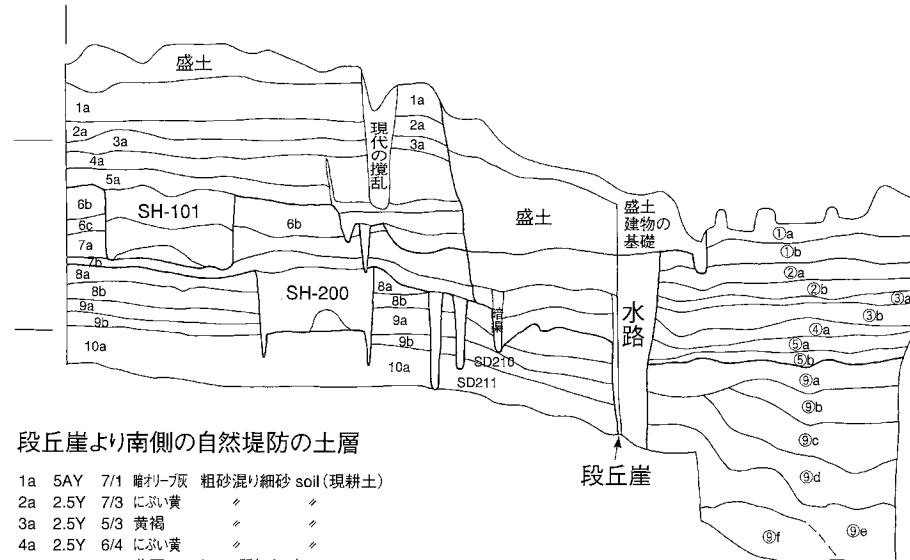


図版12

D地区土層断面図

波毛遺跡

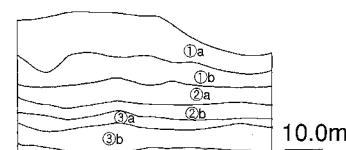
A. D地区西北壁断面



A'

B

D地区東北壁断面



11.0m

10.0m

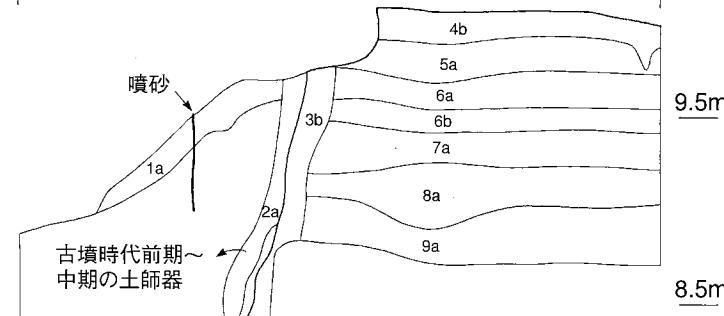
1m

10m

0

C'

自然堤防～旧河道の断ち割り断面



9.5m

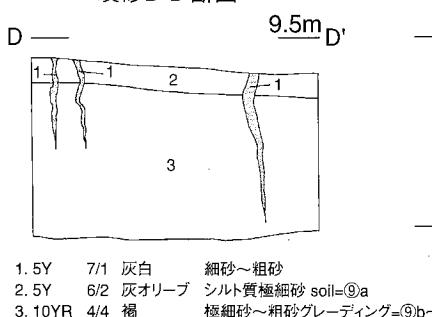
8.5m

1m

10m

0

噴砂D-D'断面

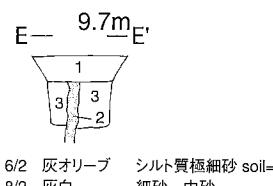


D

9.5m

D'

噴砂E-E'断面



E

9.7m

E'

0

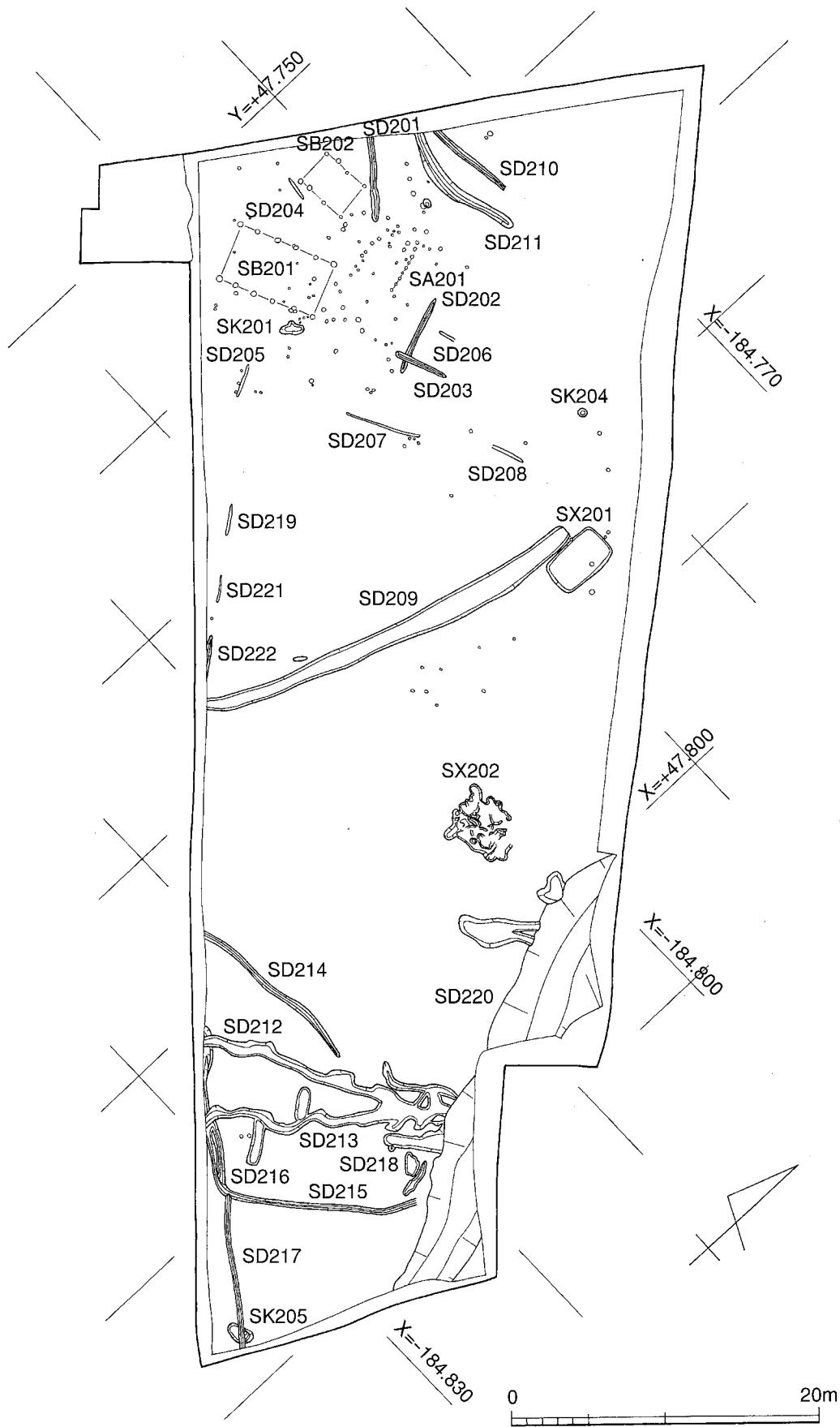
1m

- 1a 10YR 5/1 灰 シルト質細砂 土器 soil=⑨a
1b 10YR 4/4 黒(上部のみ) 極細砂～粗砂 平行ラミナ Fe₂O₃, 9c代の須恵器含む=⑨b
2a 10YR 2/1 黒 極細砂質シルト 古墳時代前期の土器含む soil
2b 5Y 3/1 オリーブ黒 極細砂～細砂と細砂質シルトの互層 ラミナ、流木含む
3b 5Y 7/2 灰白 細砂 Fe₂O₃
4b 5Y 6/3 灰オリーブ シルト質極細砂 Fe₂O₃
5a 5Y 7/3 浅黄 シルト質極細砂 Fe₂O₃ soil
6a 5Y 6/3 灰オリーブ シルト質細砂 Fe₂O₃ soil
6b 5Y 7/3 浅黄 シルト質細砂 Fe₂O₃
7a 5Y 6/3 オリーブ黄 極細砂質シルト Fe₂O₃ soil(上部のみ)
8a 2.5Y 6/6 明黄褐 シルト質極細砂 グライ soil(上部のみ)
9a 5Y 6/4 オリーブ黄 極細砂質シルト グライ soil(上部のみ)

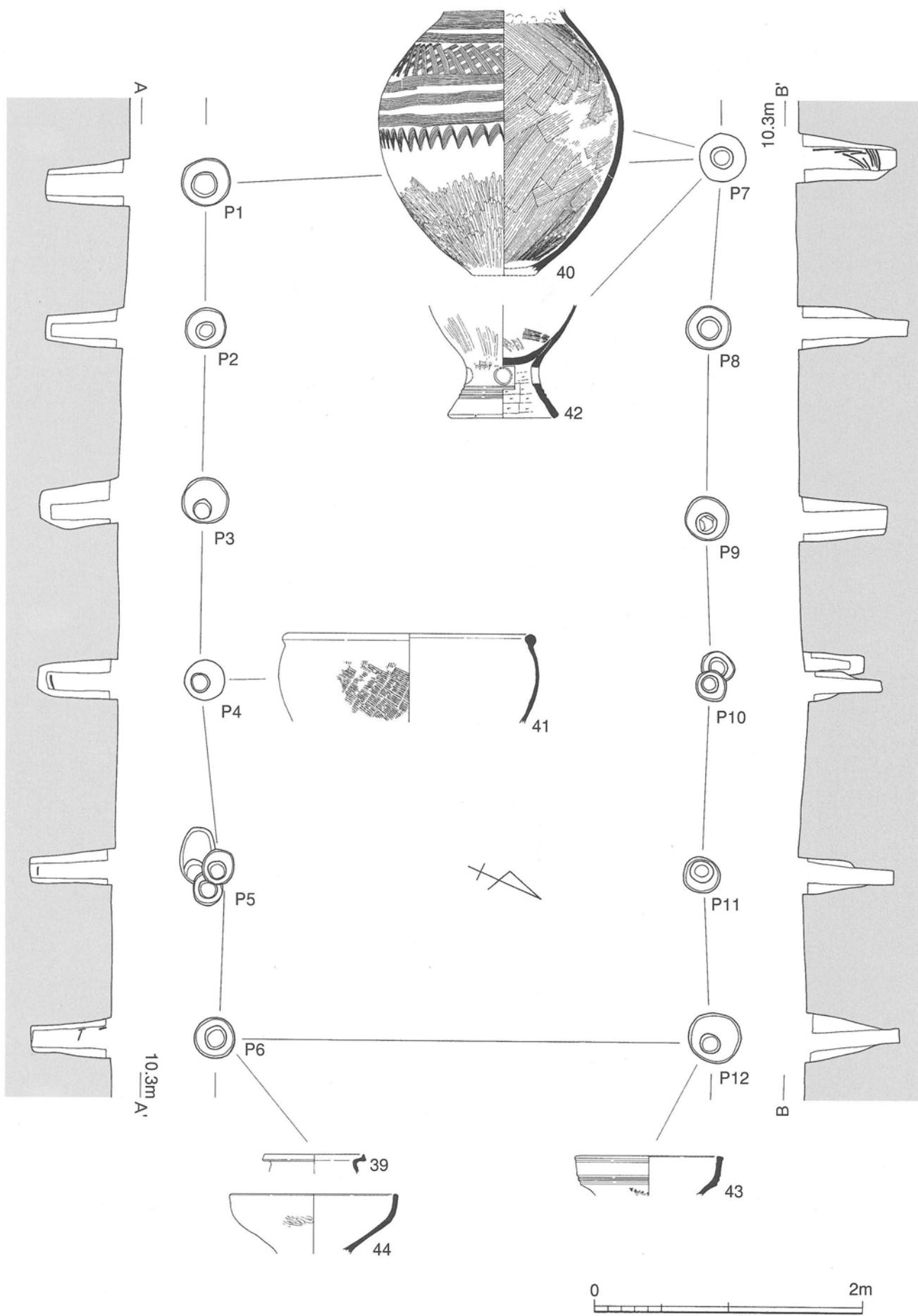
波毛遺跡

図版13

D地区第2面全体図



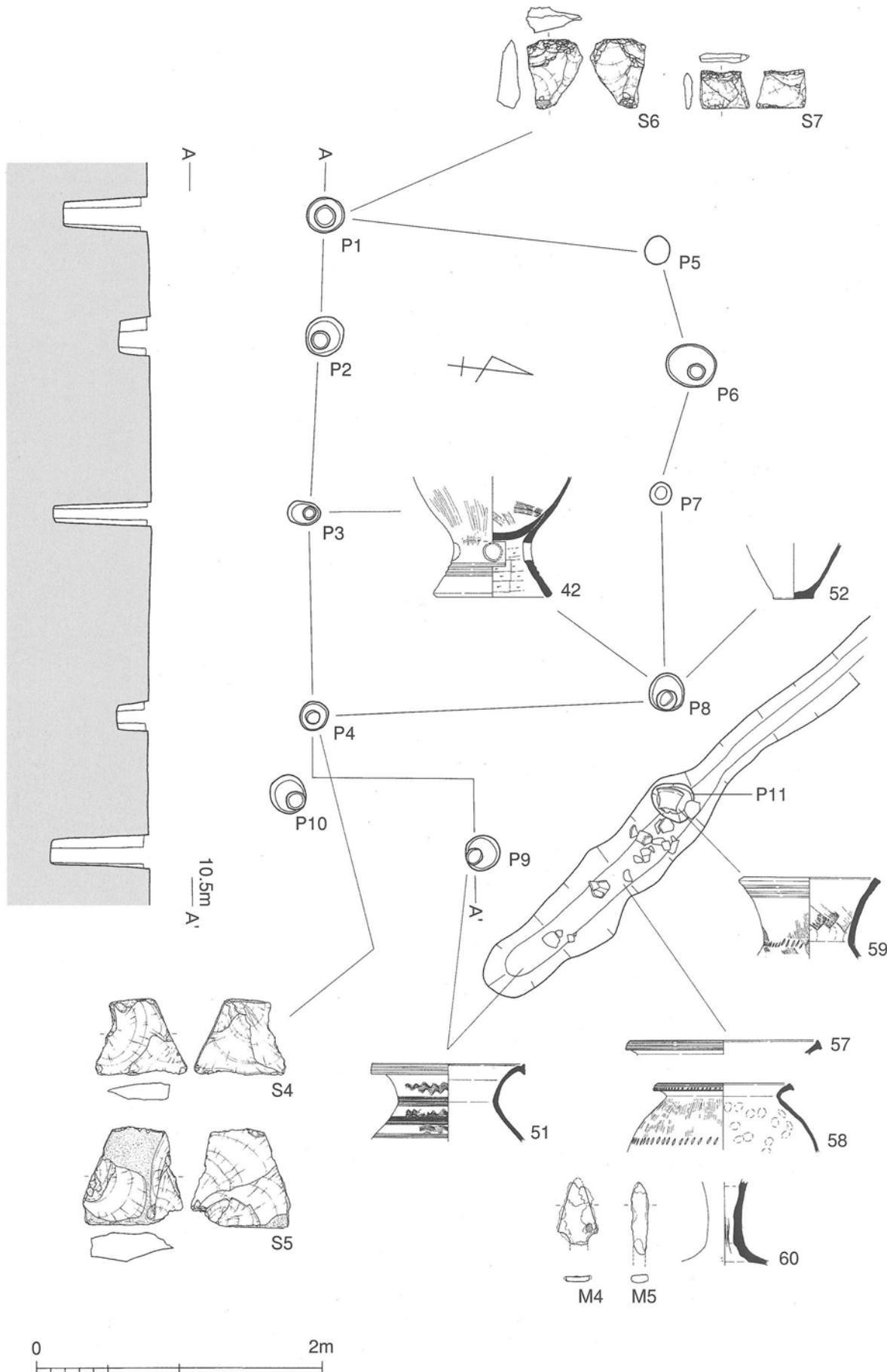
波毛遺跡



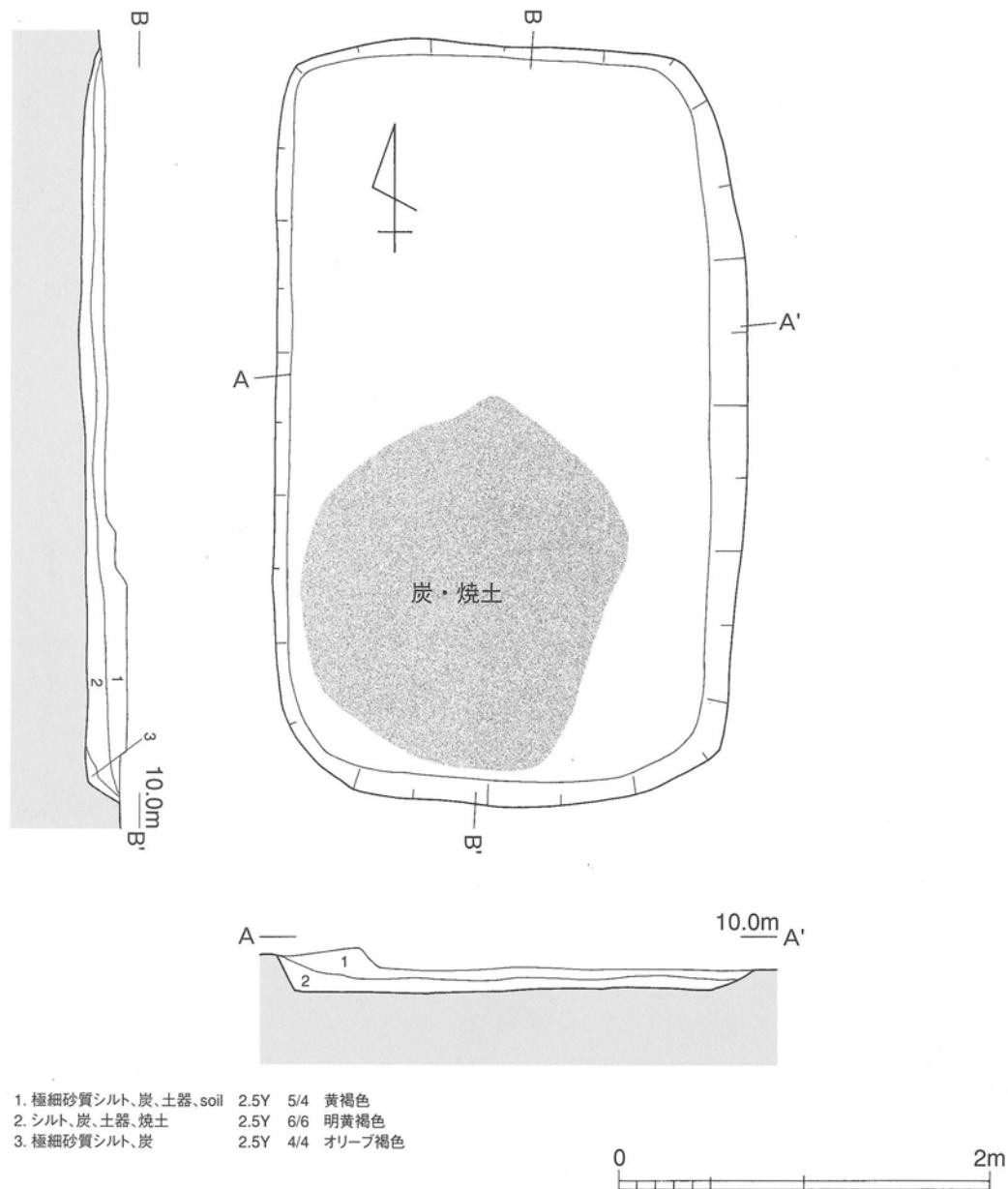
波毛遺跡

図版15

掘立柱建物 S B 202

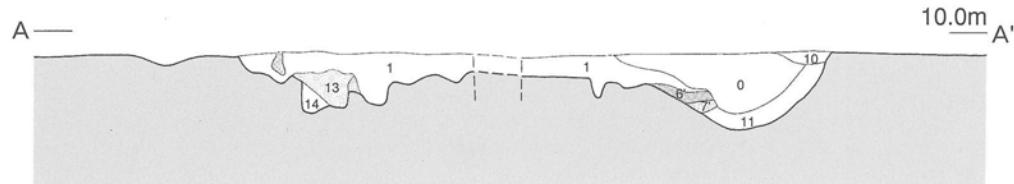
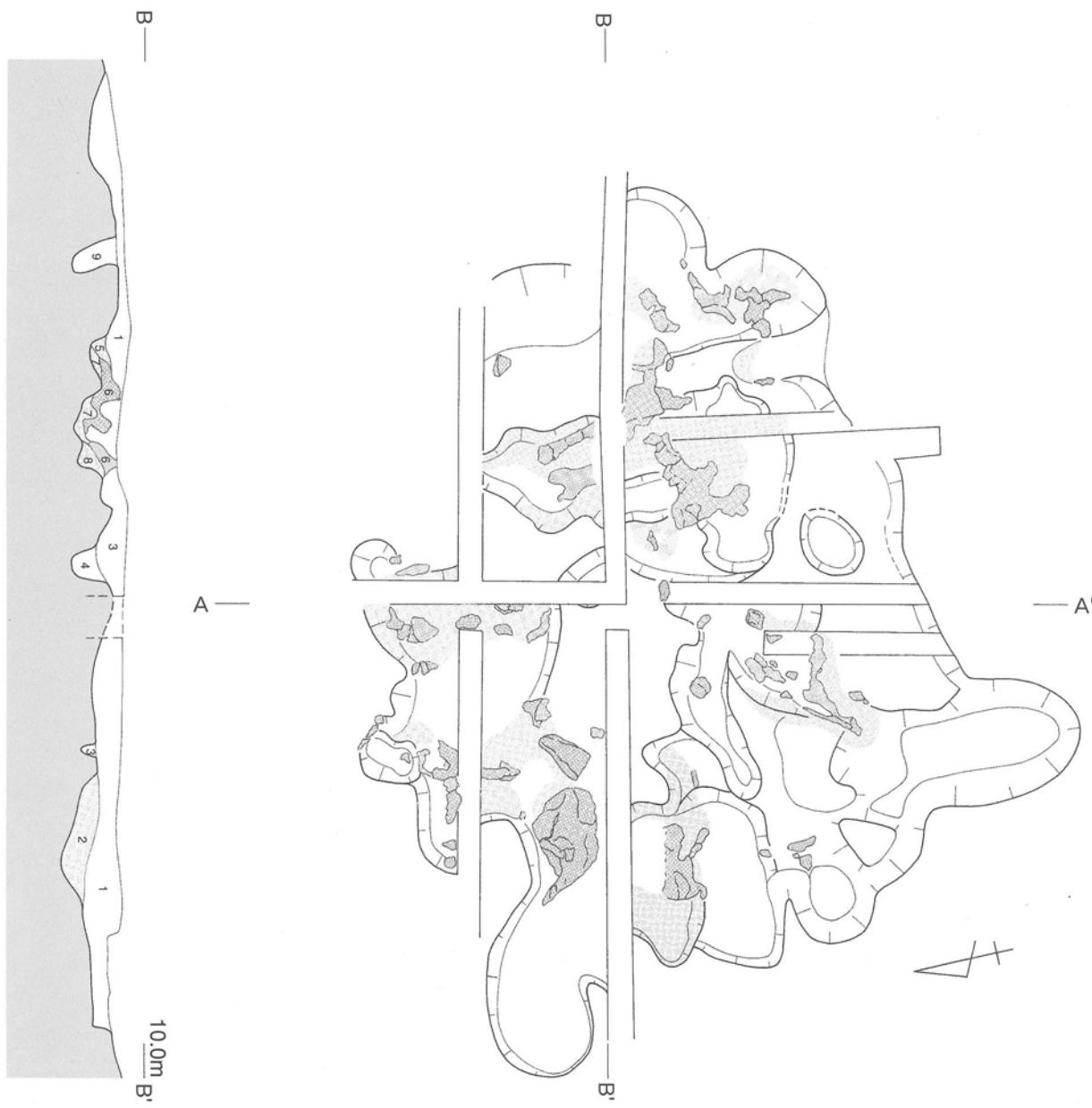


波毛遺跡



波毛遺跡

図版17
焼土坑 S X 202



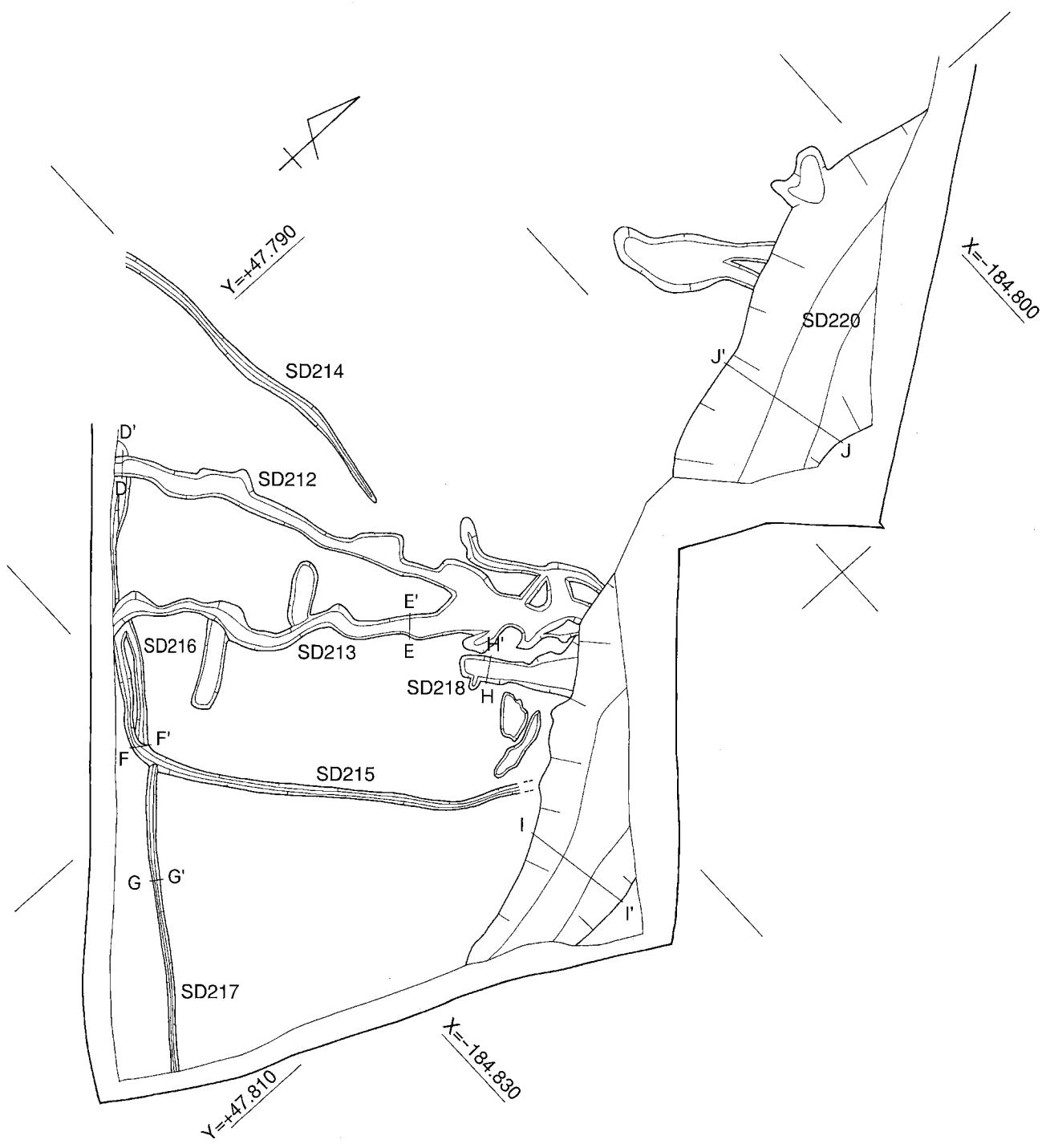
- 上図 1. 10YR 4/3 にぶい黄褐 極細砂質シルト 焼土、炭(サンプリング)
 2. 2.5YR 5/6 明赤褐 極細砂質シルト 热を受けて赤変
 3. 2.5Y 5/3 黄褐 シルト質極細砂 烧土少し(サンプリング)
 5. 2.5YR 4/6 赤褐 極細砂質シルト 赤变
 6. 7.5YR 4/3 褐 ◇ 烧土塊 6' サンプリング
 7. 2.5YR 4/4 にぶい赤褐 ◇ 烧土、炭 7' サンプリング
 8. 2.5YR 5/6 明赤褐 ◇ 赤变
 9. 2.5Y 5/3 黄褐 ◇ 烧土、炭

- 下図 0. 5Y 7/4 浅黄 極細砂質シルト
 10. 10YR 4/2 灰黄褐 ◇
 11. 10TR 4/3 にぶい黄褐 ◇ 烧土少し
 12. 10YR 5/3 ◇ 烧土塊
 13. 5YR 3/2 暗赤褐 ◇ 烧土、炭(サンプリング)
 14. 10YR 5/4 にぶい黄褐 ◇ 烧土少し
 15. 5YR 5/8 明赤褐 ◇ 赤变

0 2m

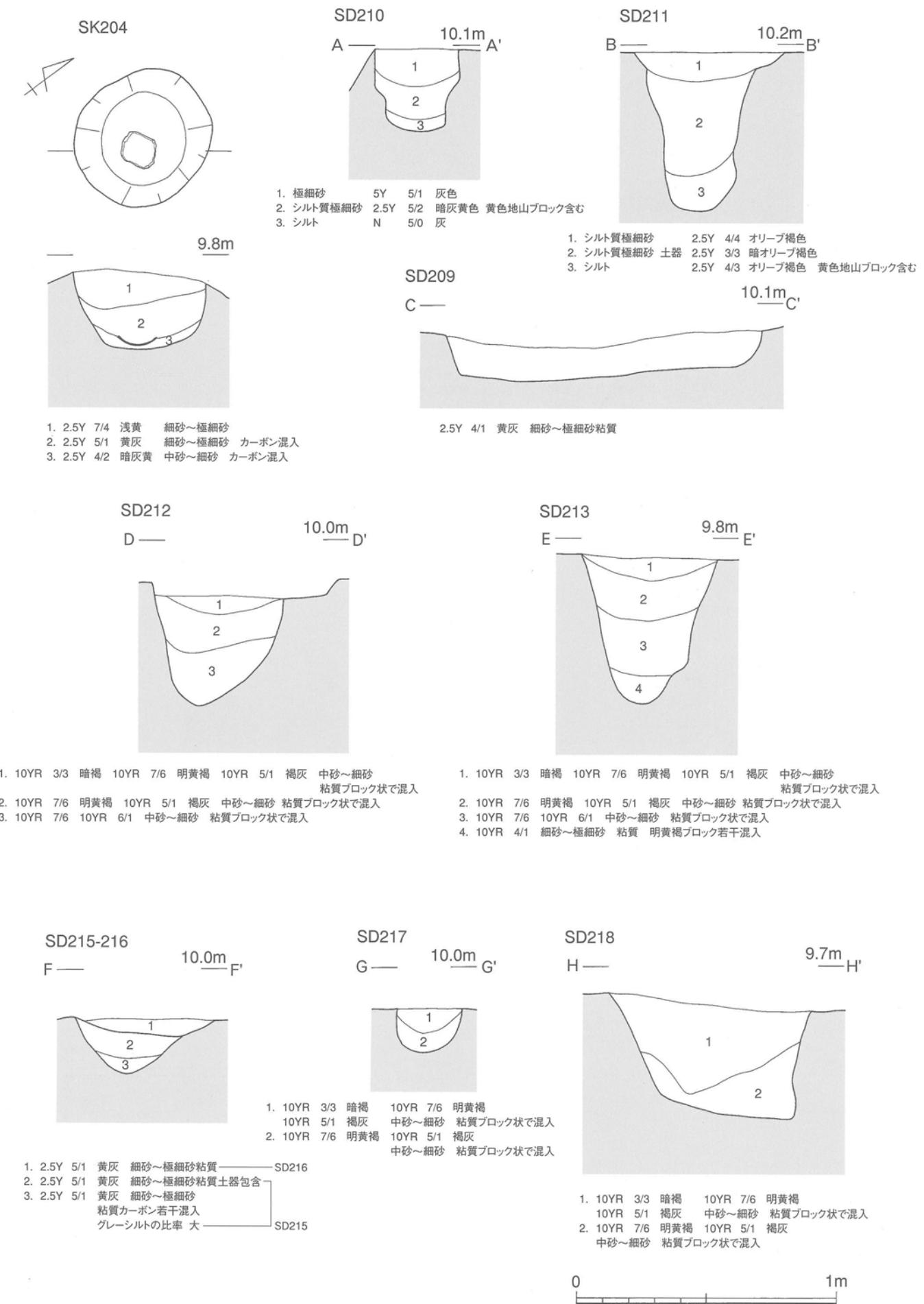
図版18
溝 S D212 ~218・220

波毛遺跡



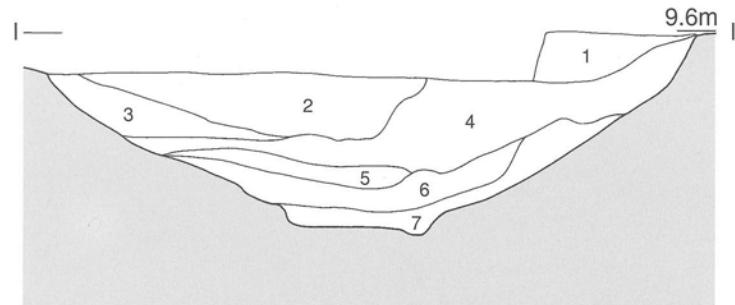
0 10m

波毛遺跡

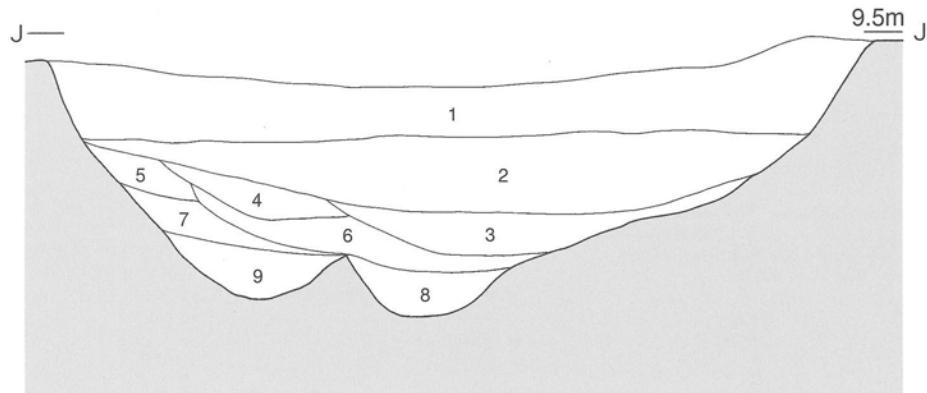


図版20
溝 S D 220 断面図

波毛遺跡



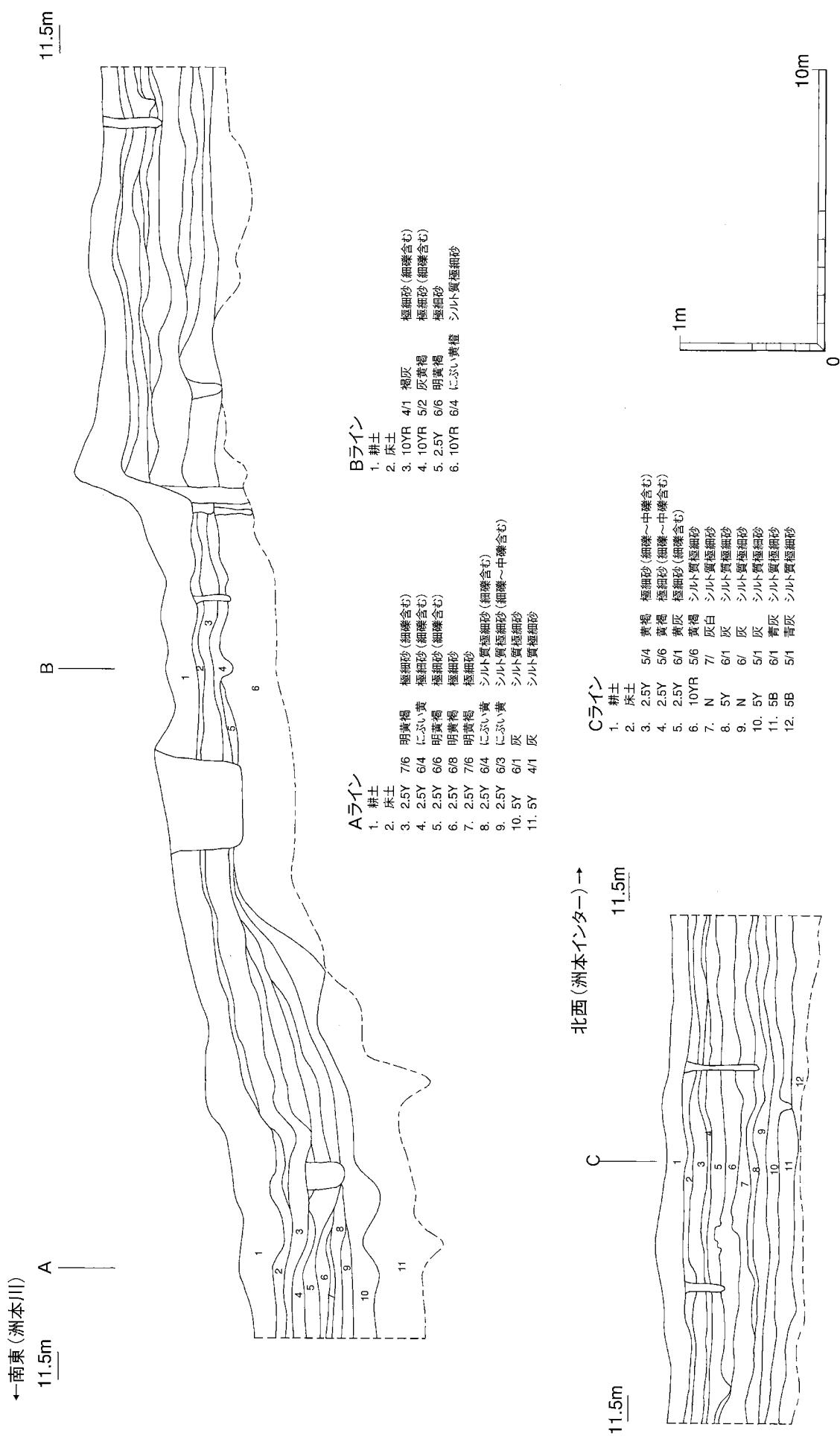
- | | |
|-------------------|---|
| 1. 2.5YR 5/2 暗灰黄 | シルト質極細砂 Fe ₂ O ₃ 含む |
| 2. 10Y 4/2 オリーブ灰 | シルト 青灰色シルトのブロック含む |
| 3. 10GY 4/1 暗緑灰 | シルト |
| 4. 5GY 5/1 オリーブ灰 | 極細砂質シルト |
| 5. 7.5GY 4/1 暗緑灰 | シルト 青灰白シルトのブロック含む |
| 6. 7.5GY 5/1 緑灰 | コースシルト |
| 7. 5GY 4/1 暗オリーブ灰 | シルト 青灰色シルトのブロック 土器 |



- | | |
|------------------------------|-------------------|
| 1. 5Y 5/1 灰 | 細砂～極細砂 シルト質 |
| 2. 5G 6/1 緑灰 | 細砂質 シルト |
| 3. 5G 4/1 5G 6/1 混入 | カーボン若干混入 細砂質シルト |
| 4. 5G 5/1 細砂質シルト | |
| 5. 10G 5/1 細砂～極細砂質シルト | |
| 6. 5G 6/1～5G 4/1 ブロック状で混在 | 細砂～極細砂質シルト カーボン混入 |
| 7. 5G 6/1～5G 4/1 ブロック状で混在 | 細砂～極細砂質シルト |
| 8. 10G 4/1 暗緑灰 | 極細砂質シルト |
| 9. 5G 6/1 緑灰シルト 5G 4/1 粗砂～細砂 | 砂の互層 |

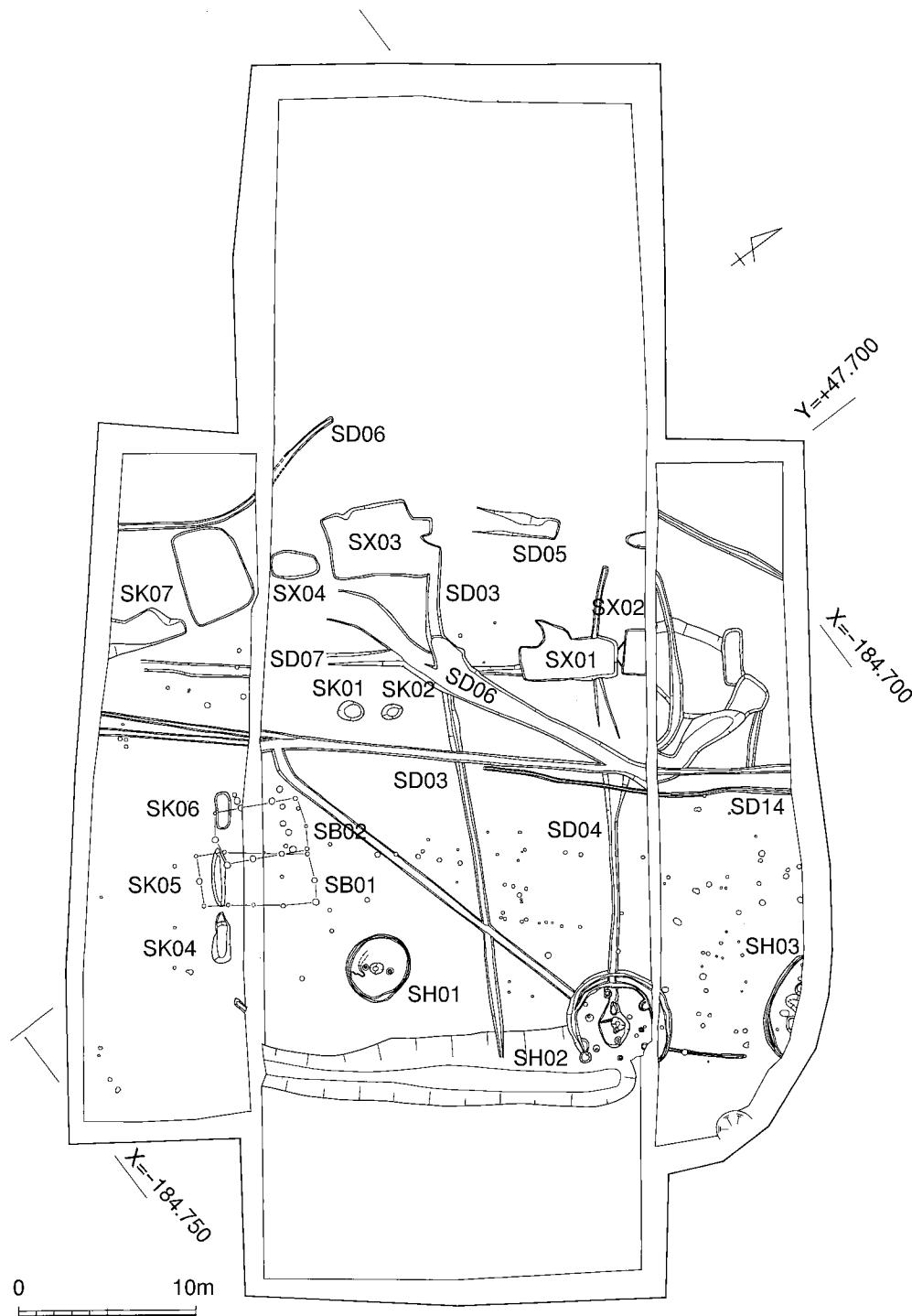


波毛遺跡



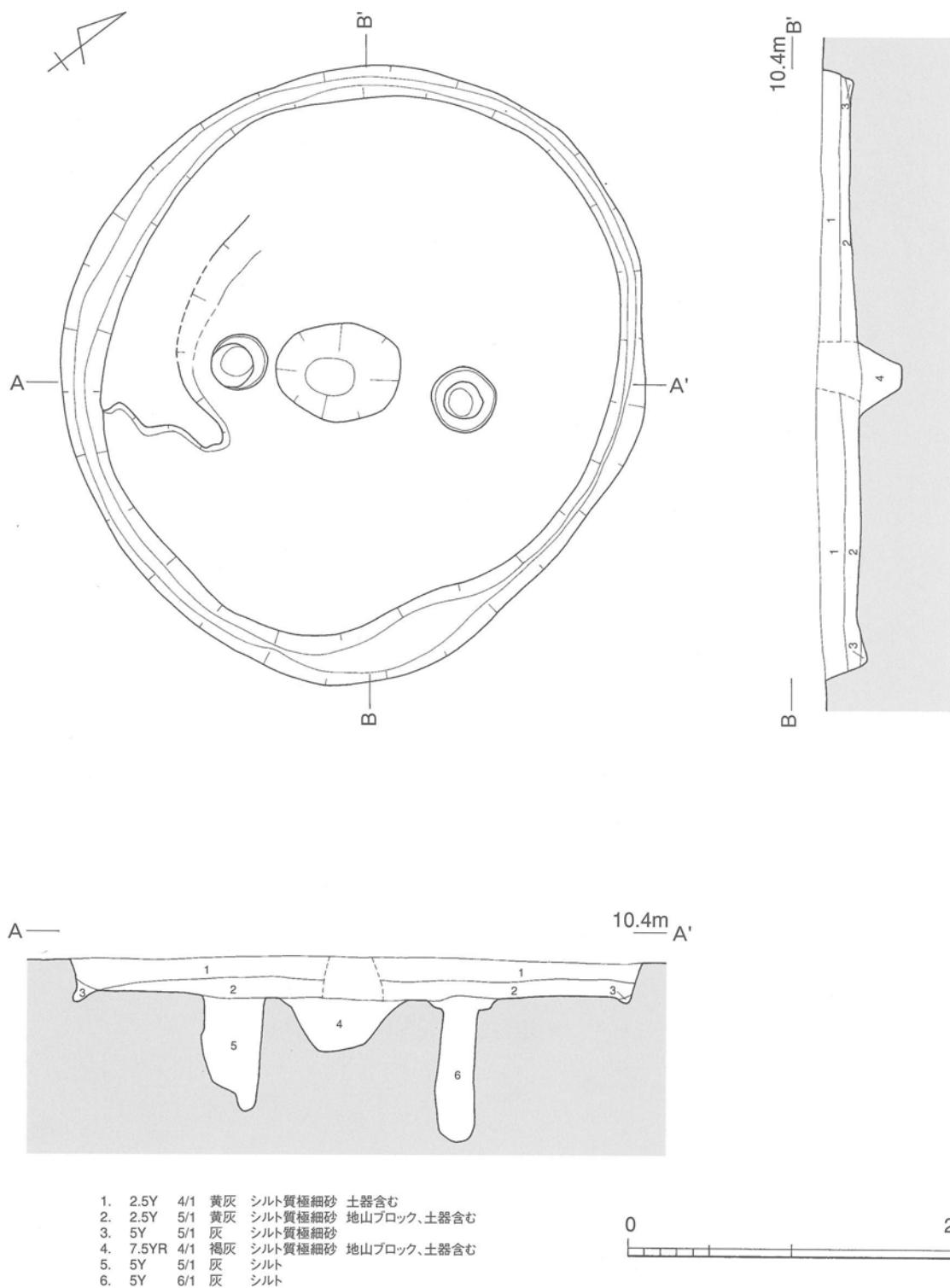
図版22
C地区全体図

波毛遺跡

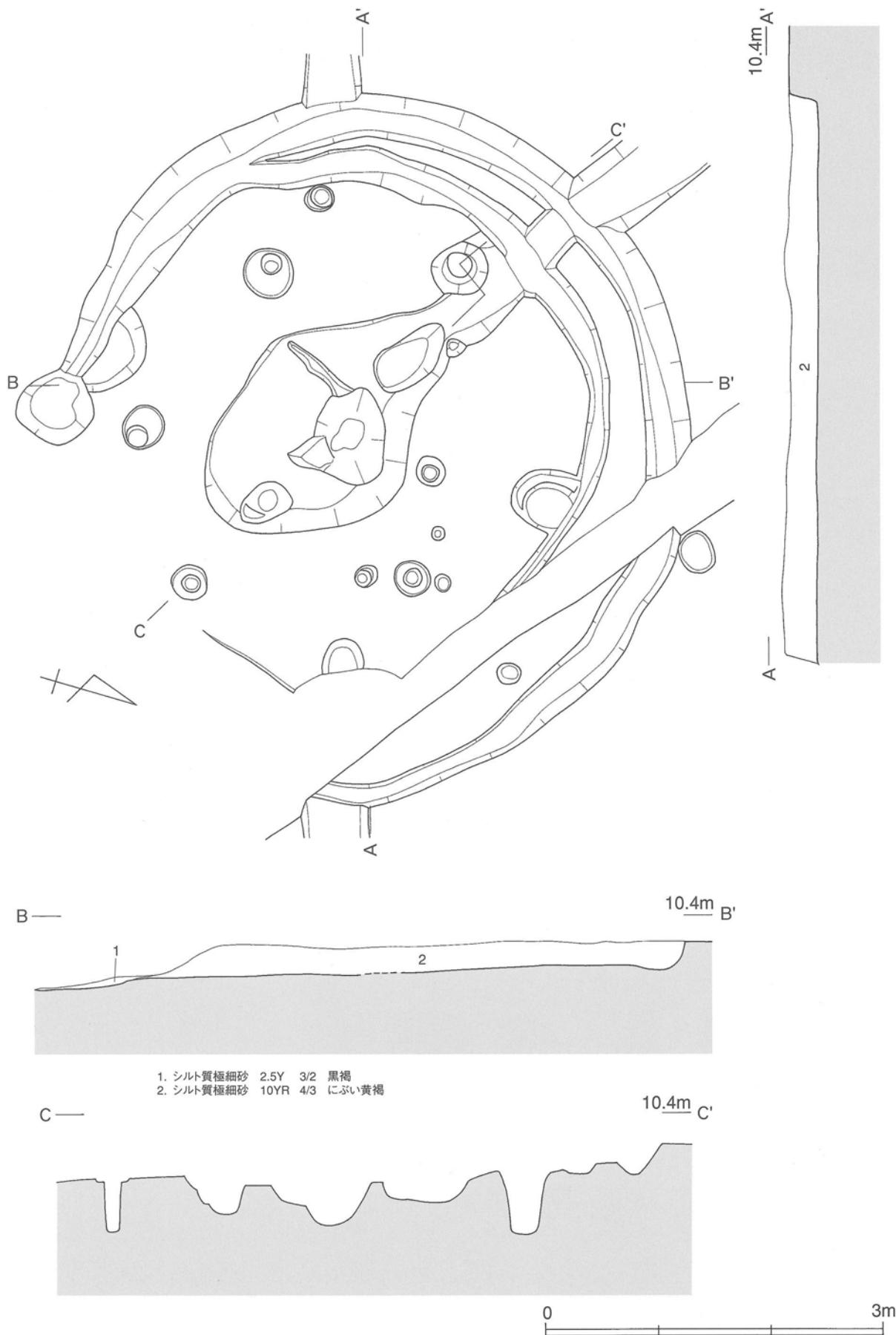


波毛遺跡

図版23
竪穴住居 S H01

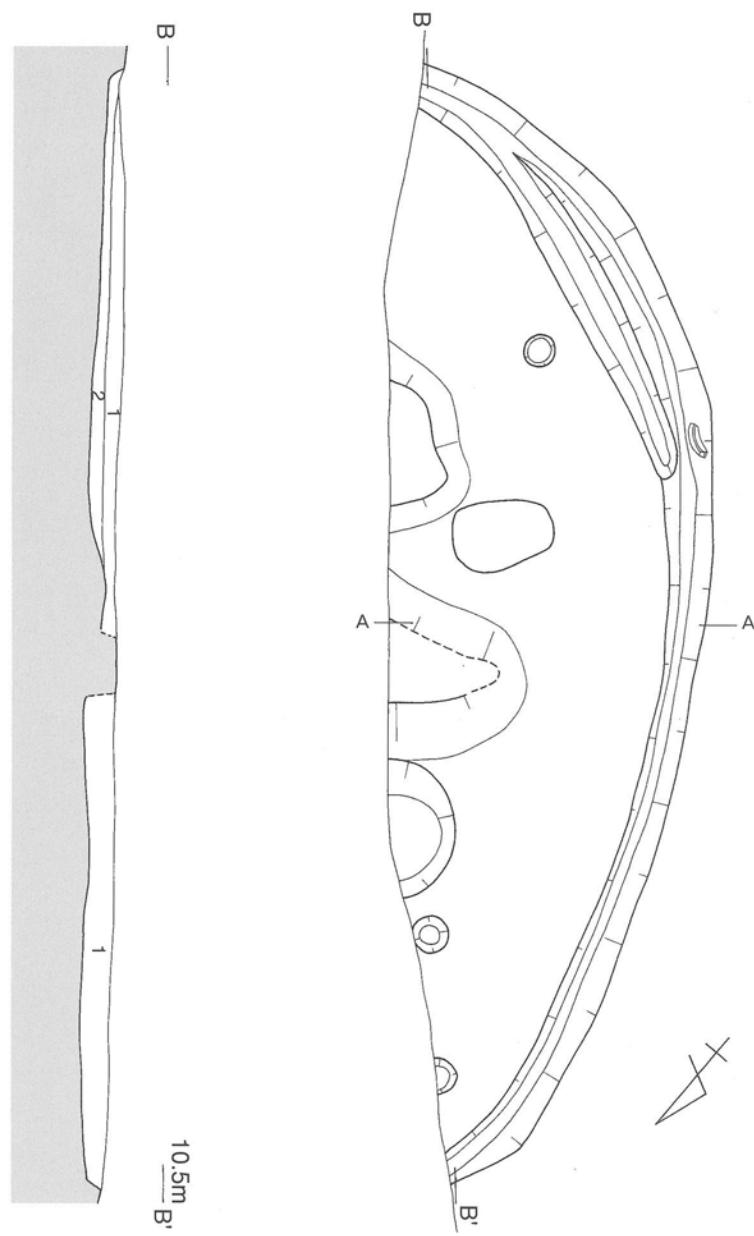


波毛遺跡

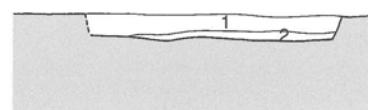


波毛遺跡

図版25
竪穴住居 S H 03



A— 10.5m A'



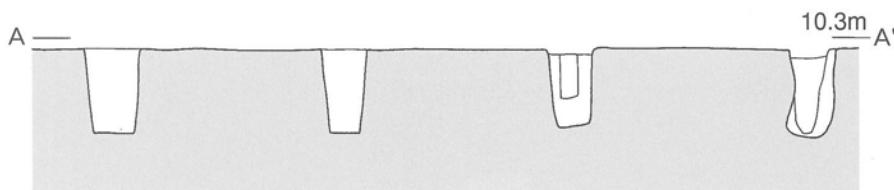
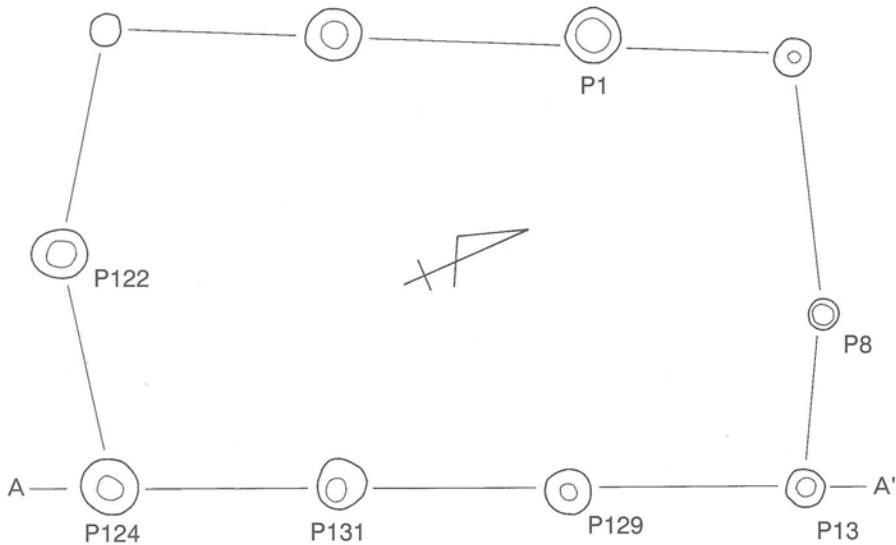
0 2m

1. 2.5Y 5/1 黄灰 シルト質極細砂
2. 5Y 5/1 灰 シルト質極細砂

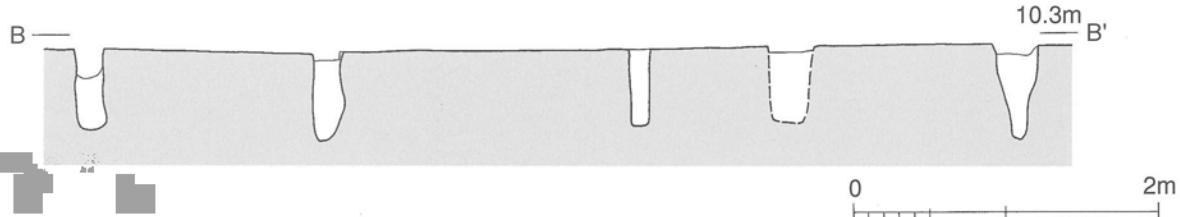
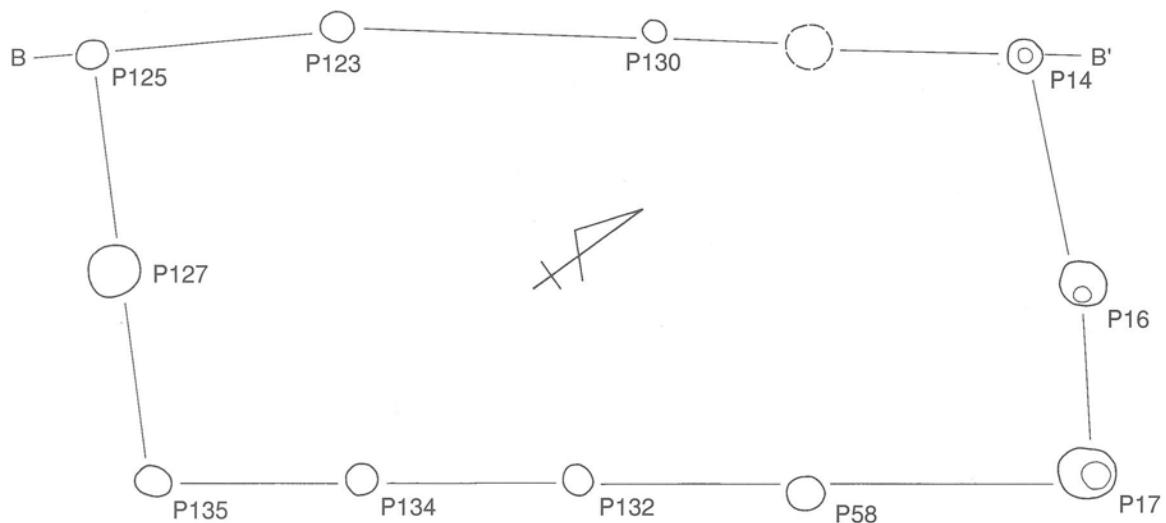
図版26
掘立柱建物 S B01・02

波毛遺跡

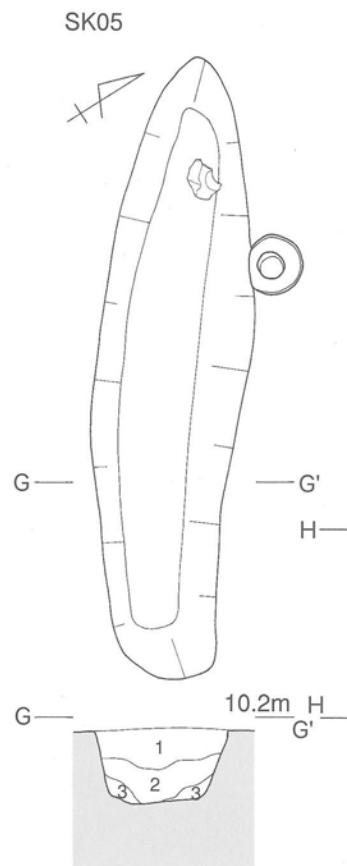
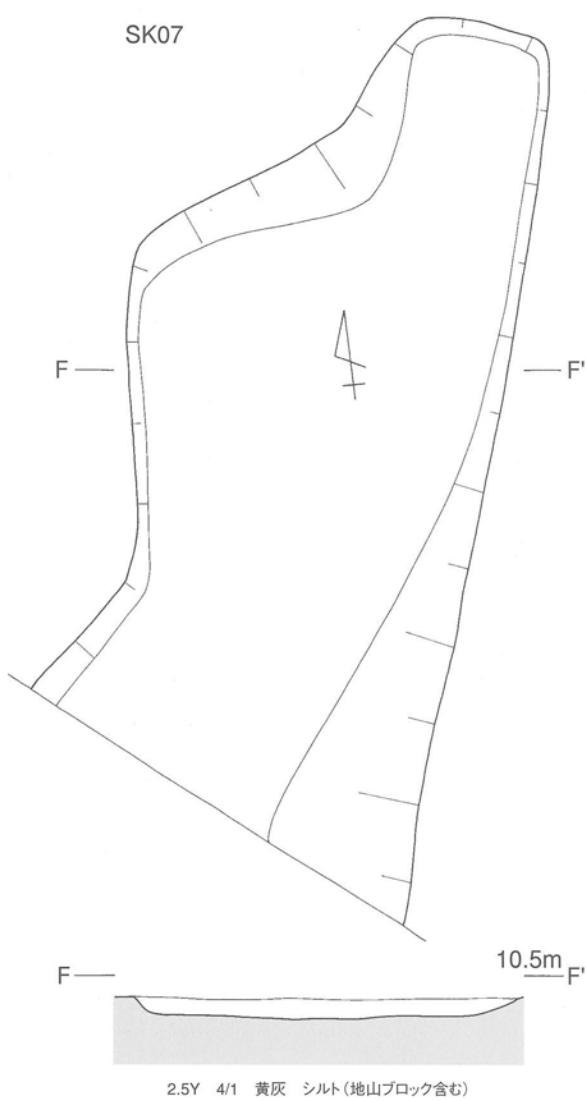
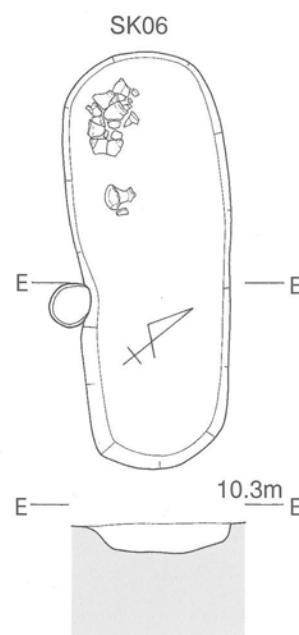
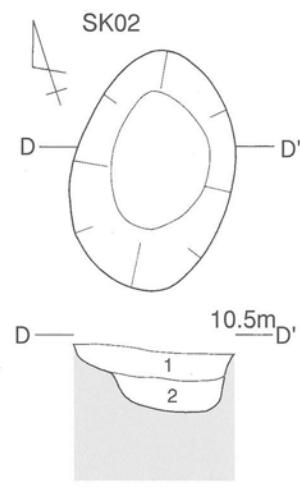
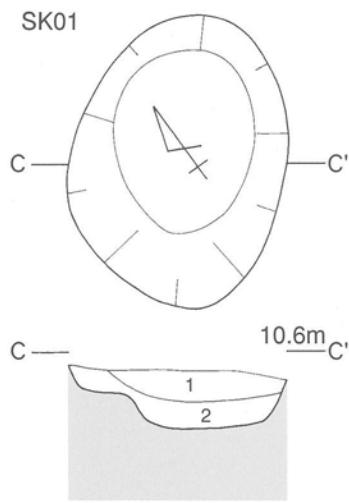
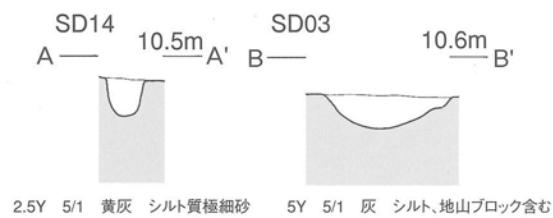
SB02



SB01



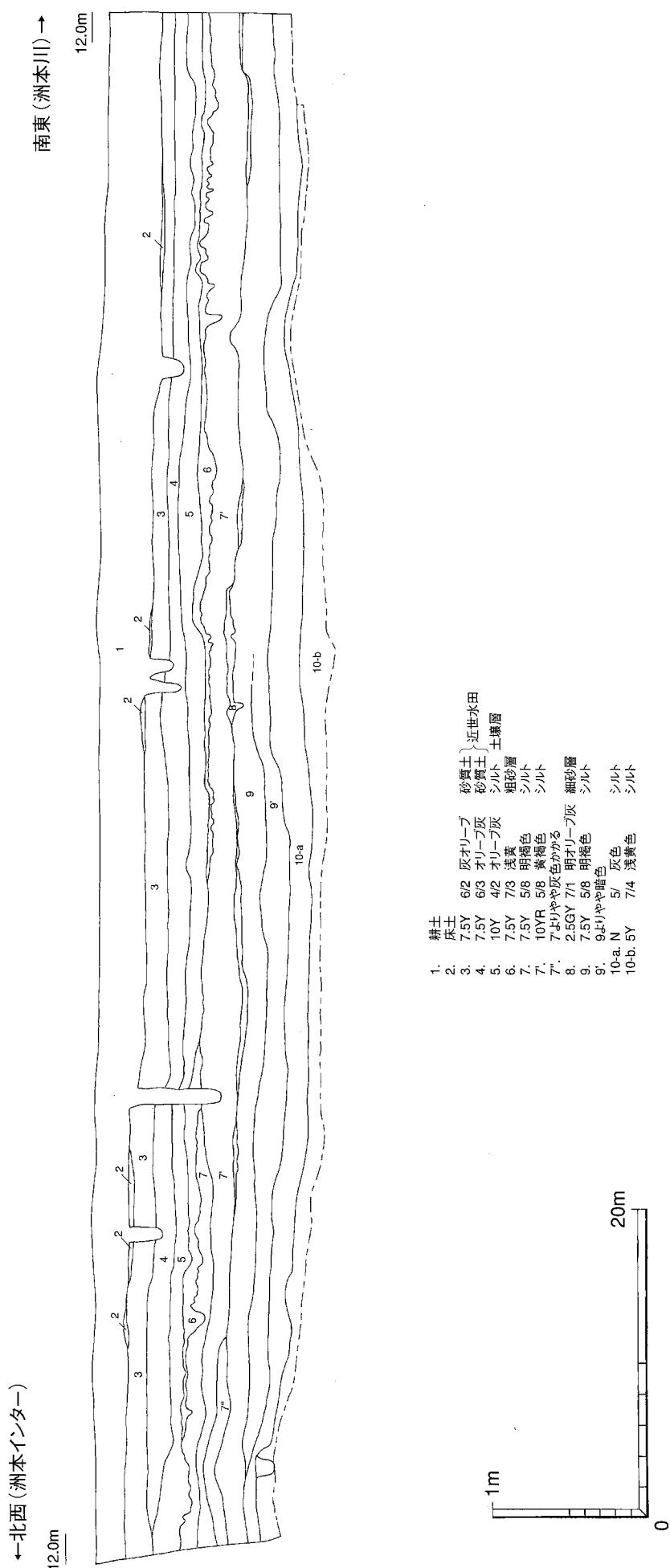
波毛遺跡



1. 2.5Y 6/2 灰黄 シルト質極細砂
2. 2.5Y 5/1 黄灰 砂質シルト

0 2m

波毛遺跡



A 地区土層断面図

南東(洲本川)→

←北西(洲本インター)

B

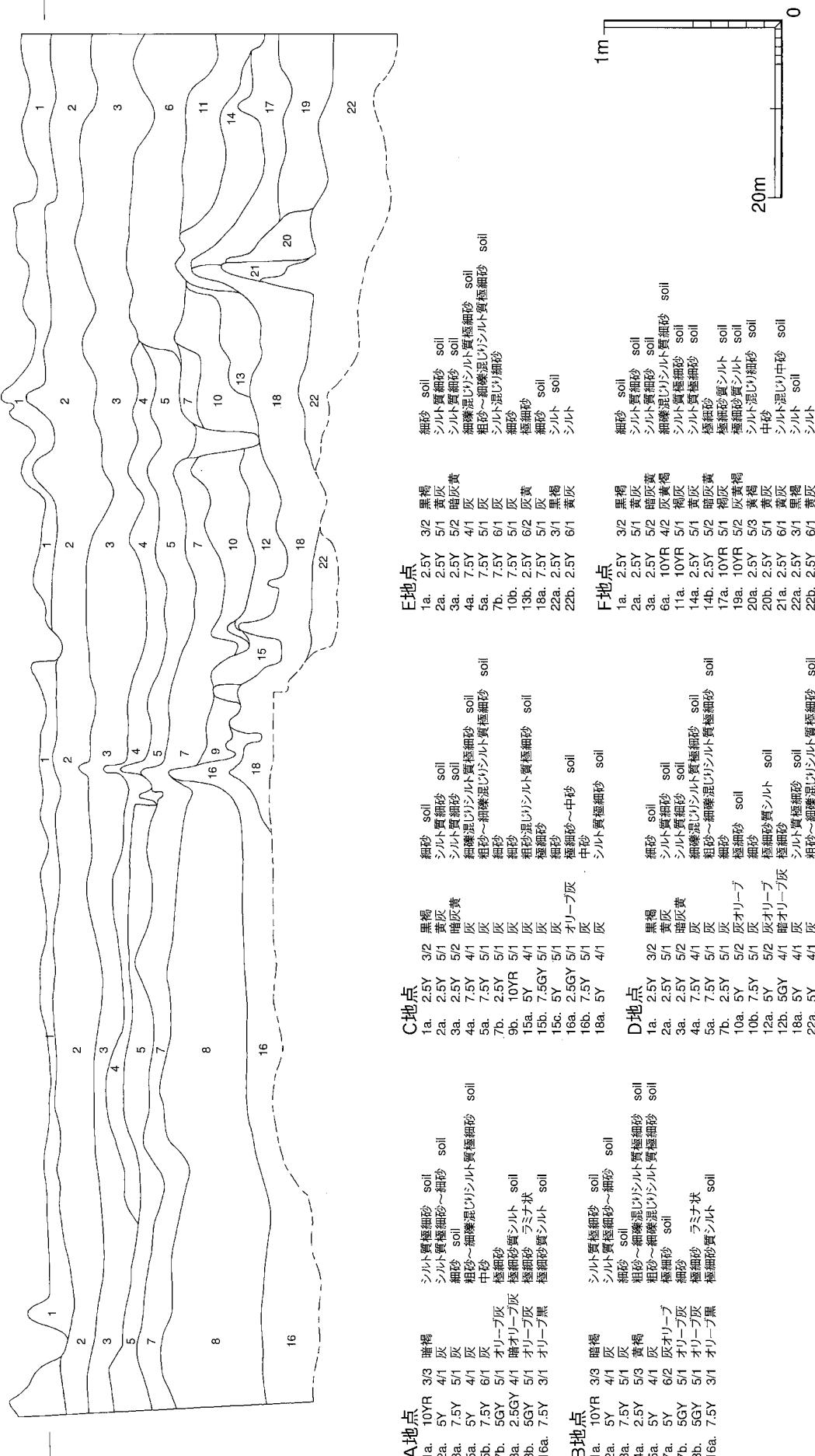
D

C

E

F

波毛遺跡



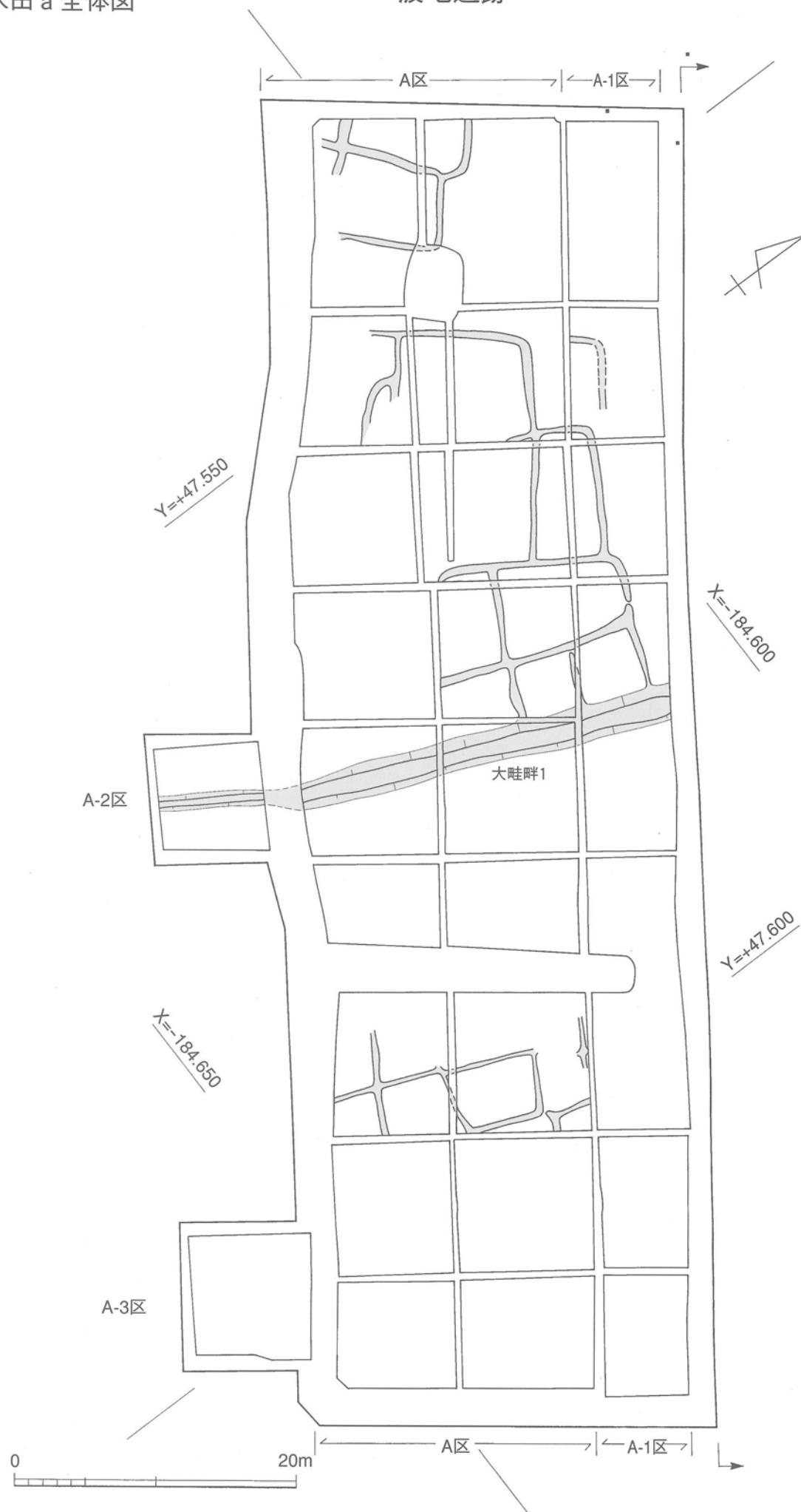
1m

20m

図版30

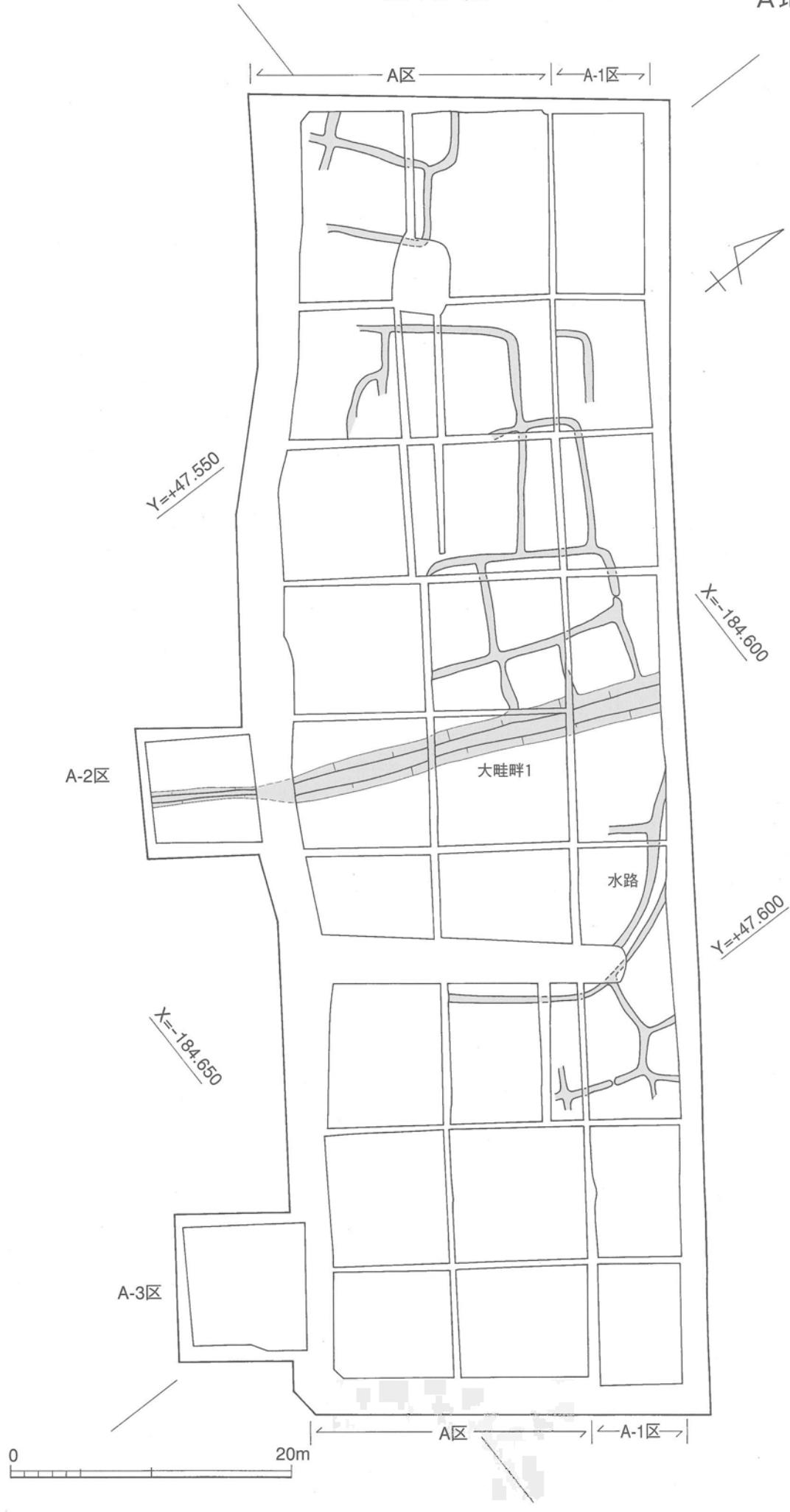
A地区水田 a 全体図

波毛遺跡



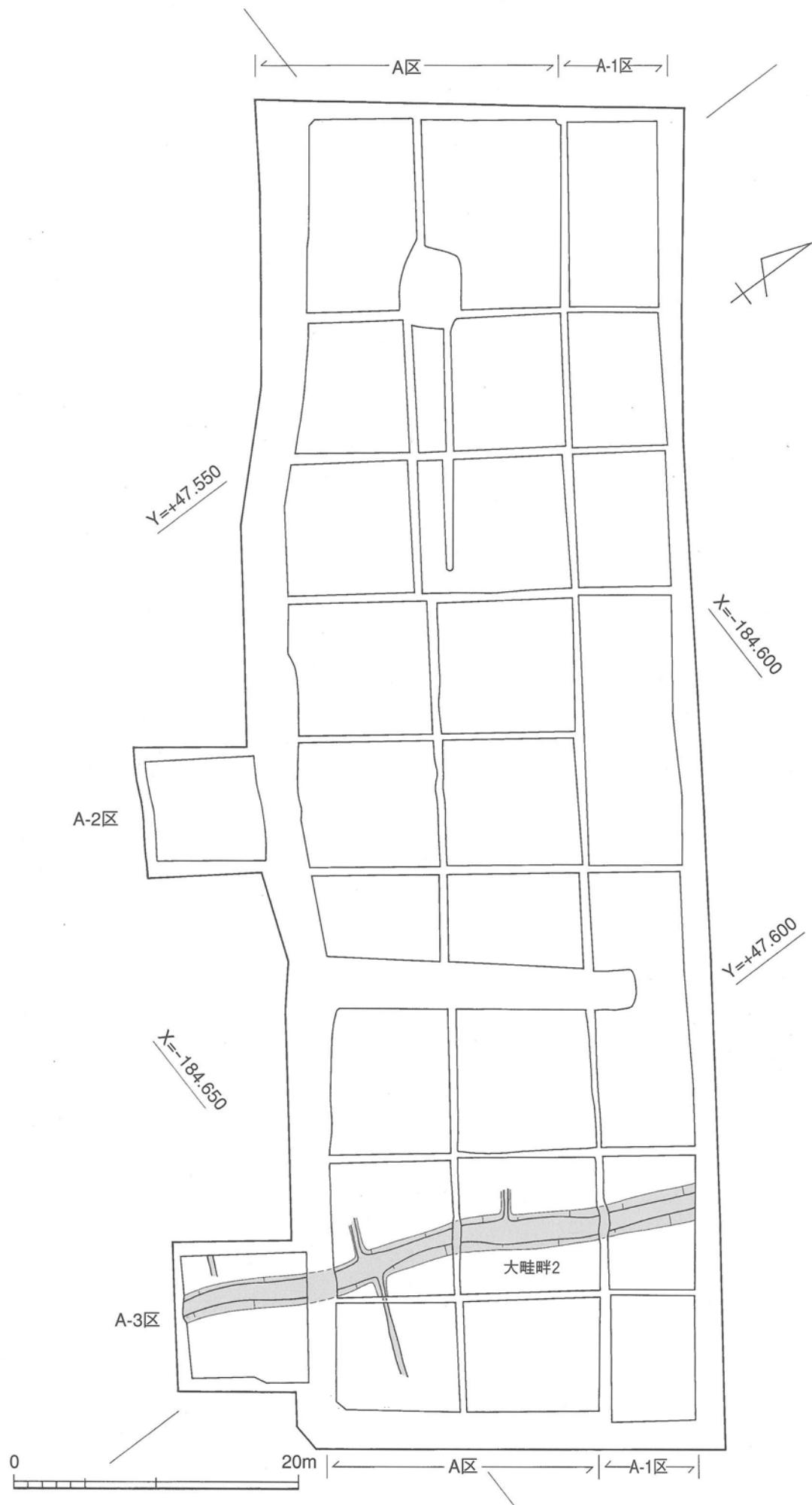
波毛遺跡

図版31
A地区水田b全体図



図版32
A地区水田c全体図

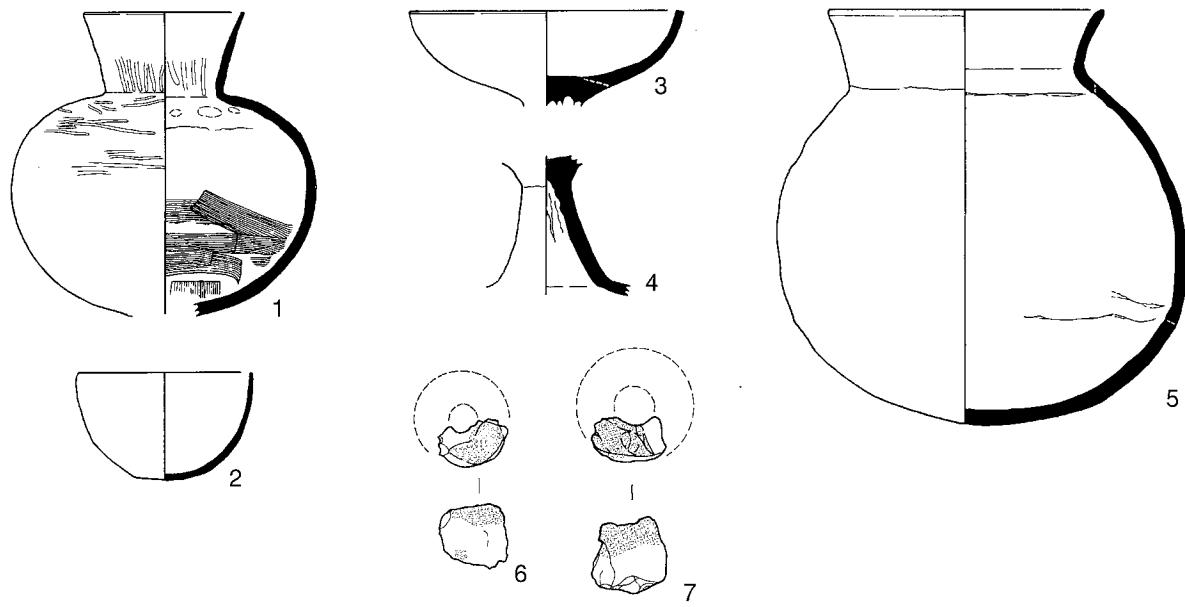
波毛遺跡



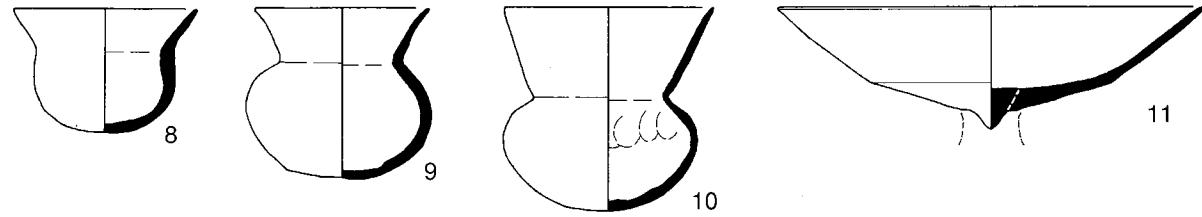
波毛遺跡

D地区第1面出土土器(1)

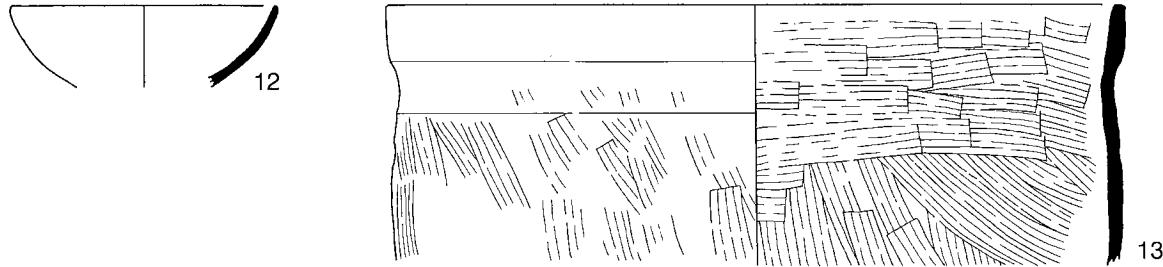
SH101



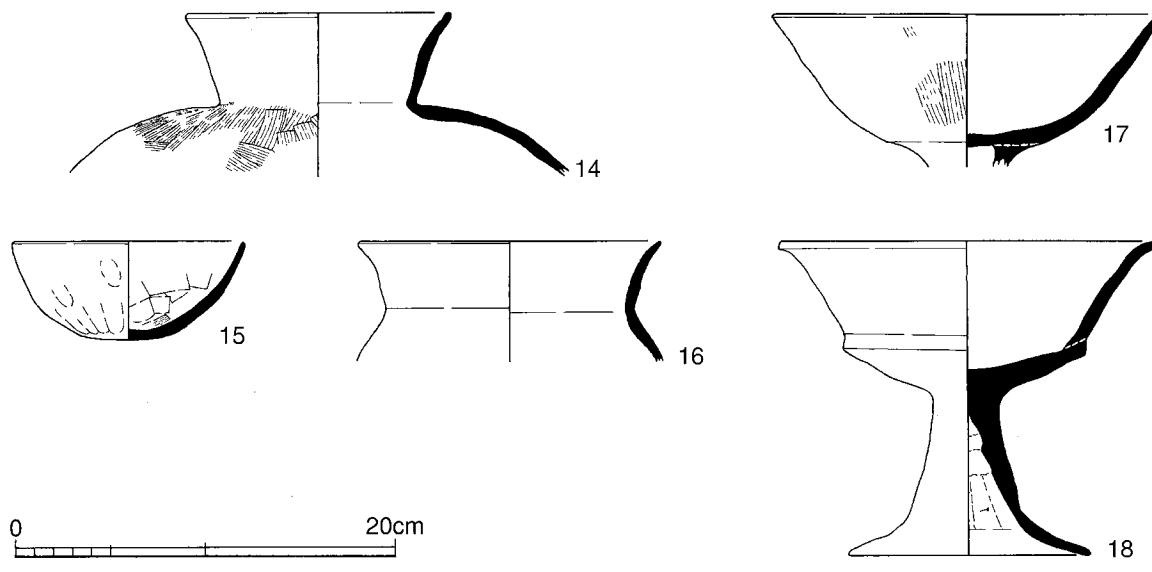
SH102



SH103



SH104

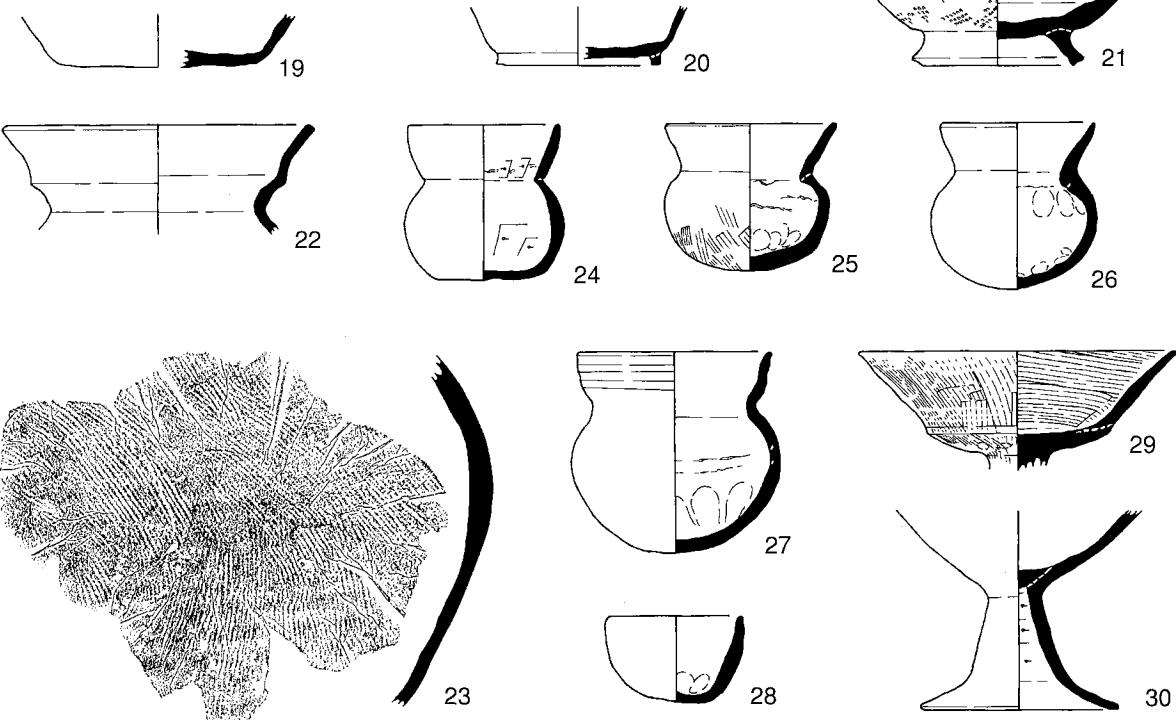


0

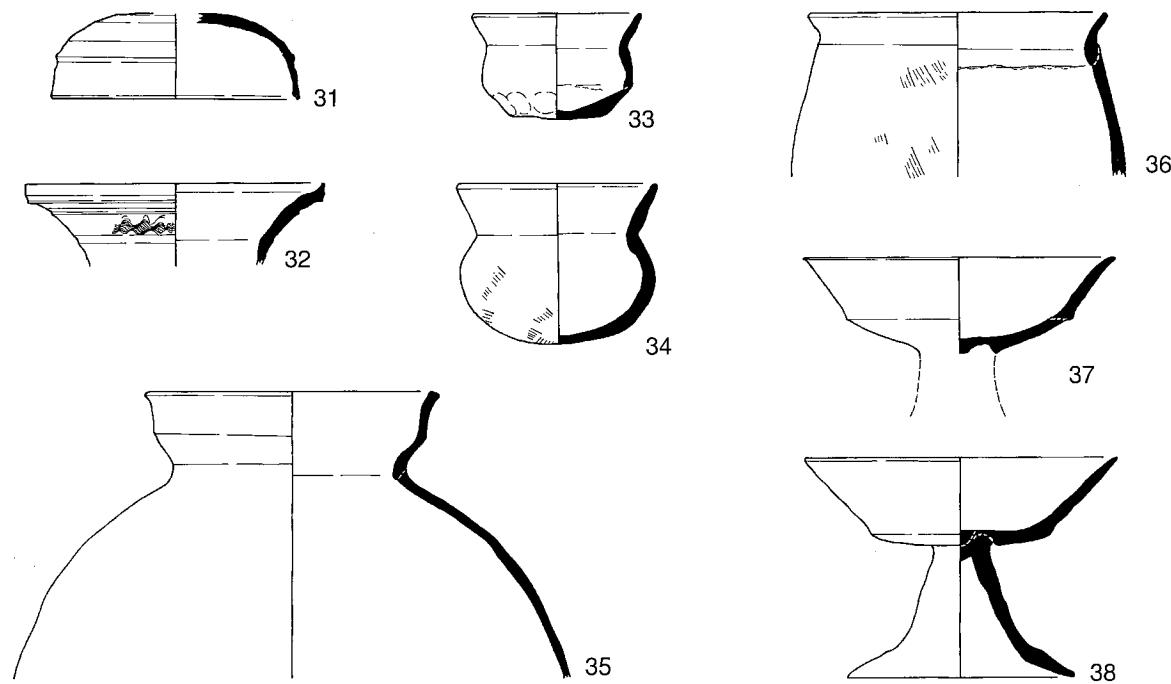
20cm

波毛遺跡

旧河道



包含層

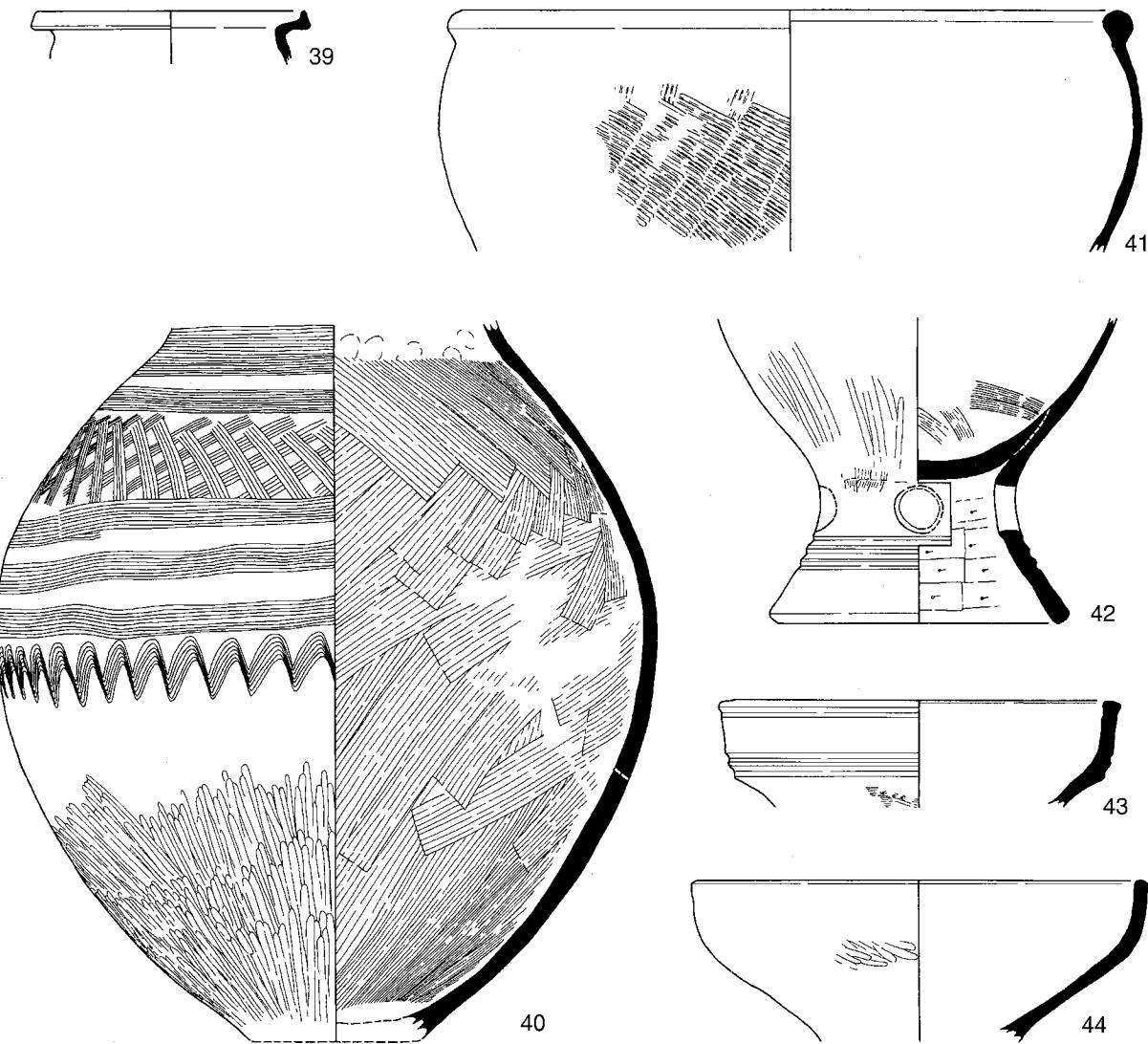


0 20cm

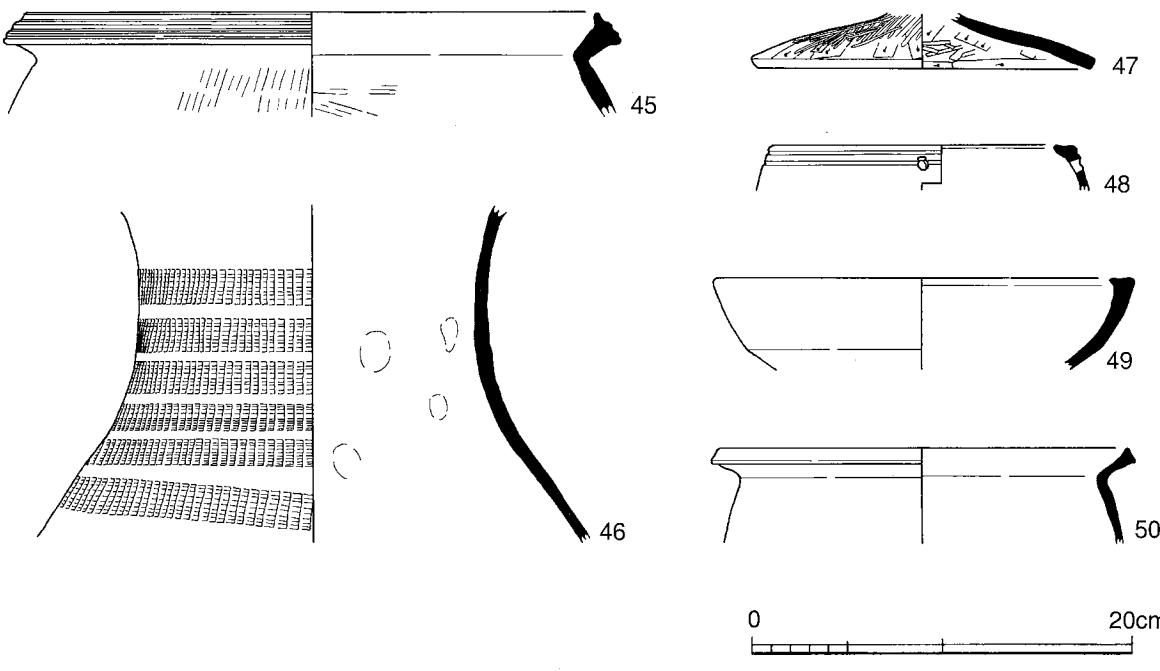
波毛遺跡

D地区第2面出土土器(1)

SB201 柱穴内



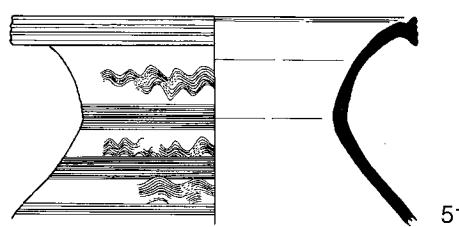
SB201 周辺包含層



0 20cm

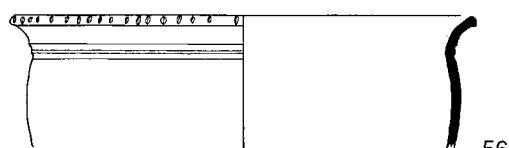
波毛遺跡

柱穴内

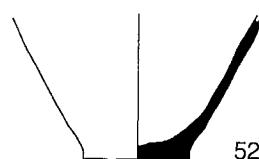


51

SK205

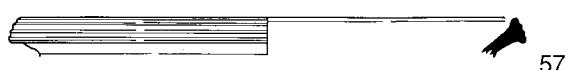


56



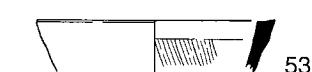
52

SD201

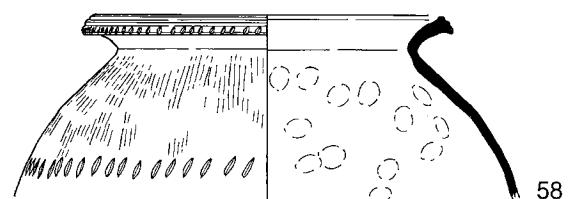


57

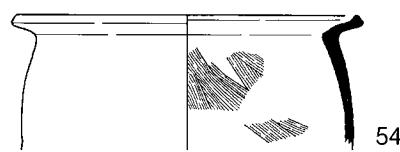
SX201



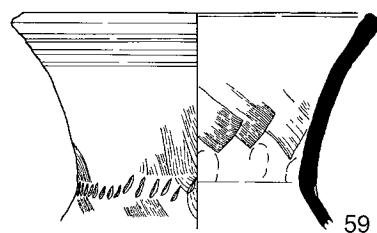
53



58

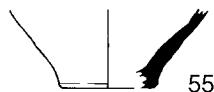


54

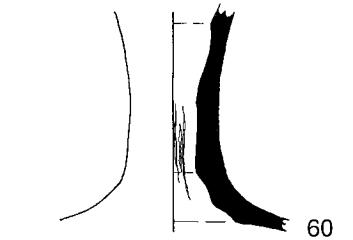


59

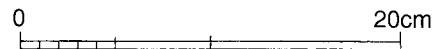
SX202

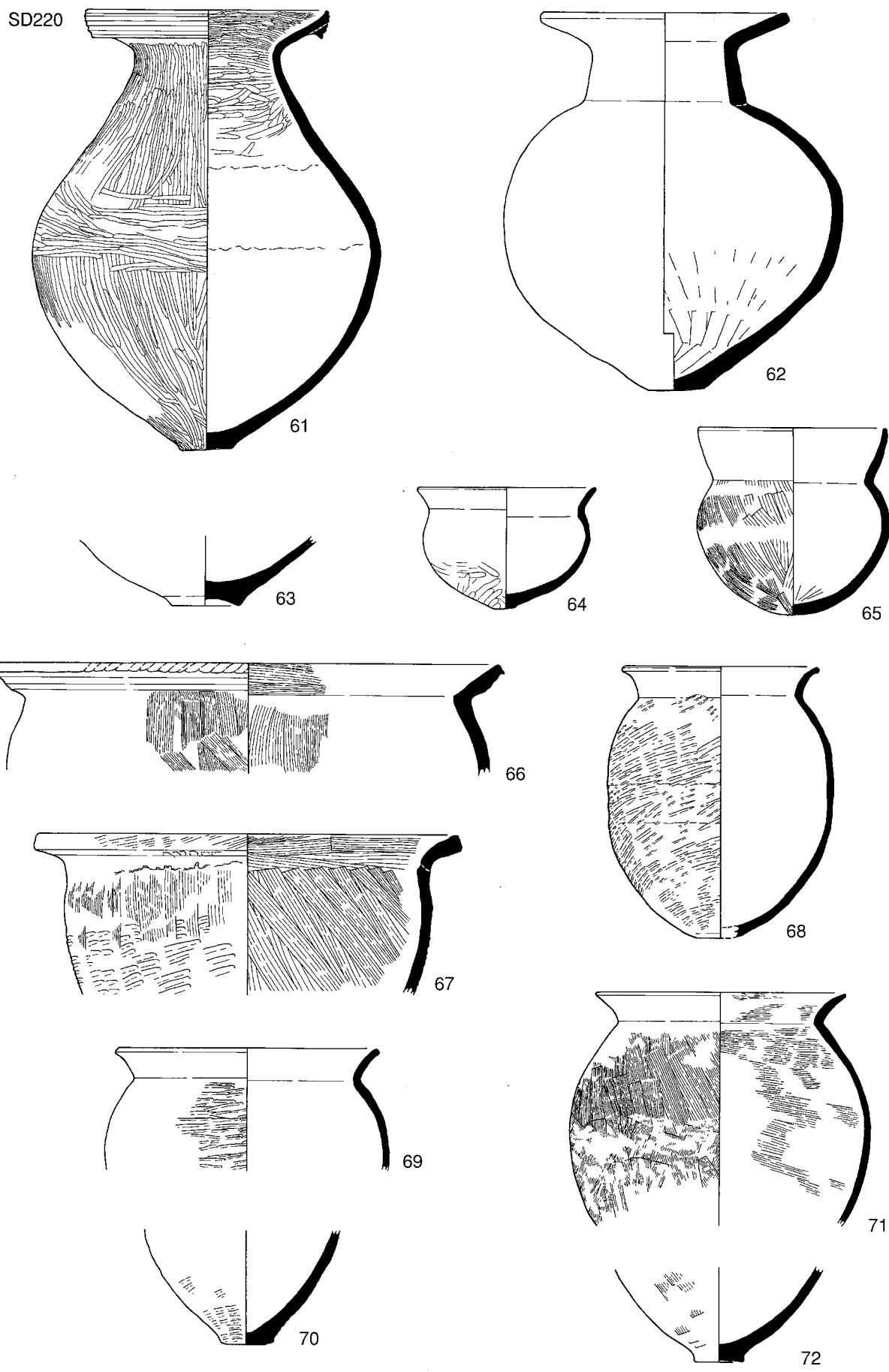


55



60



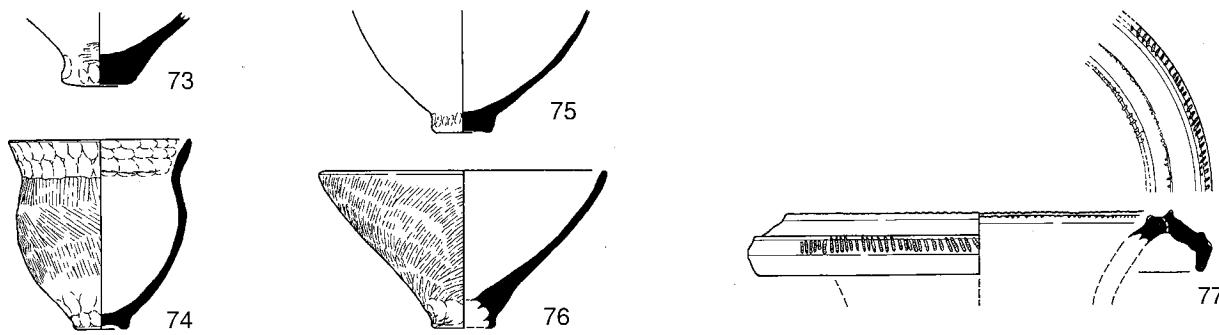


0 20cm

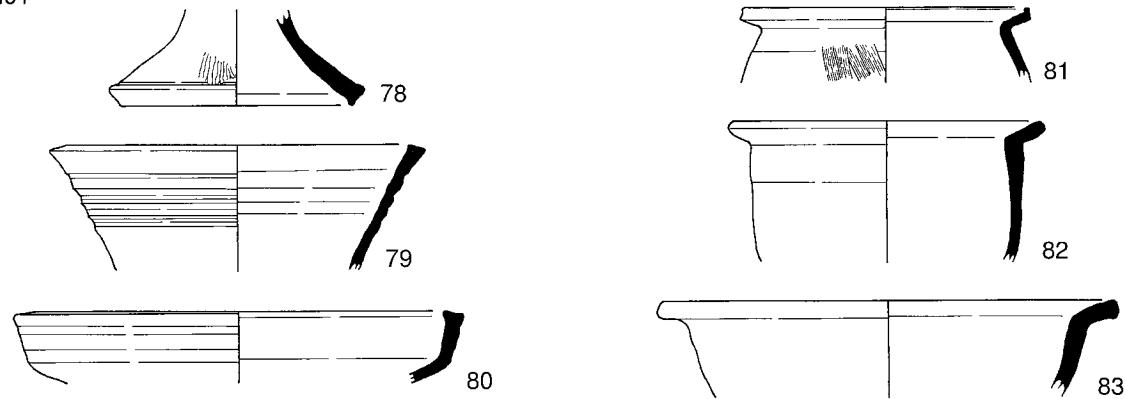
図版38
C地区出土土器(1)

波毛遺跡

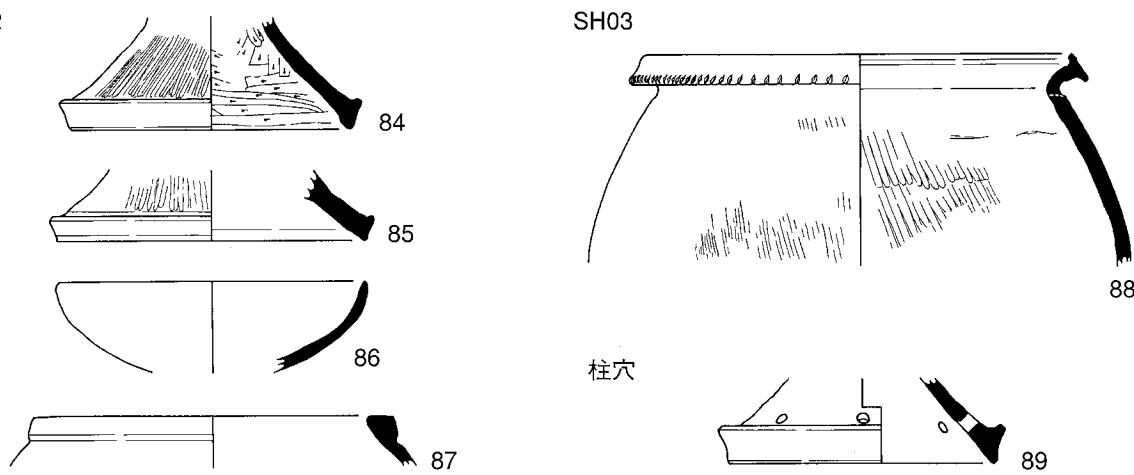
溝



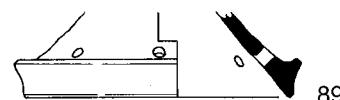
SH01



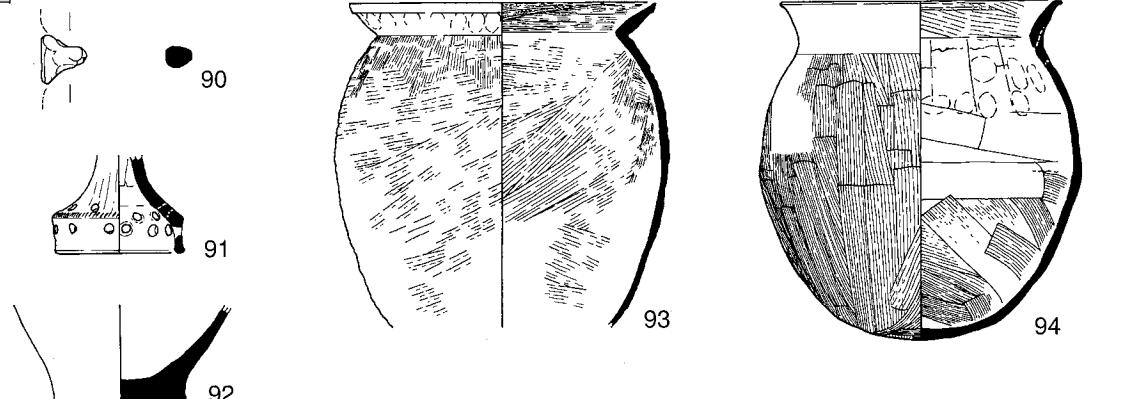
SH02



柱穴



包含層

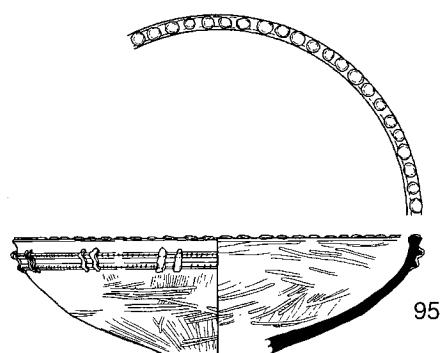


0 20cm

波毛遺跡

C 地区出土土器(2)

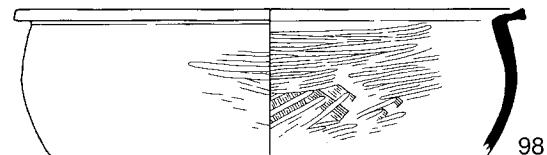
SK01



95



97



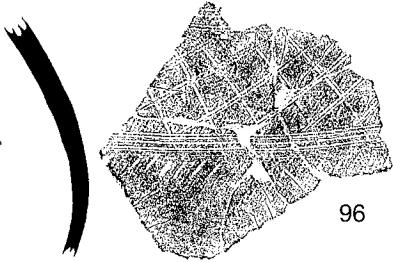
98



99

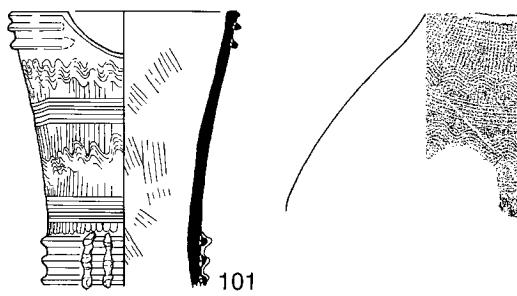


96

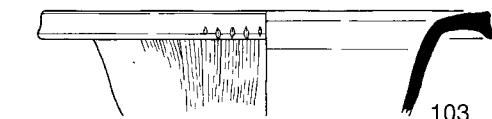


100

SK02

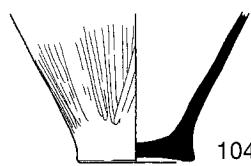


101



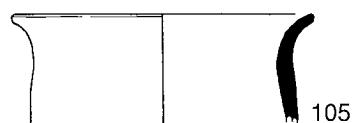
103

102



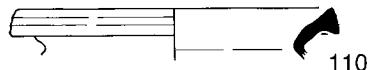
104

SK04



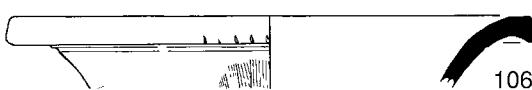
105

SK07



110

106

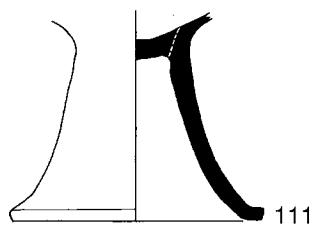


SK05



107

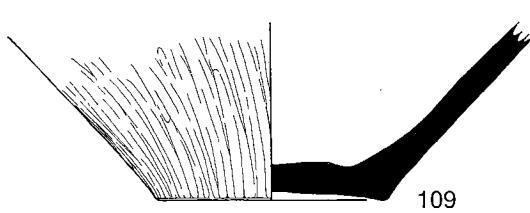
SK06



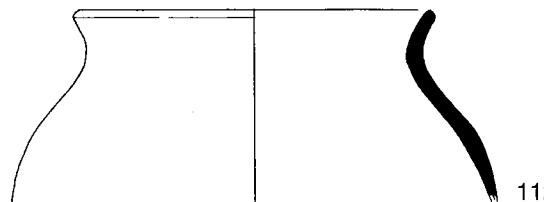
111



108



109



112

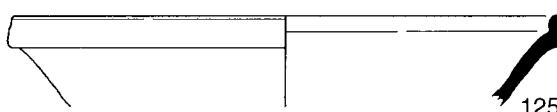
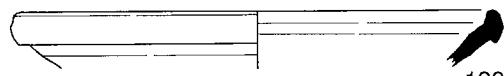
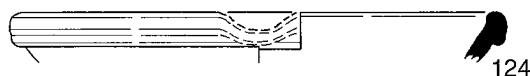
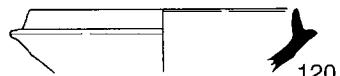
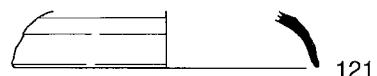
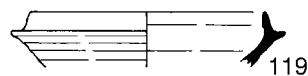
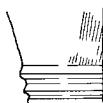
0

20cm

図版40
A・B地区出土土器

波毛遺跡

A地区



128



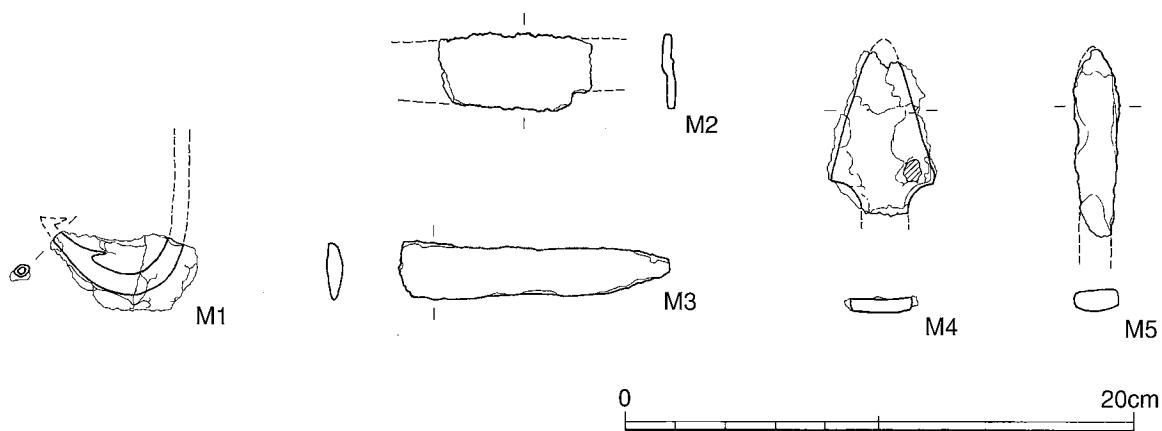
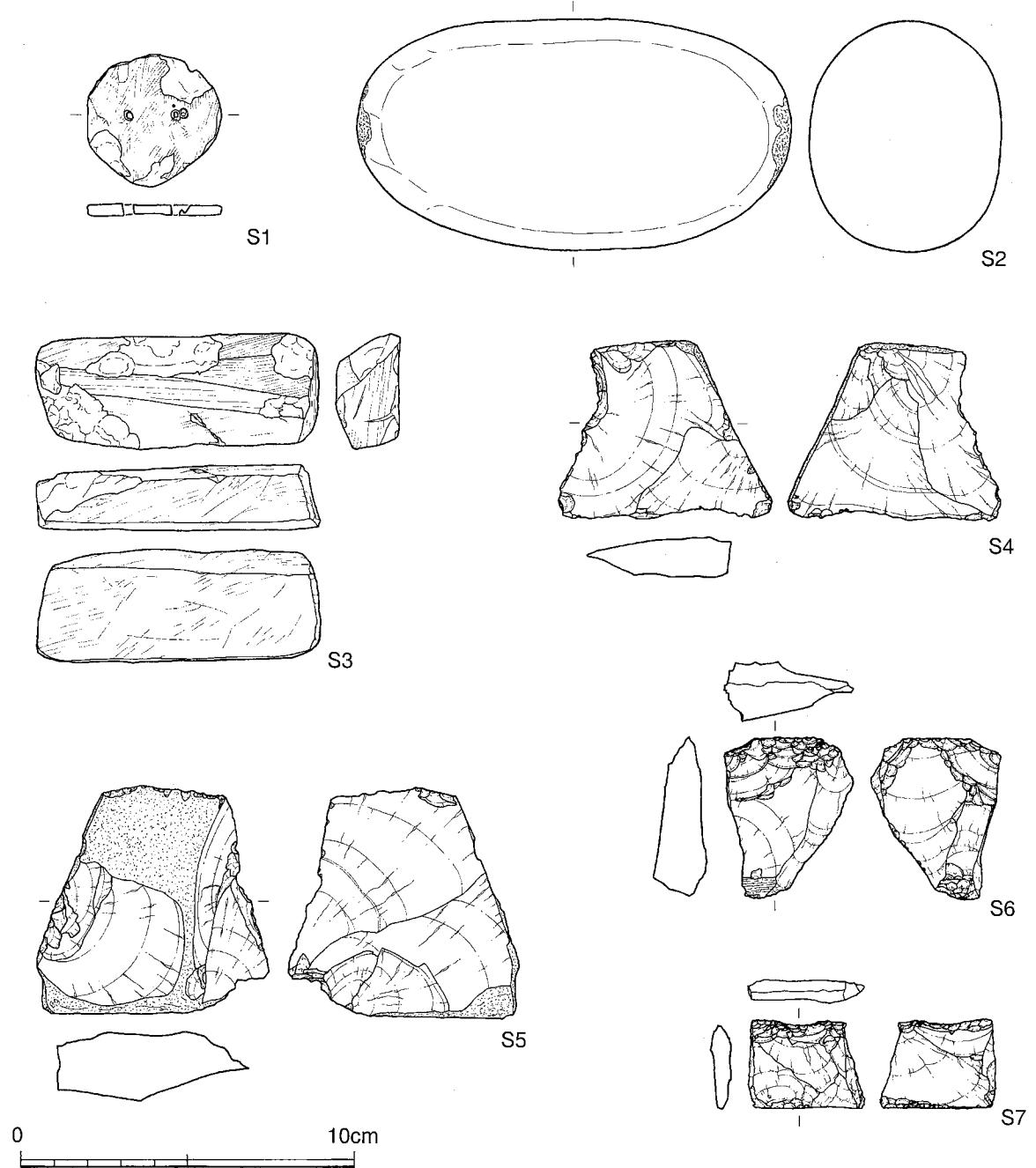
B地区



130

波毛遺跡

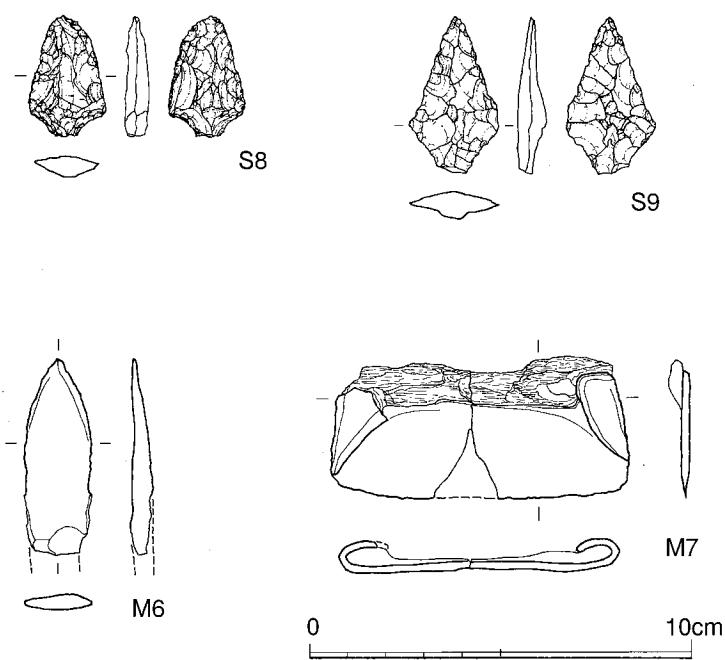
図版41
D地区出土石器・鉄器



S1 旧河道、S2・M1 SH102、S3 SX201、S4～S7 SB202、M2・M3 SH104、M4・M5 SD201

図版42
C地区出土石器・鉄器

波毛遺跡



S8 SH02、S9 SH01、M6 SH03、M7 包含層

川添遺跡

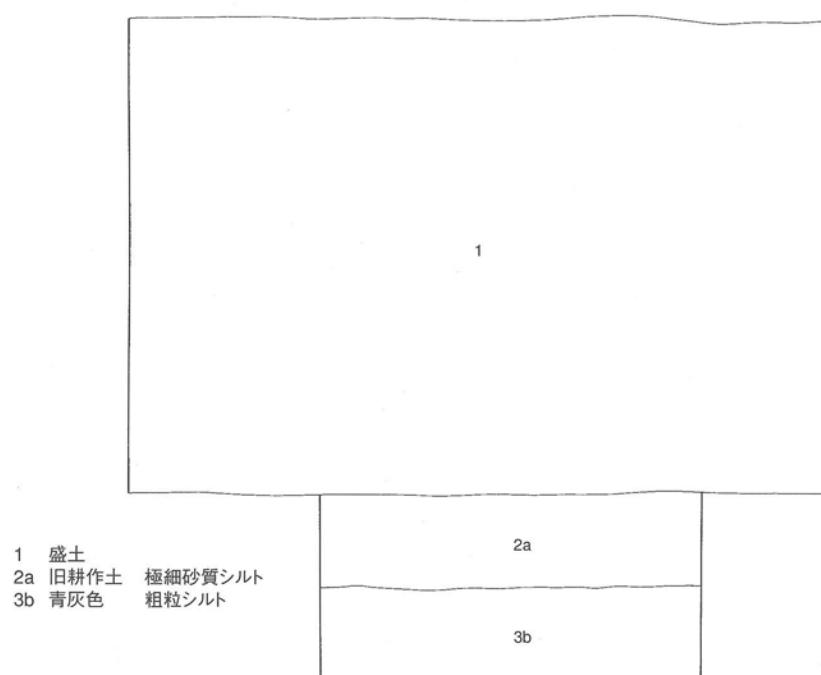
図版43
確認グリッド配置図



川添遺跡

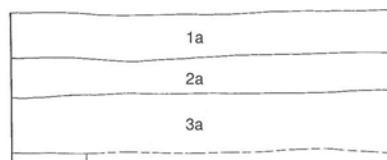
No. 5

北壁



No. 12

北壁



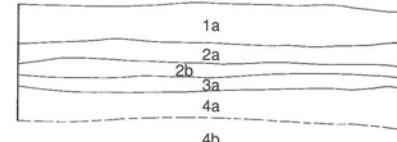
4a

5a

- 1a 現耕土
2a 盛土
3a 黒褐色 極細砂混じりシルト
4a 褐色 細砂混じりシルト(植物遺体多い)
5a 青灰色 中～大礫混じり細砂

No. 18

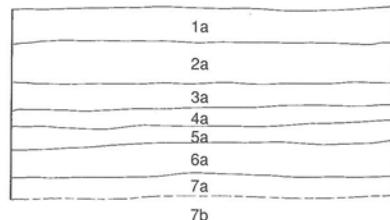
西壁



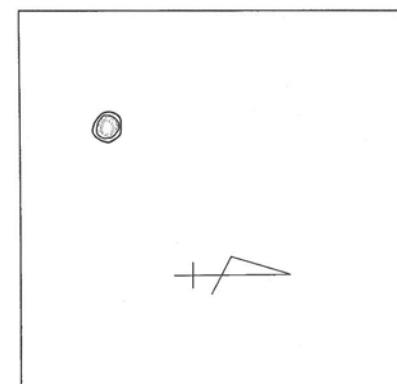
- 1a 現耕土
2a 淡灰色 シルト質極細砂
2b 黄褐色 シルト質極細砂
3a 灰白色 シルト質極細砂(下層は非土壤化)
4a 灰色 極細砂質シルト(包含層)
4b 灰黄色 極細砂質シルト(遺構確認面)

No. 19

西壁



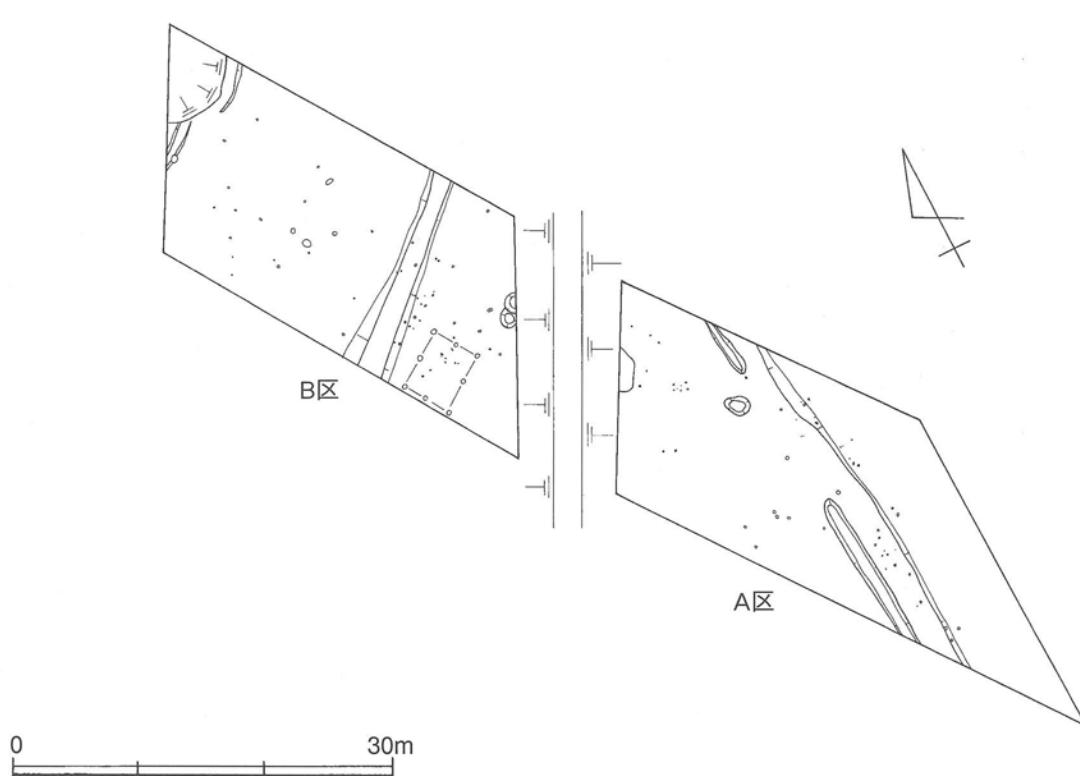
- 1a 現耕土
2a 淡灰色 シルト混じり細砂
3a 淡黄灰色 シルト質極細砂
4a 淡灰色 シルト質極細砂
5a 淡褐灰色 極細砂質シルト(遺物包含層)
6a 褐色 極細砂質シルト
7a 褐灰色 粗粒シルト(遺物包含層)
7b 黄灰色 粗粒シルト



0 2m

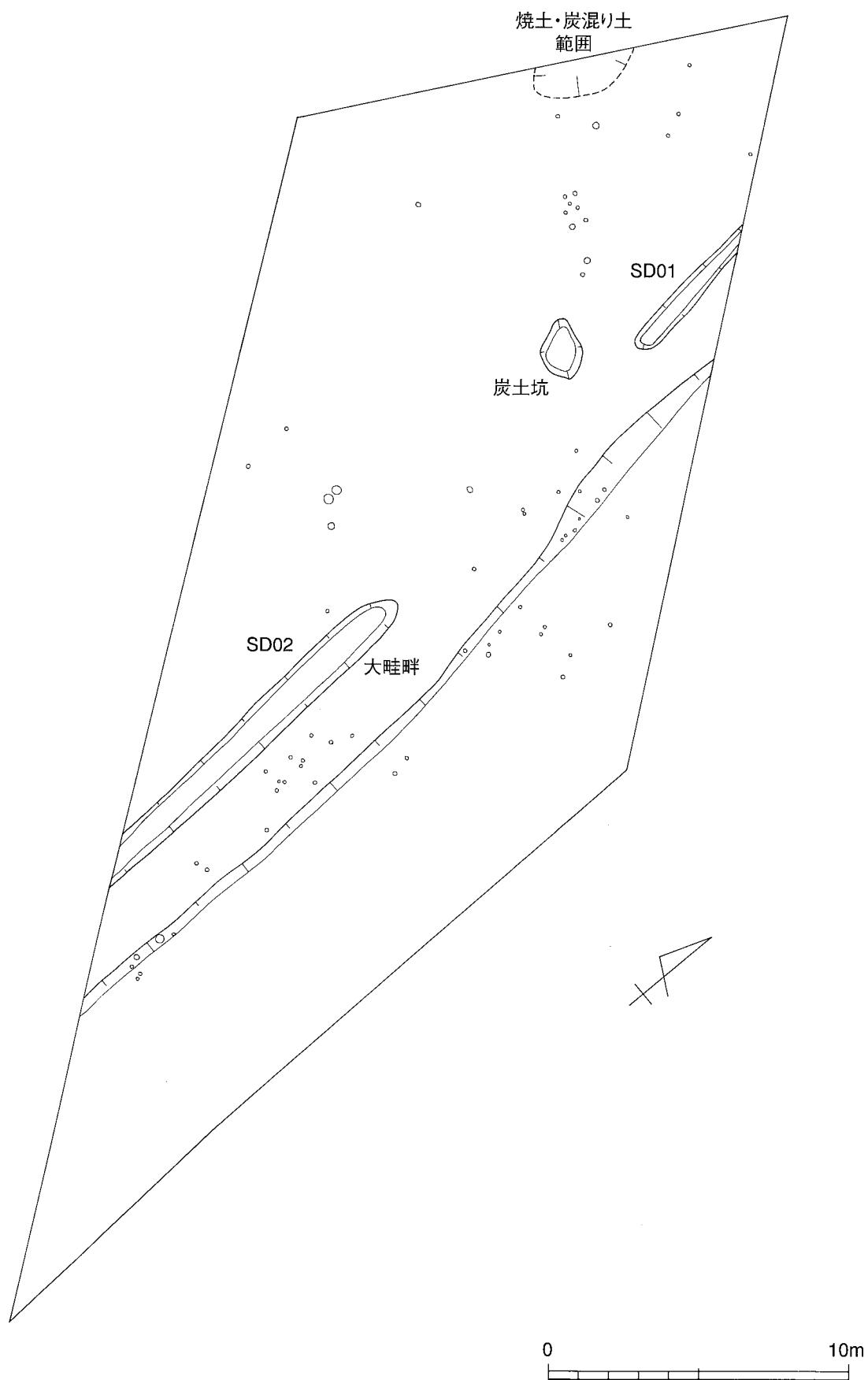
川添遺跡

図版45
調査地区と全体図

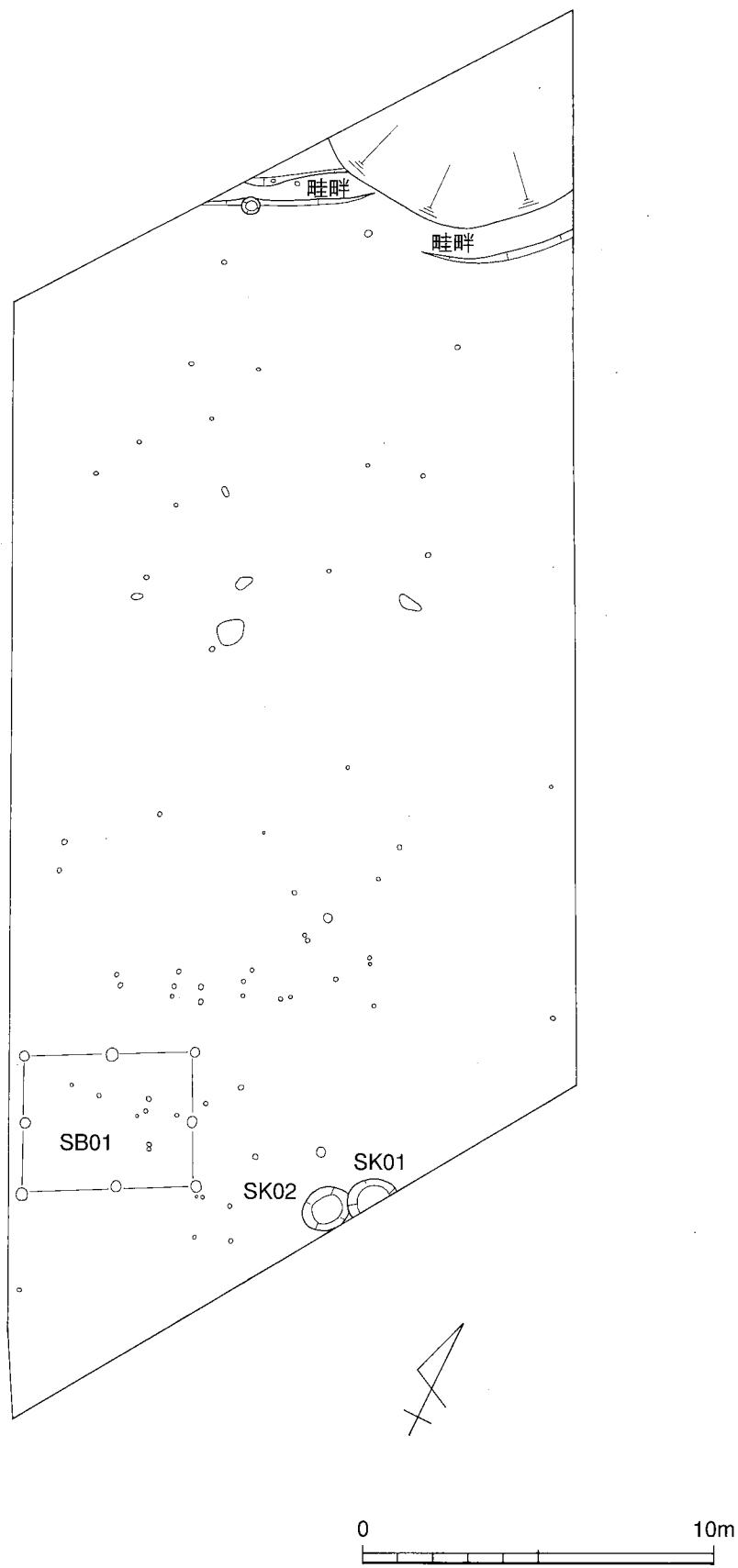


図版46
A区全体図

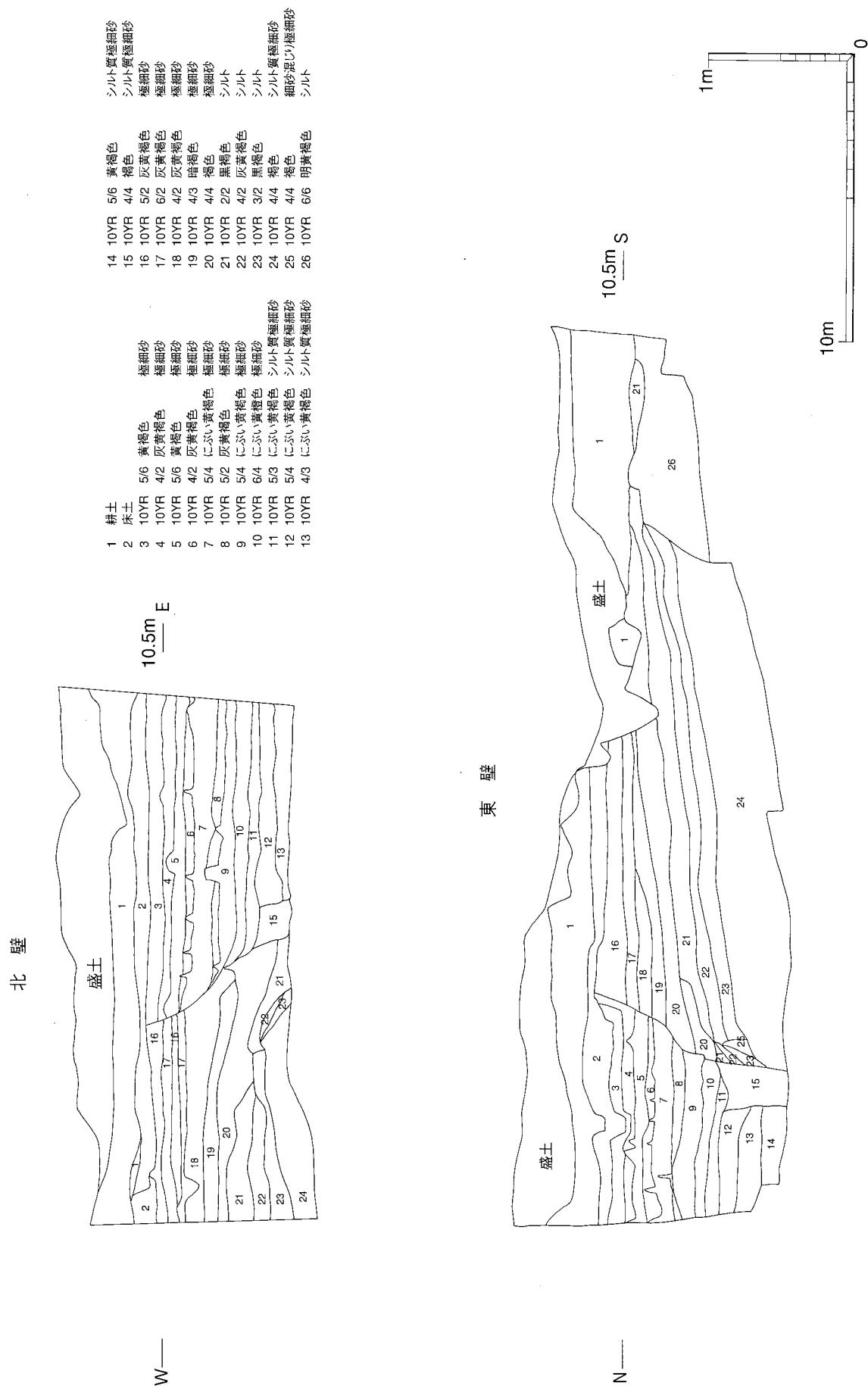
川添遺跡



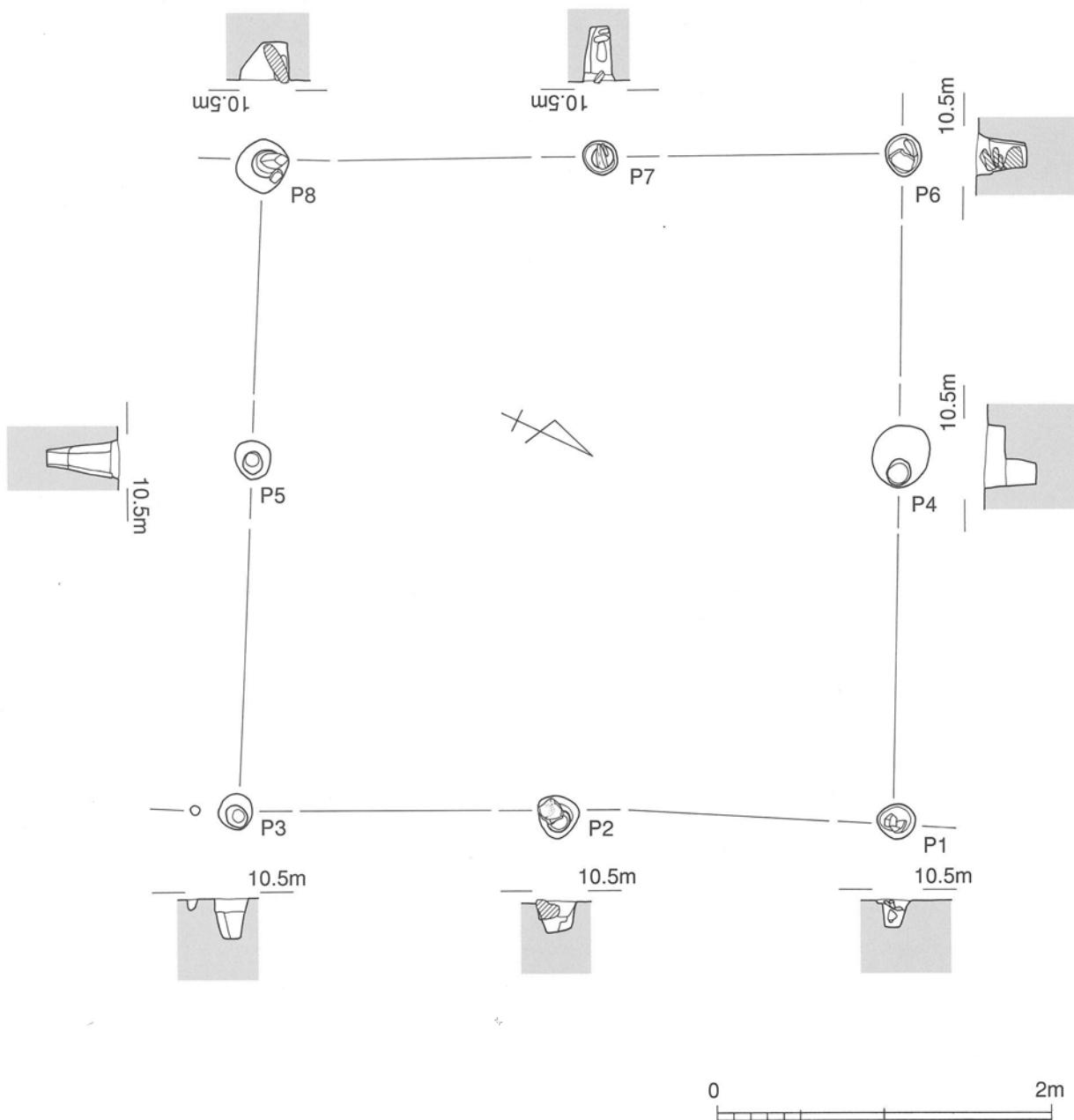
川添遺跡



川添遺跡

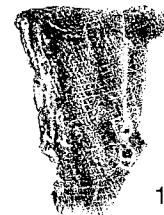
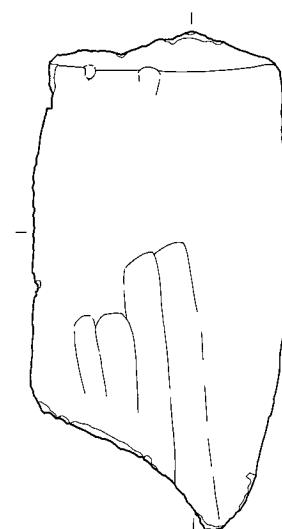
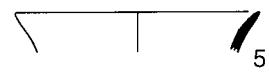
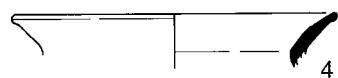
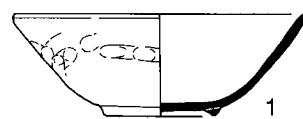


川添遺跡

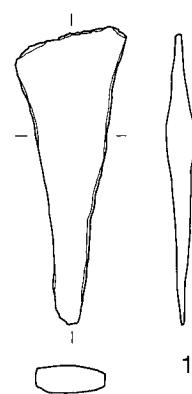


図版50
出土土器・鉄器

川添遺跡



0 20cm



0 10cm

写 真 図 版

写真図版 1
航空写真



大阪湾から洲本平野を望む（東から）／先山から遺跡を望む（北西から）／鮎屋ダム上空から遺跡を望む（南東から）

写真図版 2
航空写真

波毛遺跡



A・B・C 地区全景（北西から）



D 地区全景（北東から）

波毛遺跡



写真図版 4
D 地区第 1 面

波毛遺跡



全景（真上から）



同上（南東から）

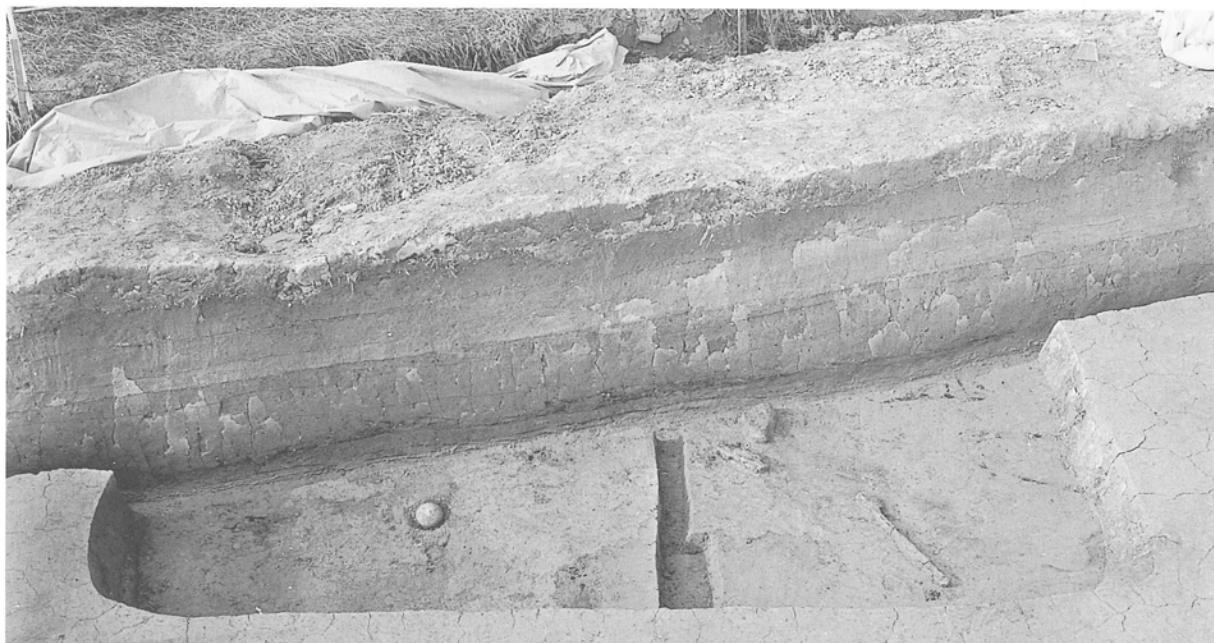


豊穴住居、掘立柱建物群（南東から）



豊穴住居 S H 101・102、掘立柱建物 S B 103（北東から）

波毛遺跡



竪穴住居 S H101 炭化材出土状況（南東から）／同上 完掘状況（南東から）／竪穴住居 S H101と掘立柱建物 S B103（北西から）

波毛遺跡

写真図版 7
D 地区第 1 面



豎穴住居 S H101 南辺土坑（北西から）

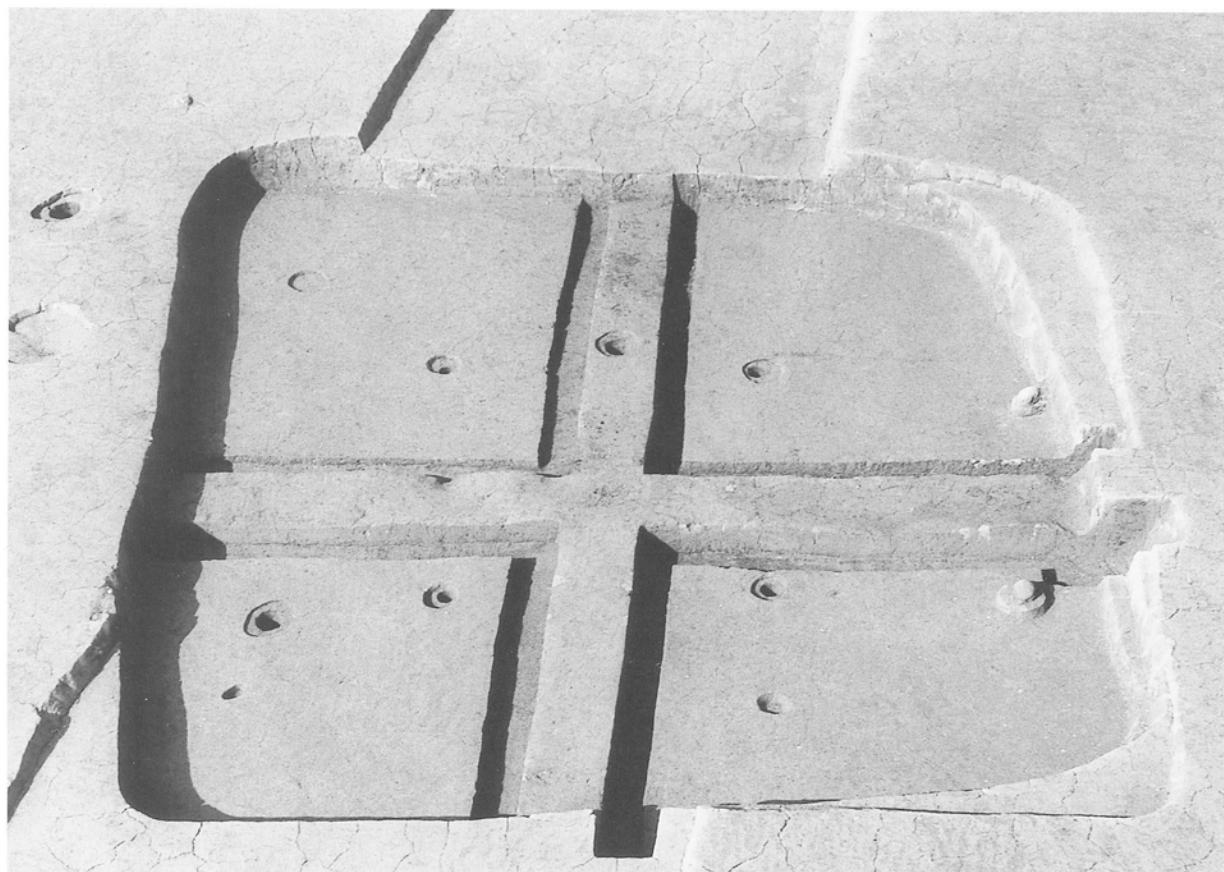


同上 南辺土坑の断面（北東から）
同上 東側住穴の断ち割り（北西から）



同上 床面の土器出土状況（東から）
同上 西側住穴の断ち割り（北西から）

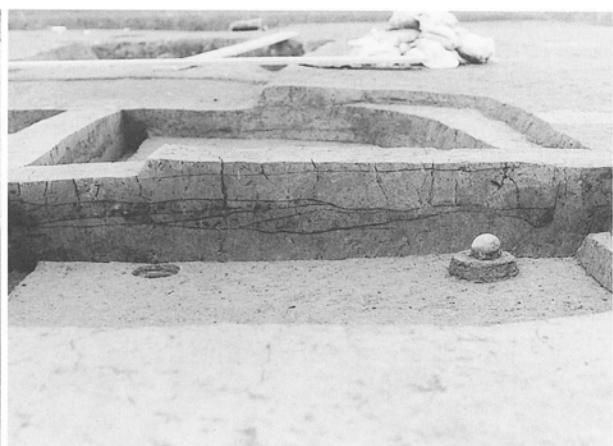
波毛遺跡



豎穴住居 S H102 (南東から)



同上 南西—北東断面左辺 (南東から)



同上 南西—北東断面右辺 (南東から)



同上 北西—南東断面左辺 (南西から)



同上 北西—南東断面右辺 (南西から)

波毛遺跡

写真図版9
D地区第1面



竪穴住居 S H103～105（北東から）

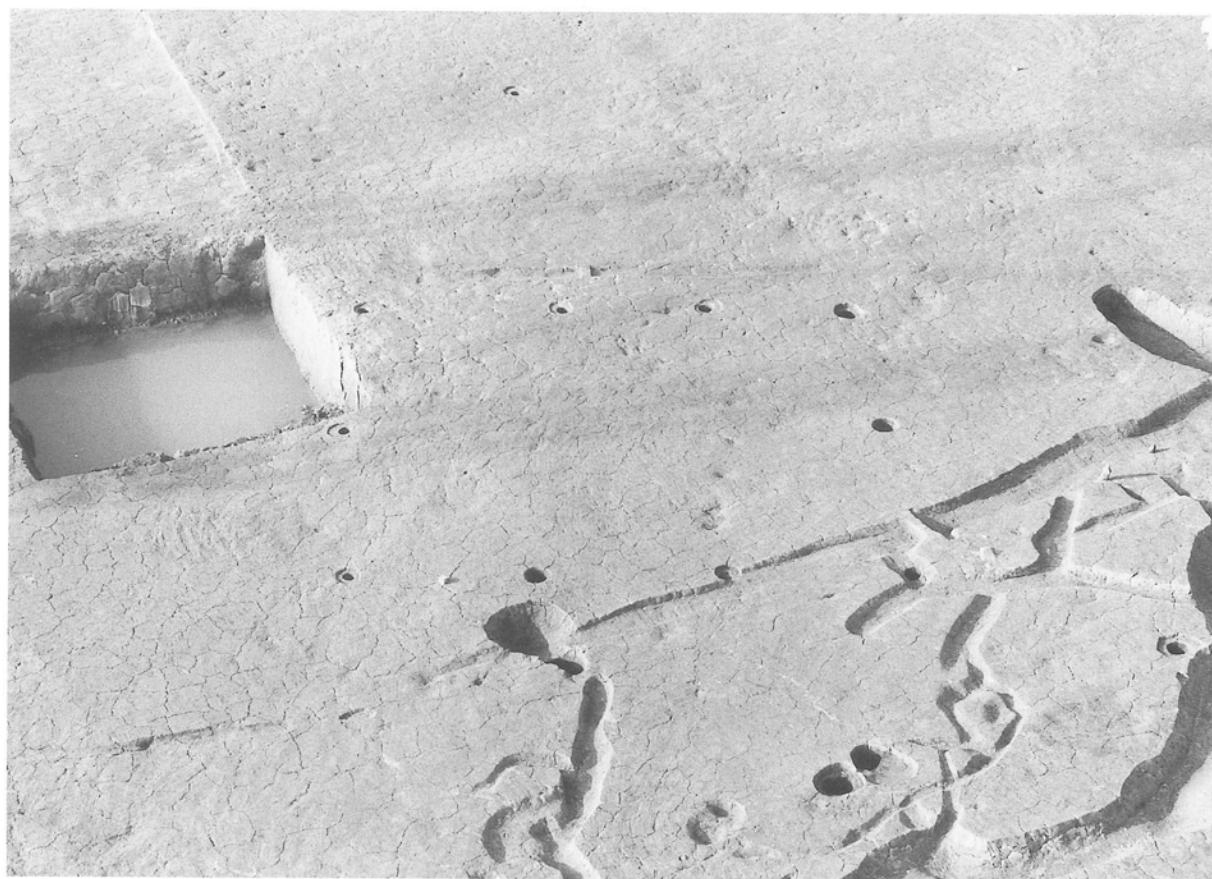


竪穴住居 S H103～105拡張区南東壁断面（北西から）

波毛遺跡



掘立柱建物 S B 101 (南東から)



掘立柱建物 S B 102 (南東から)



旧河道落ち際の断面（北から）



旧河道と噴砂の断面（西から）

波毛遺跡



噴砂の検出状況（南西から）



噴砂の断面（西から）

波毛遺跡

写真図版13
D地区第2面



北西側全景（南東から）

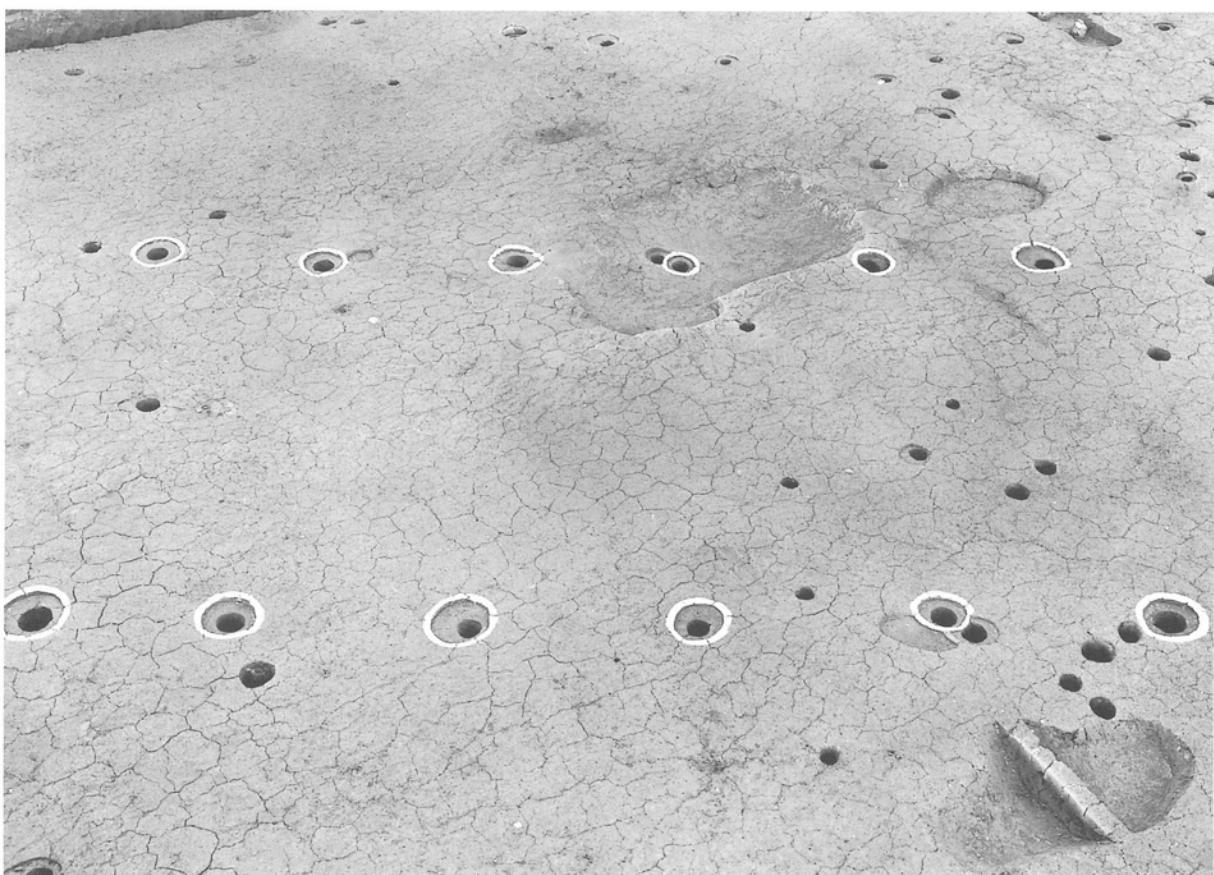


南東側全景（南東から）

波毛遺跡



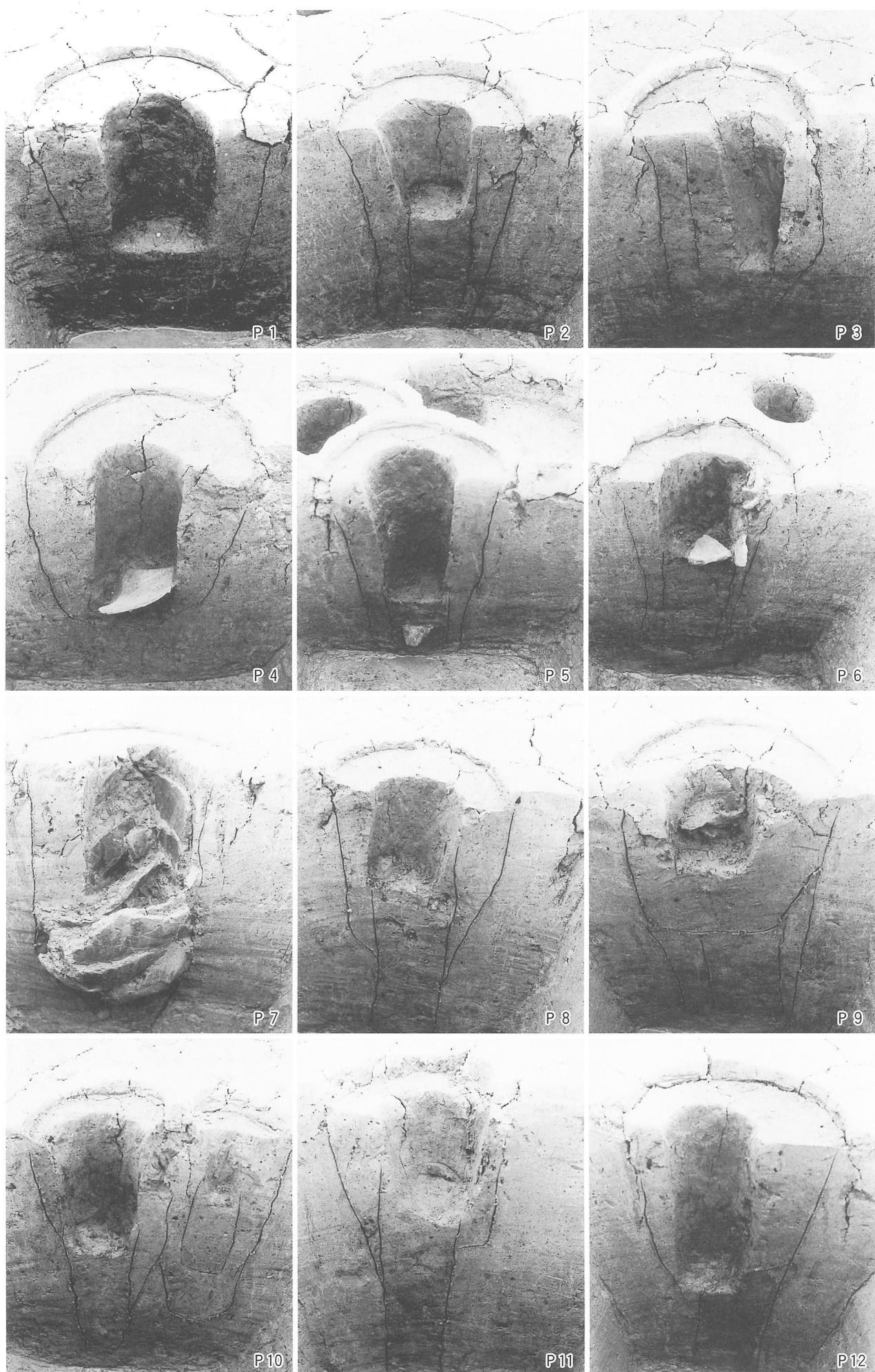
第2面全景（真上から）



掘立柱建物SB 201（南から）

波毛遺跡

写真図版15
D地区第2面



掘立柱建物 S B 201の柱穴断ち割り

波毛遺跡



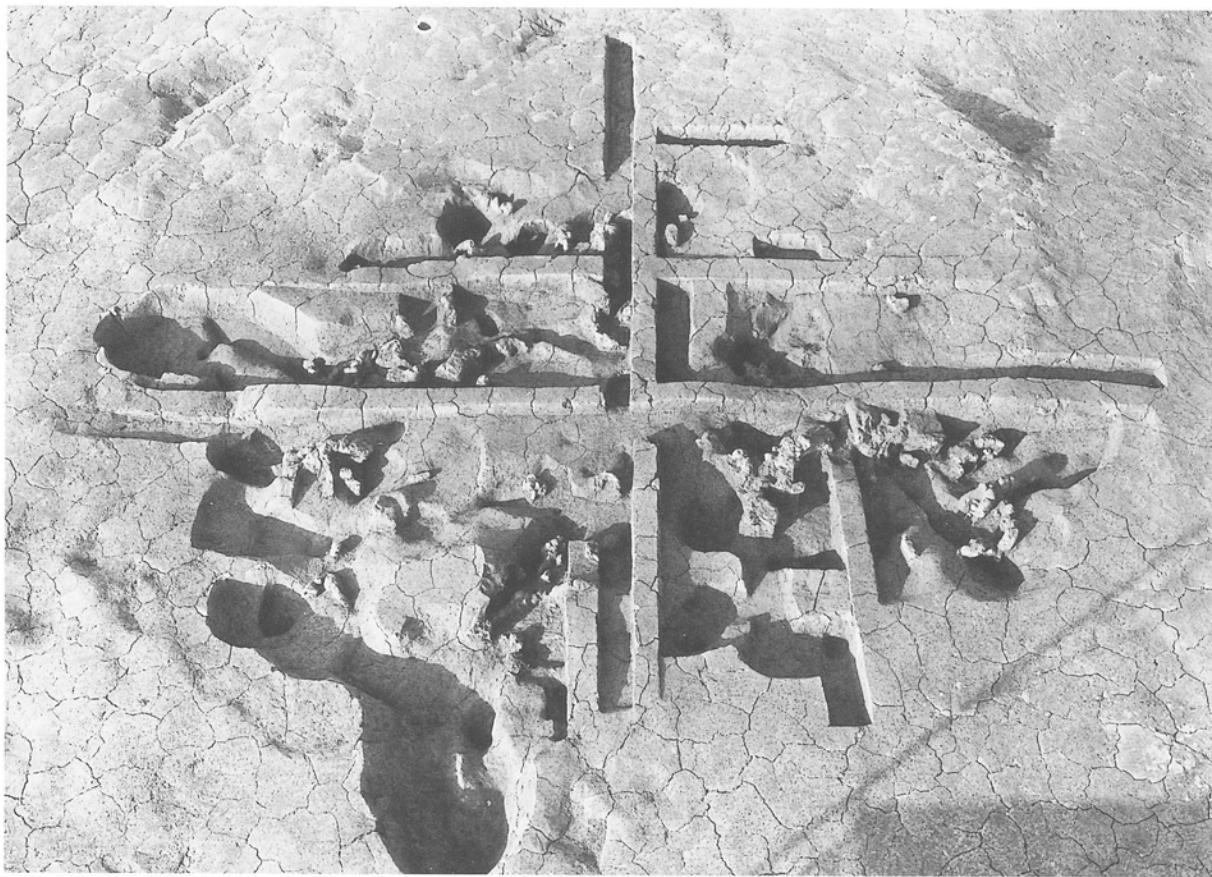
工房跡 S X 201 (西から)



同上 断面 (南西から)

波毛遺跡

写真図版17
D地区第2面



焼土坑 S X 202 (南から)

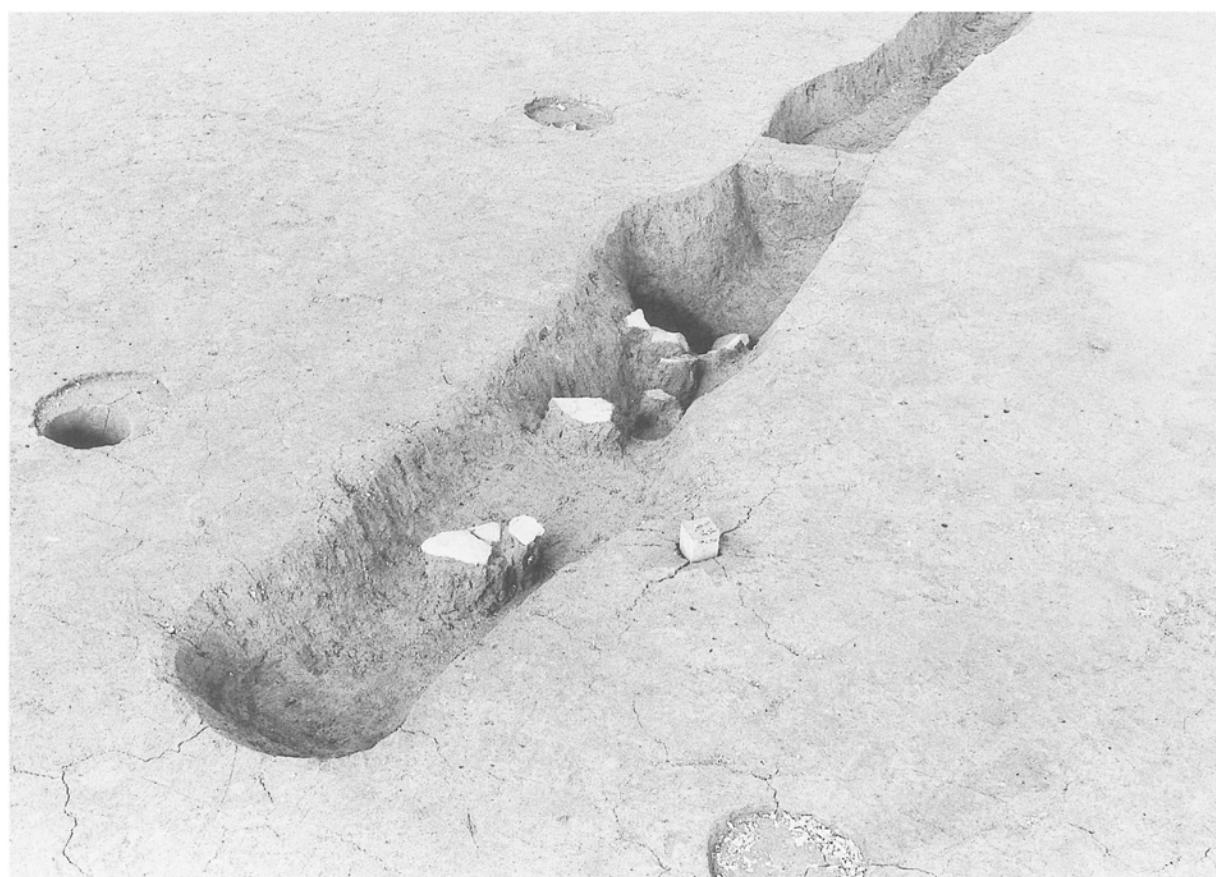


同上 断面 (西から)

波毛遺跡



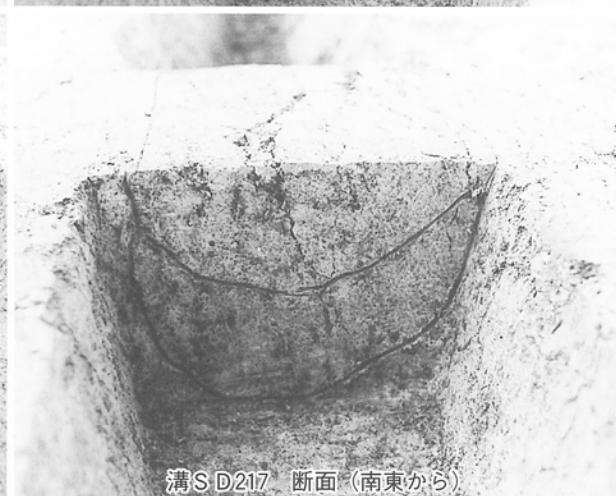
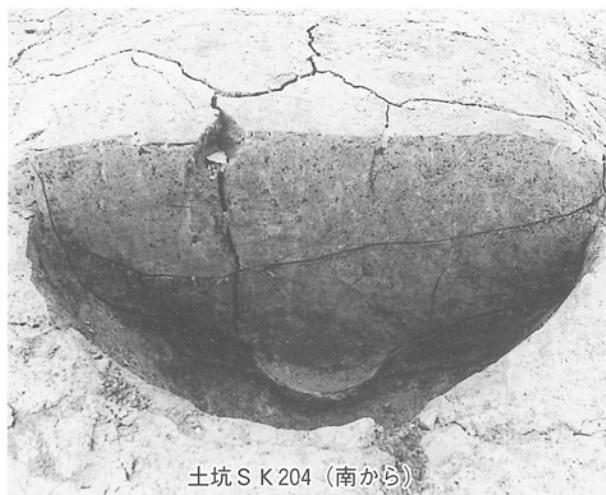
土坑SK 205（北東から）



溝SD 204（北東から）

波毛遺跡

写真図版19
D地区第2面



波毛遺跡



溝S D 220 南側断面（南から）



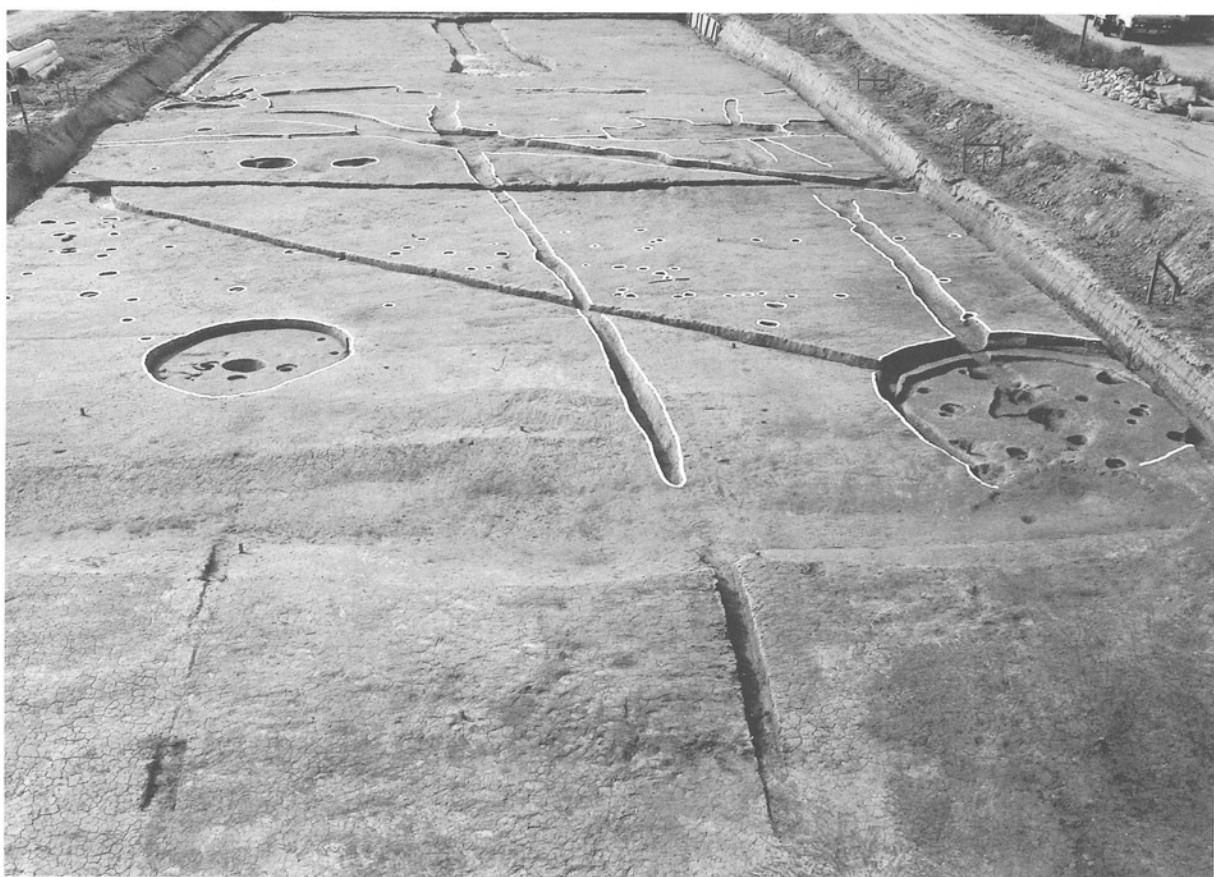
同上 北側断面（北から）

波毛遺跡

写真図版21
C 地区



全景（南西から）



全景（南東から）

波毛遺跡



C-2区全景（北西から）



同上（南東から）

波毛遺跡

写真図版23
C 地区



C-1 全景（北西から）

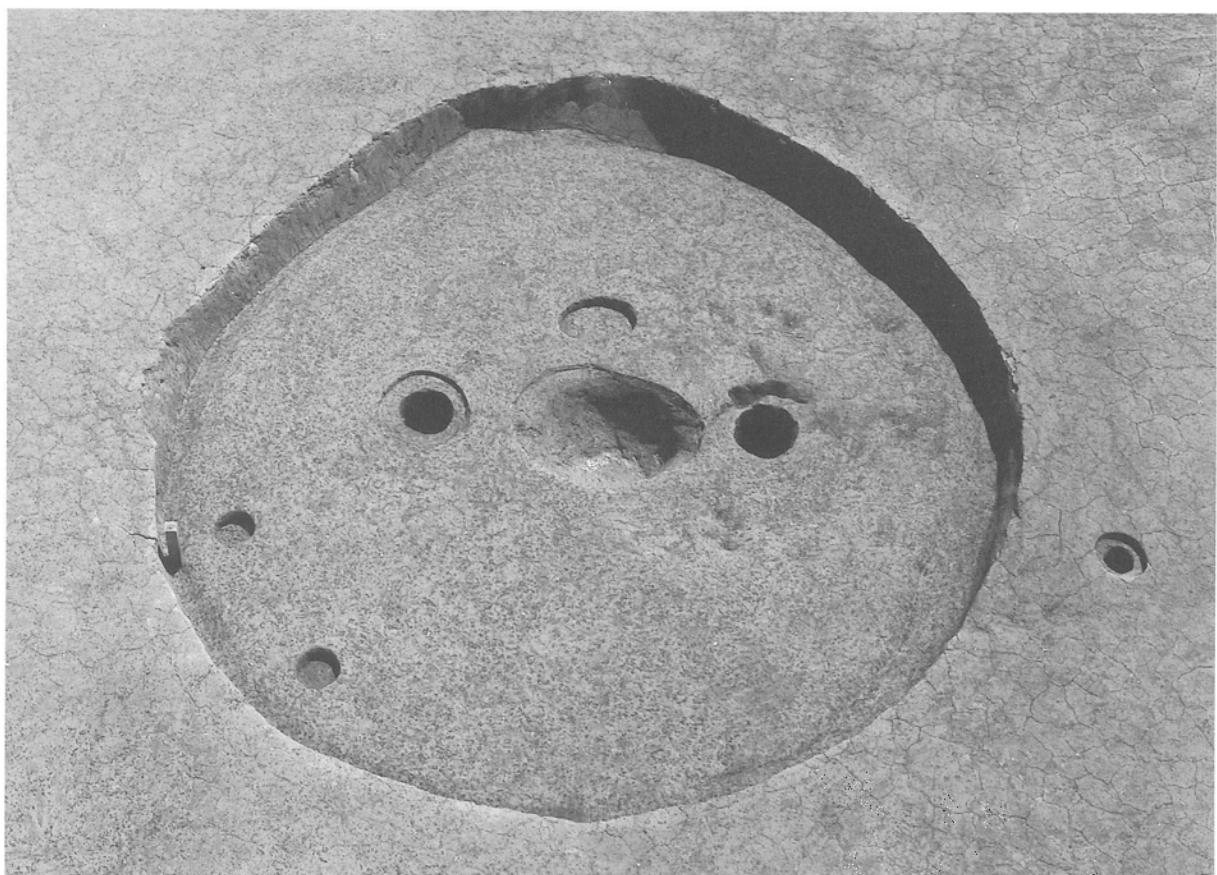


同上 中央部（南東から）

波毛遺跡



豎穴住居 S H01 検出状況（北東から）



同上 完掘状況（北西から）

波毛遺跡

写真図版25
C 地区



竪穴住居 SH02 検出状況（南西から）

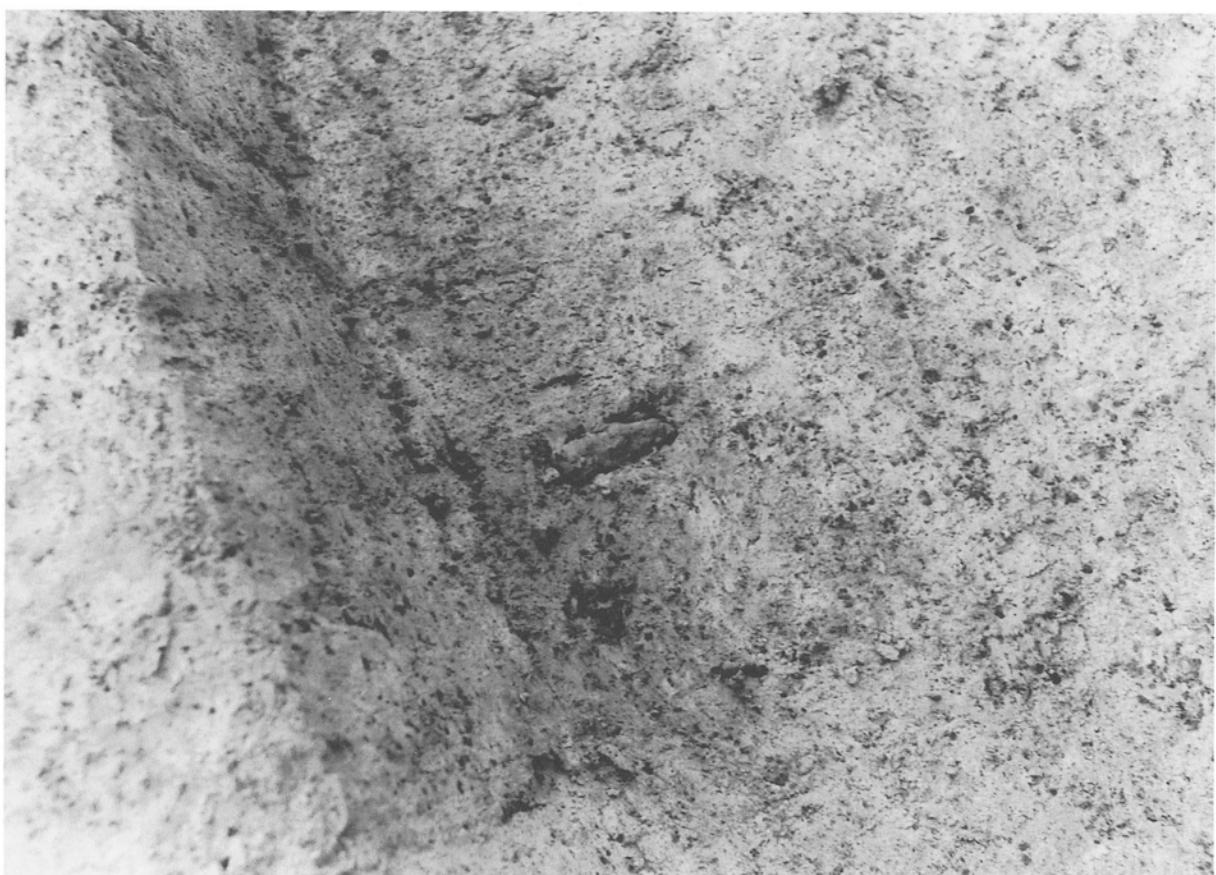


同上 完掘状況（南西から）

波毛遺跡



豎穴住居 S H03 完掘状況（北東から）



同上 鉄鉈出土状況（アップ）

波毛遺跡

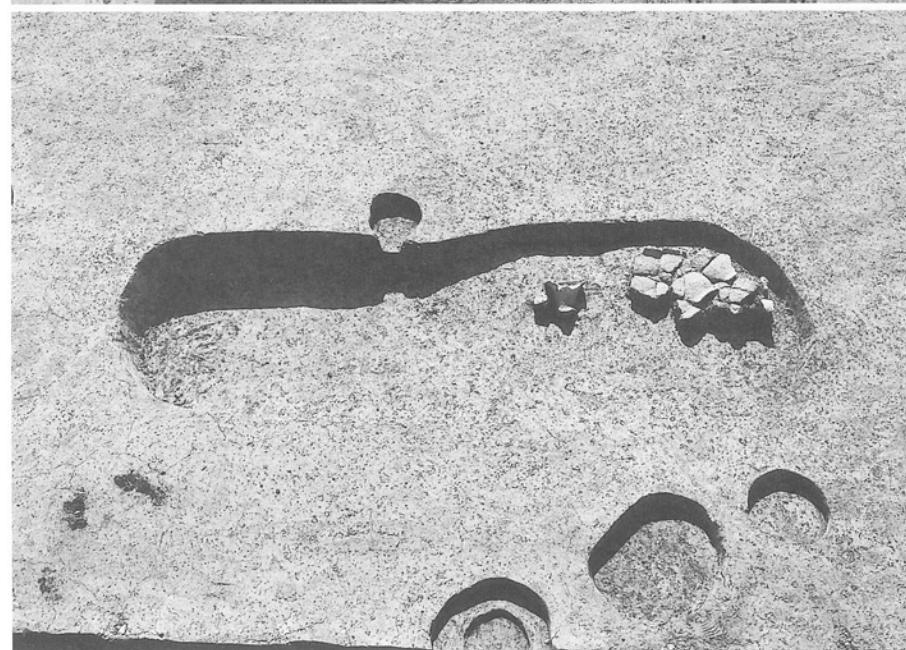
写真図版27
C 地区



土坑SK04（北東から）

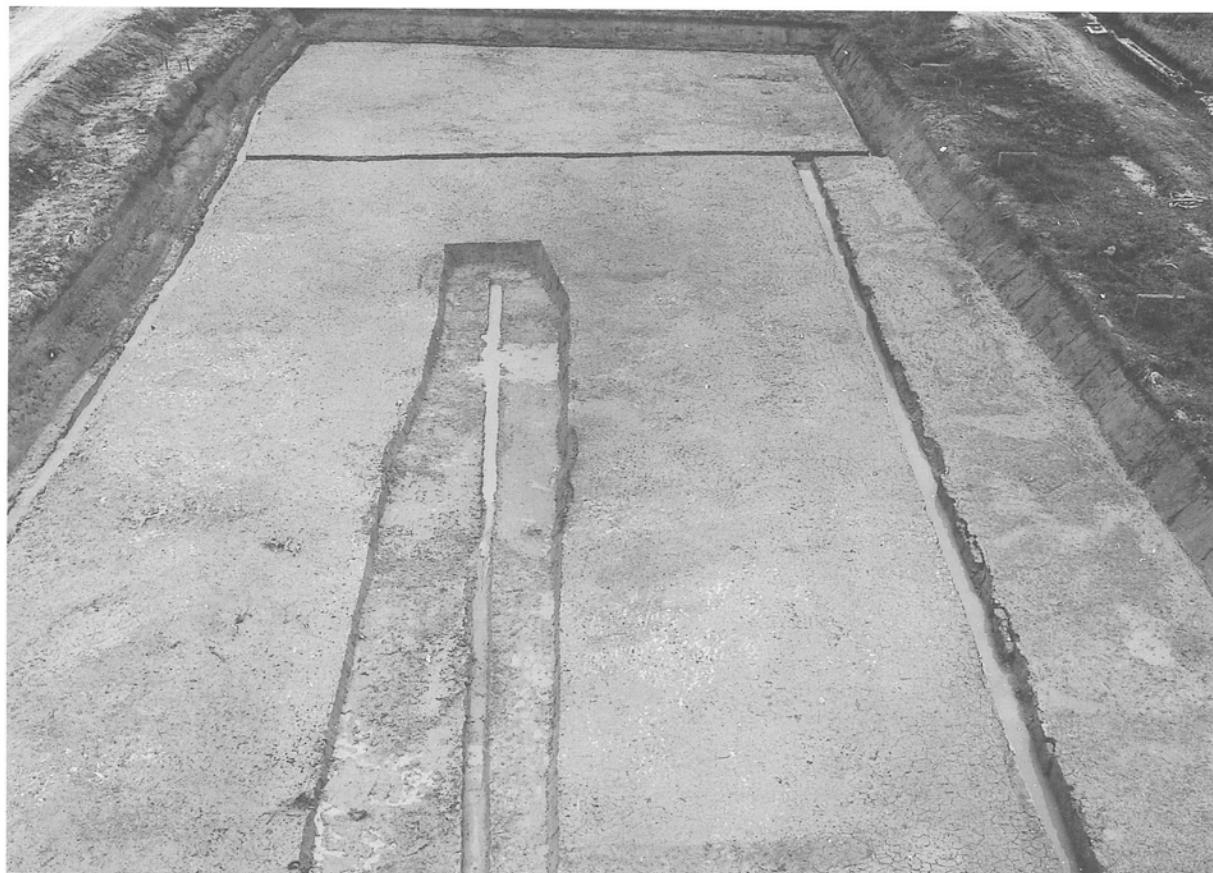


土坑SK05
土器出土状況（南東から）



土坑SK06（北東から）

波毛遺跡



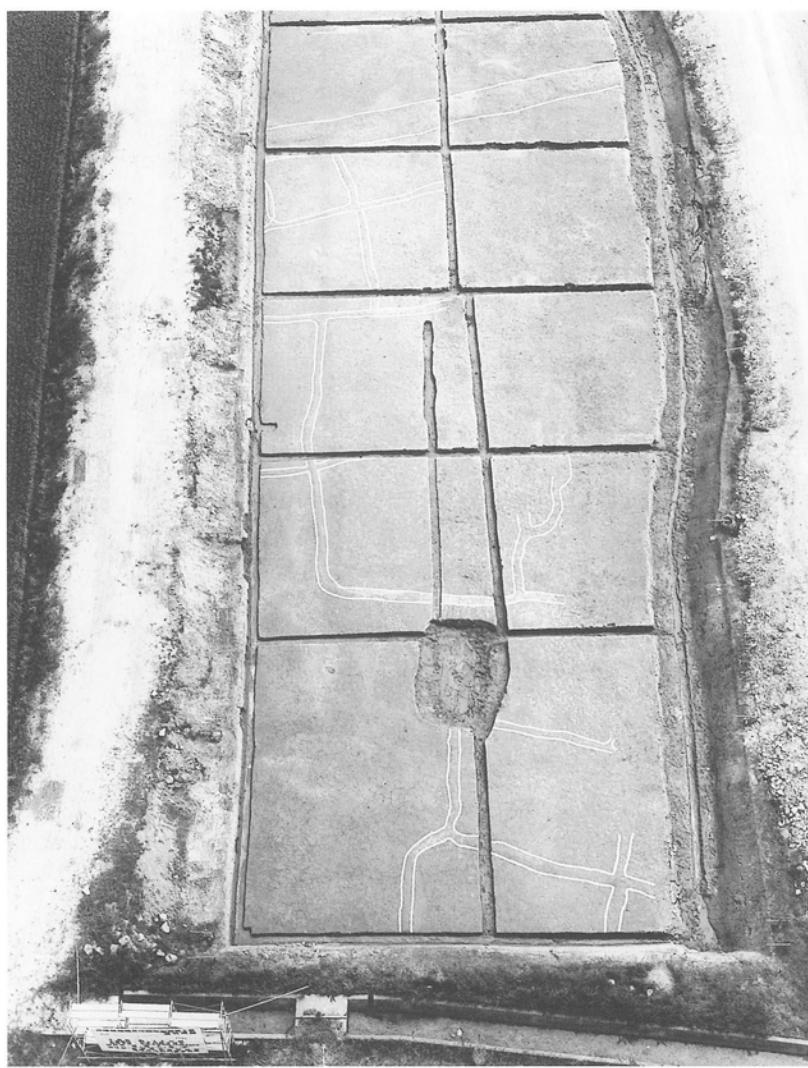
全景（北西から）



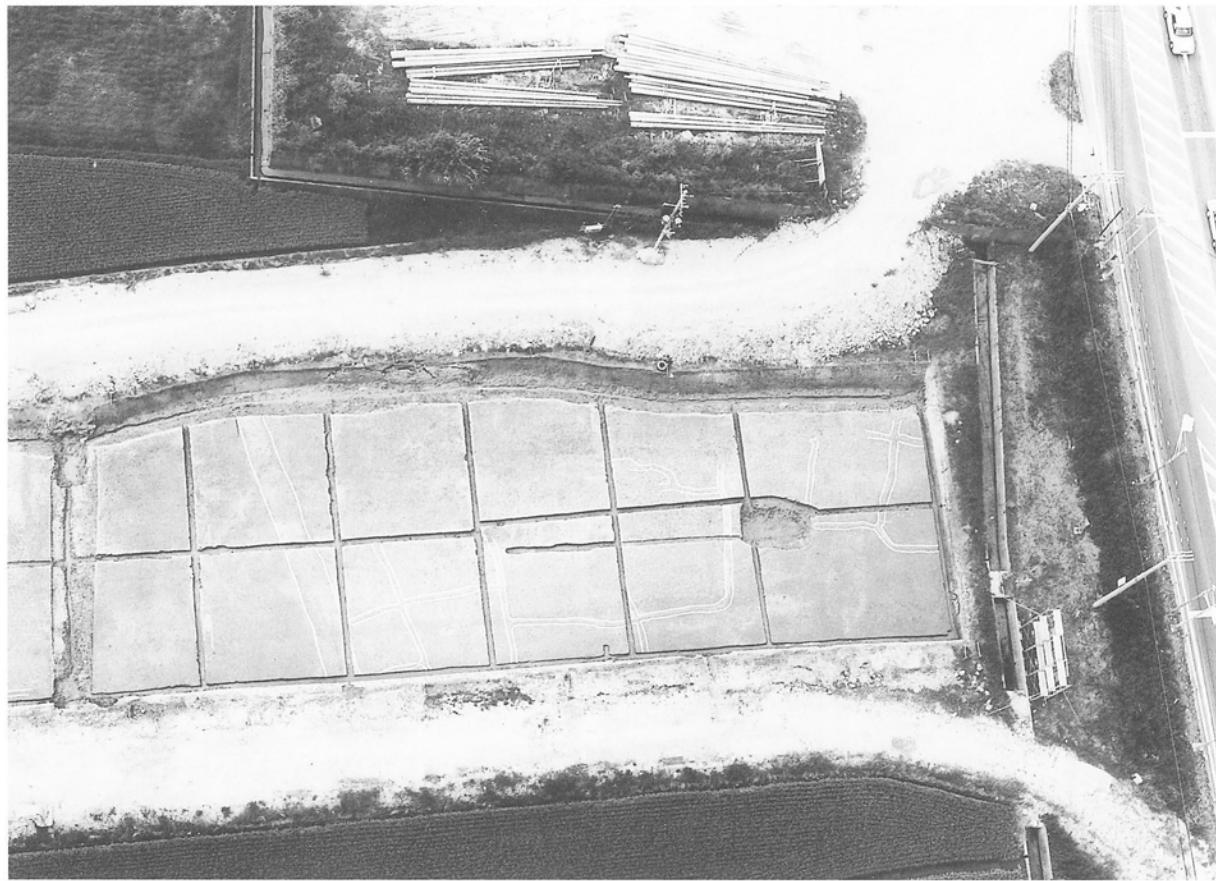
北東壁断面（南から）

波毛遺跡

写真図版29
A 地区



水田 a 全景（真上から）



同上（北東から）

波毛遺跡



水田a 全景（北西から）



同上（北西から）



A-1区 水田b 全景（北西から）

波毛遺跡

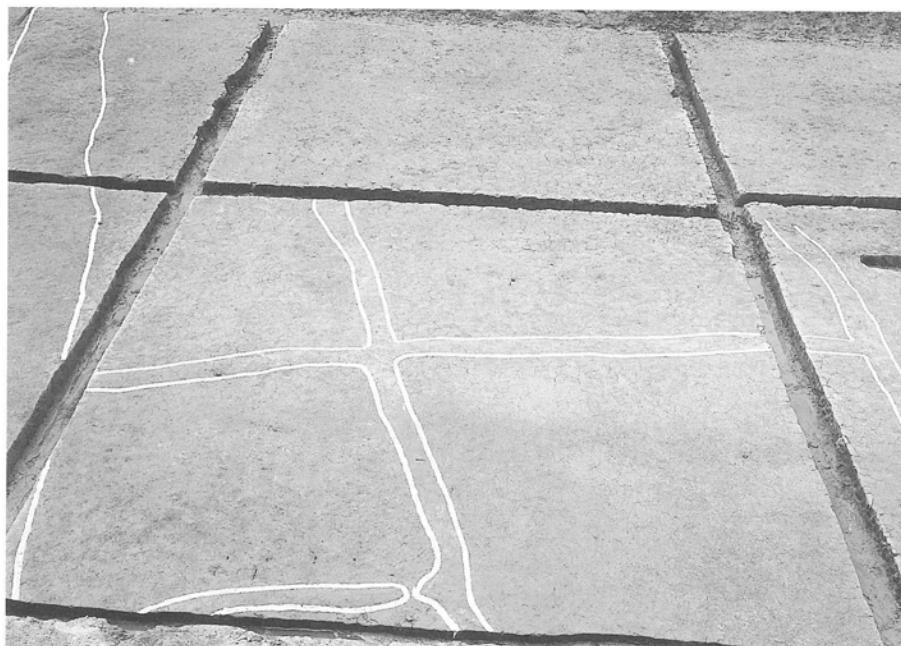


水田 a 西端小畦畔（北西から）



同上 （東から）

波毛遺跡



水田 a 大畦畔1隣接の水口（北から）



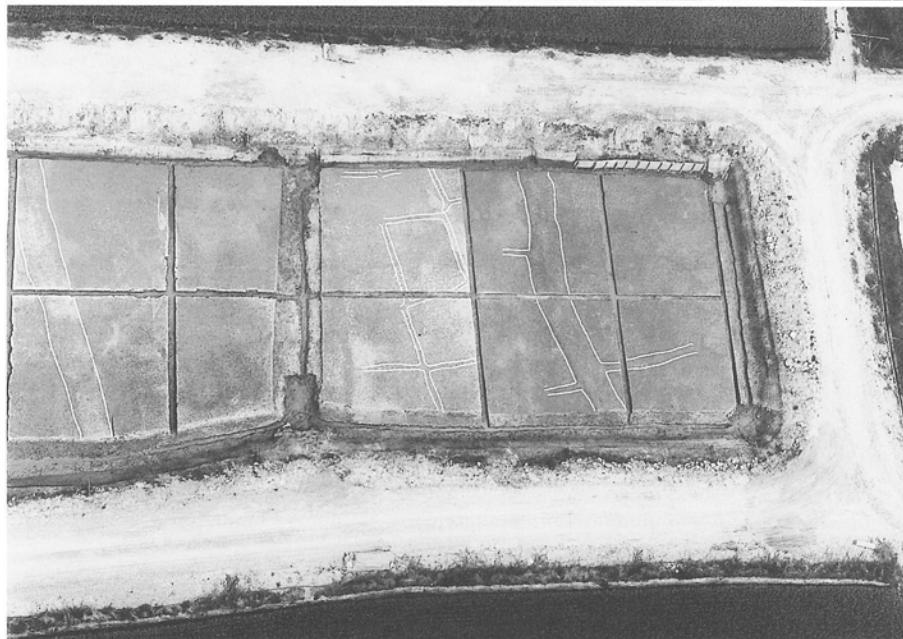
A-1区
水田 a 大畦畔1と西側小畦畔（南西から）



A-1区
水田 b 大畦畔1と東側水路（南西から）

波毛遺跡

写真図版33
A地区



波毛遺跡



水田 a 大畦畔 2 西側小畦畔（南から）



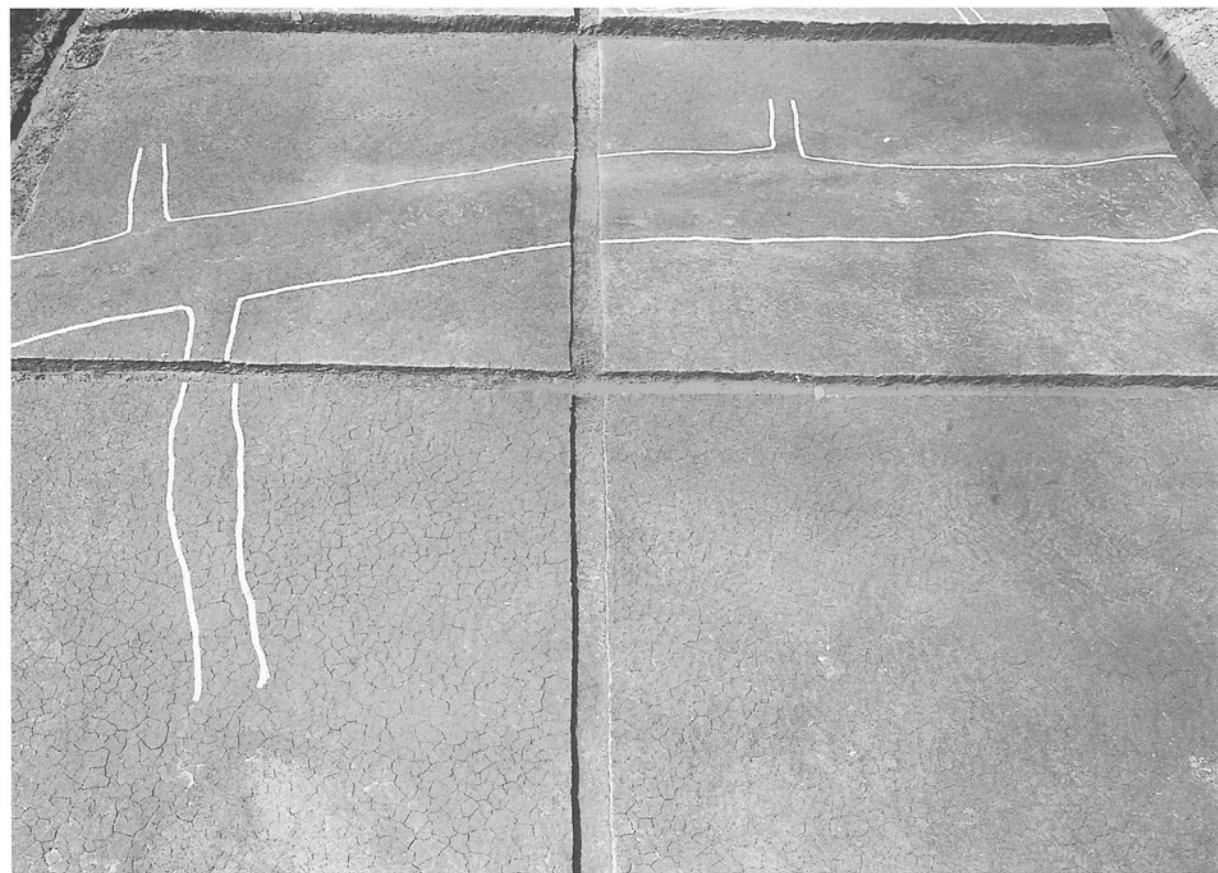
同上（北から）

波毛遺跡

写真図版35
A 地区



水田 a ~ c 南東半部（南東から）



水田 c 大畦畔 2（南東から）

波毛遺跡



水田 a ~ c 南東半部全景（真上から）



水田 a・b 北西半部全景（真上から）

波毛遺跡

写真図版37
A地区



水田b 北東半部（南東から）



A-1区 水田b 水路（北西から）



A-1区
水田b 水路東側小畦畔近景（南西から）

波毛遺跡



A-1区 水田 b 水路土留め杭



A-1区 水路除去後（北西から）



水田 b 水路付近足跡

波毛遺跡



北東壁断面 大畦畔1（南西から）

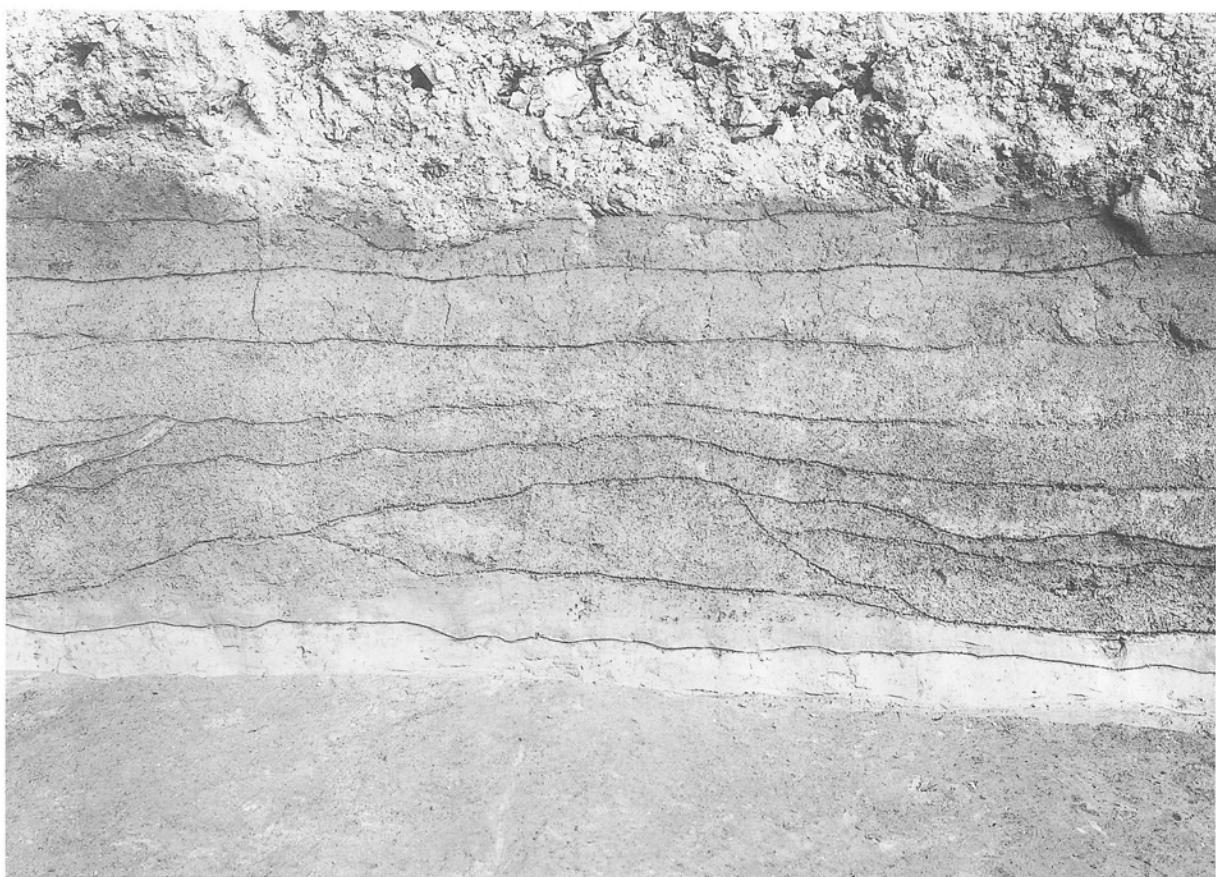


北東壁断面 水路（南西から）

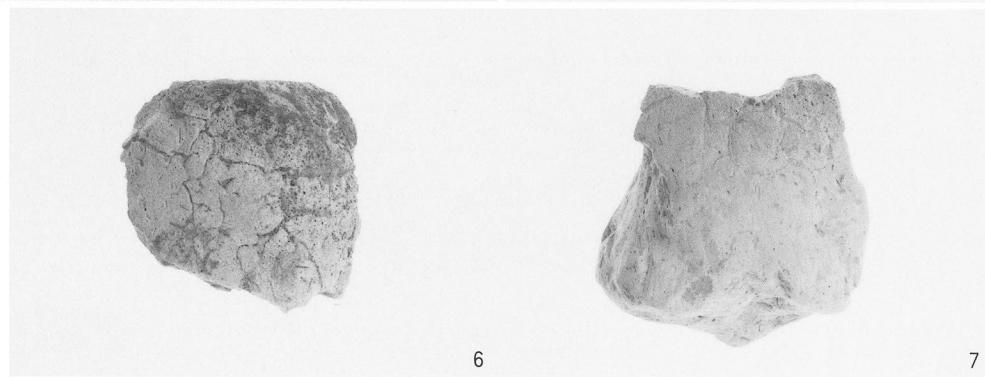
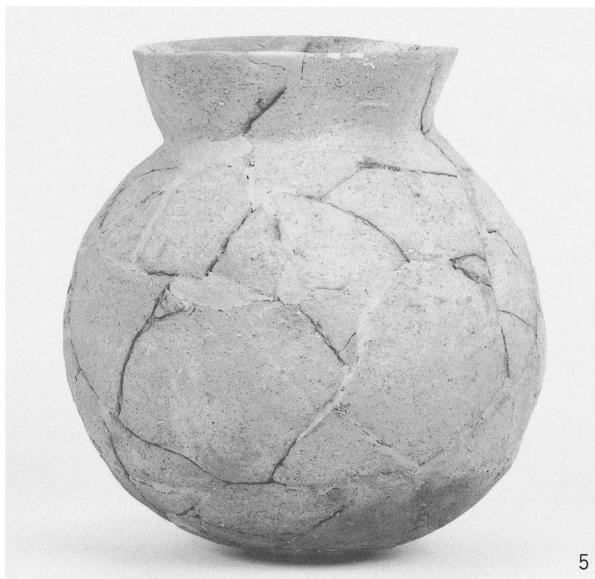
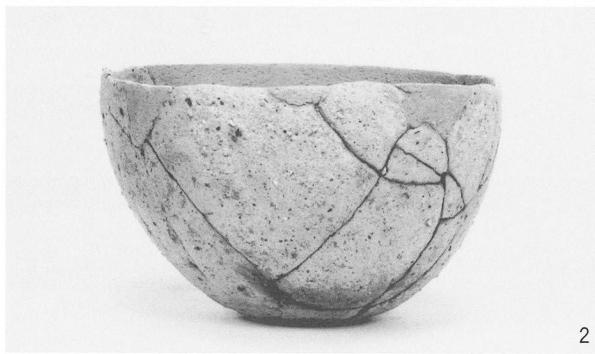
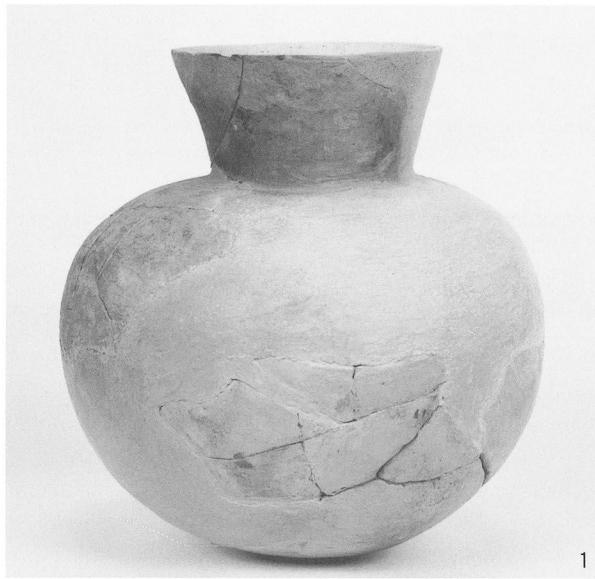
波毛遺跡



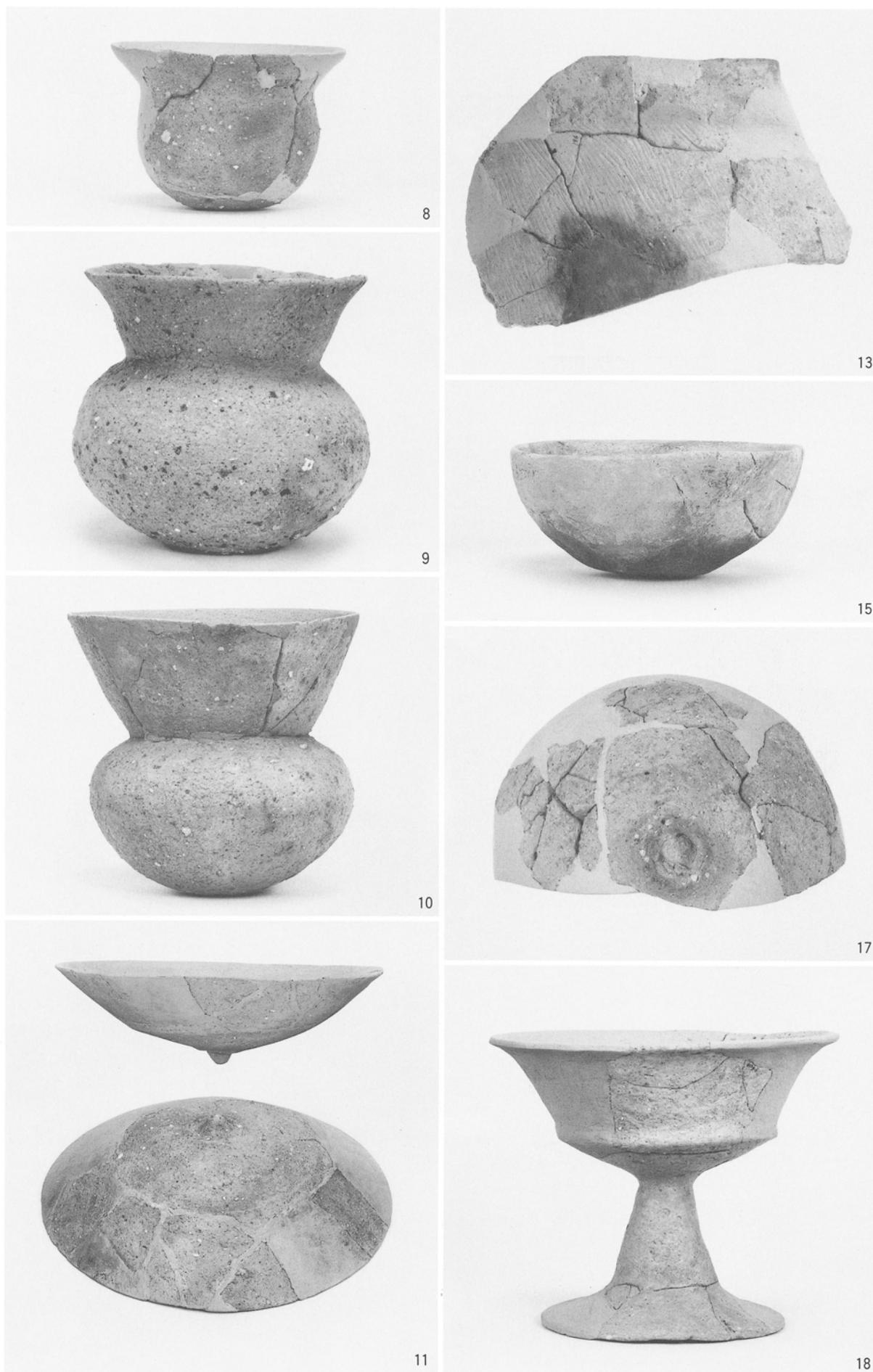
北東壁断面 小畦畔（大畦畔2の西側）

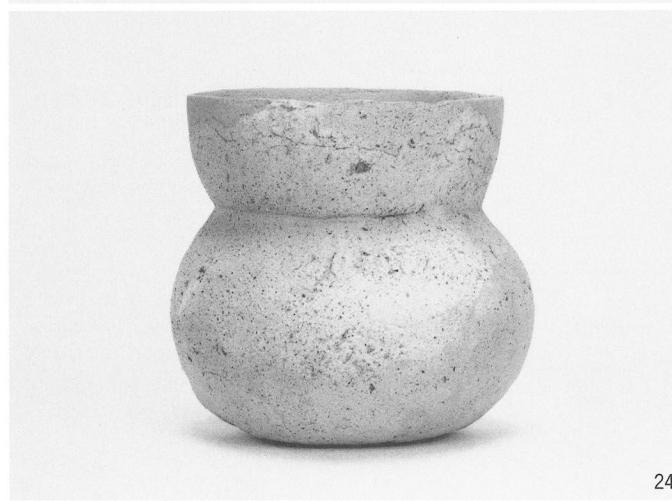
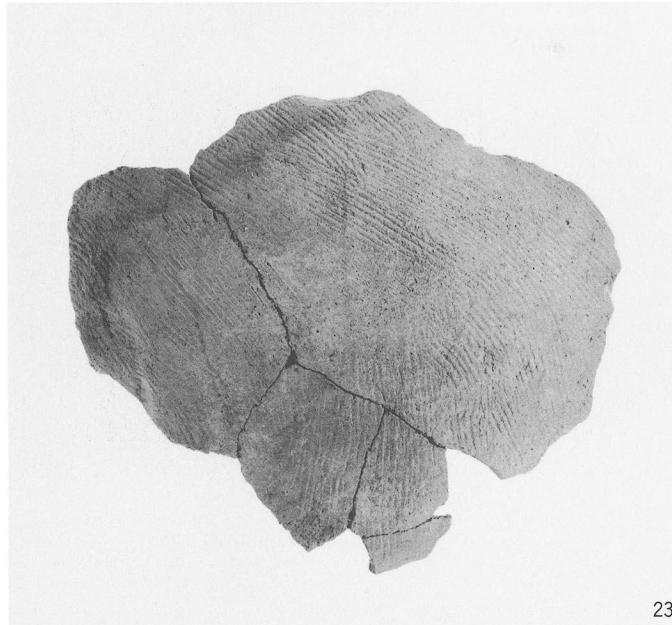
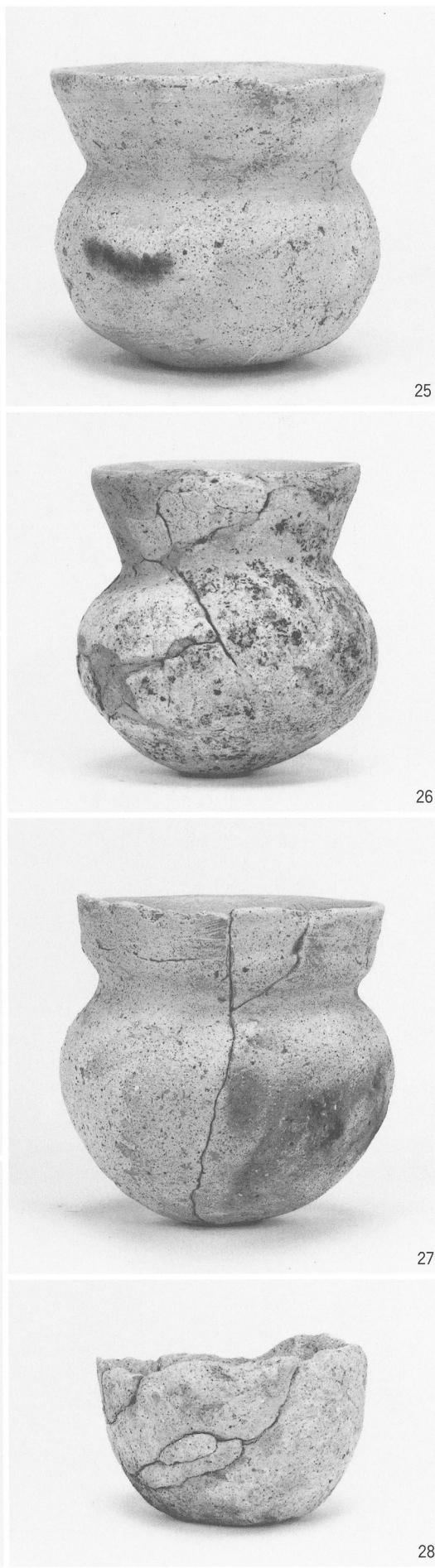
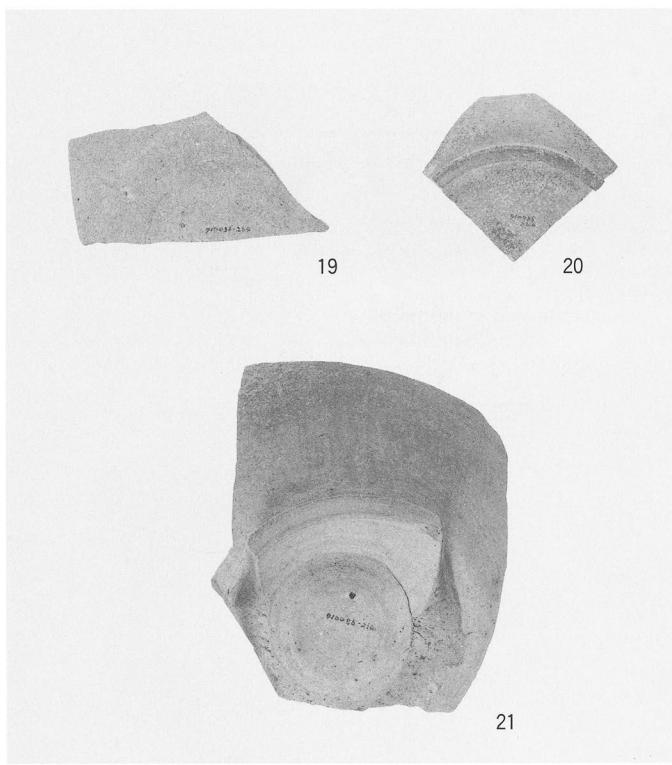


北東壁断面 大畦畔2（南西から）



波毛遺跡

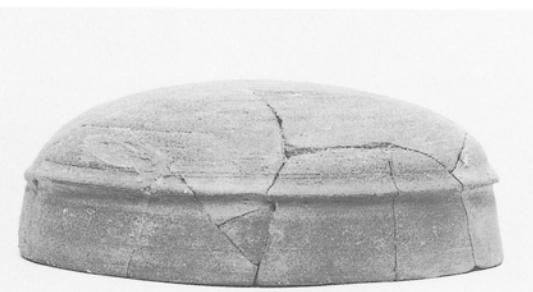




波毛遺跡



29



31



30



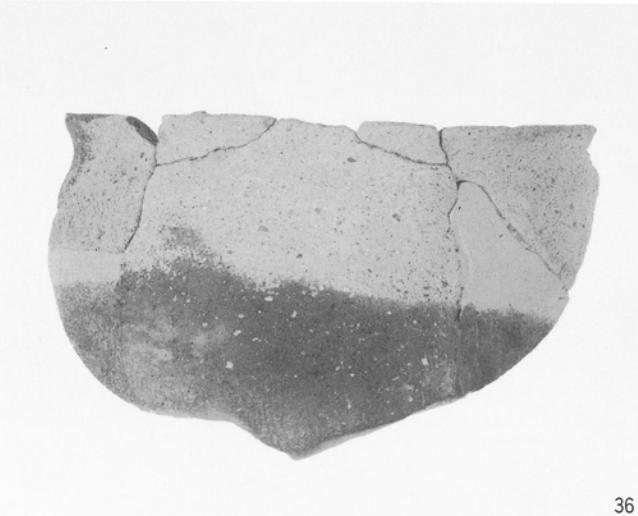
34



35



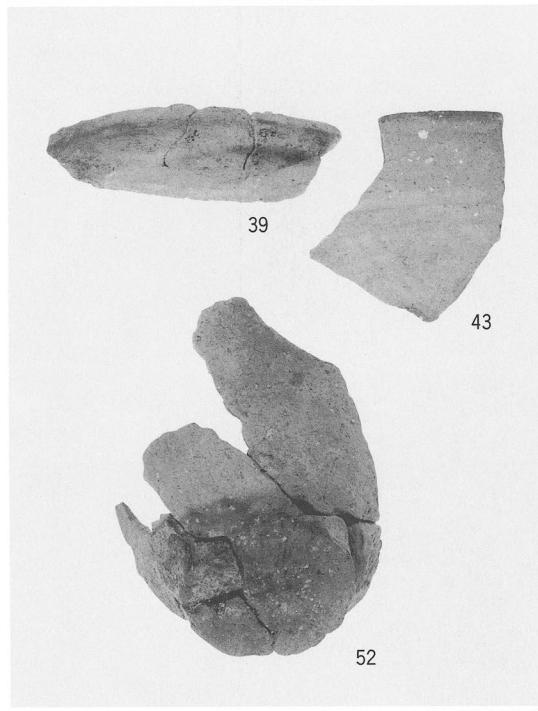
38



36



41



39

43

52



40

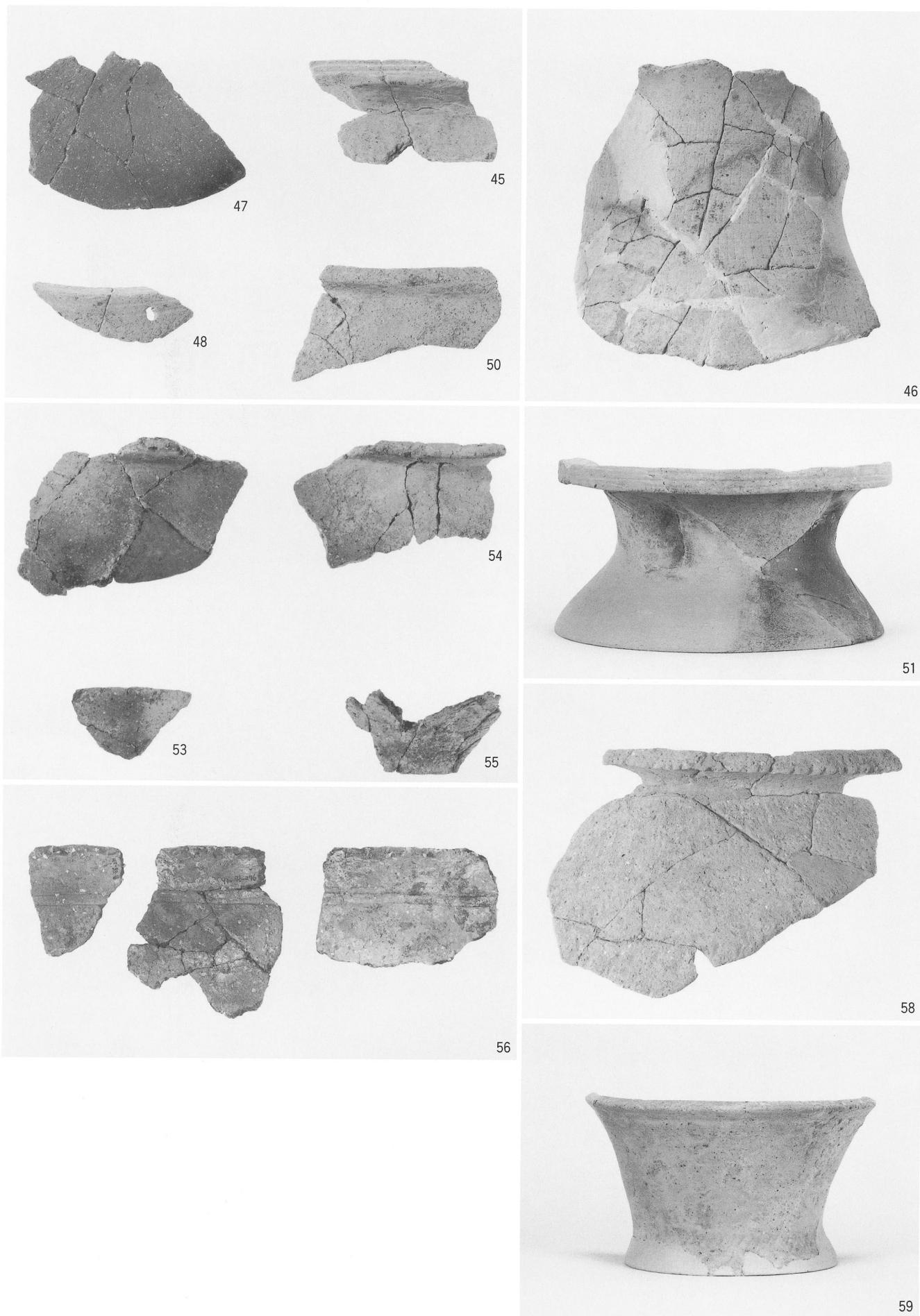


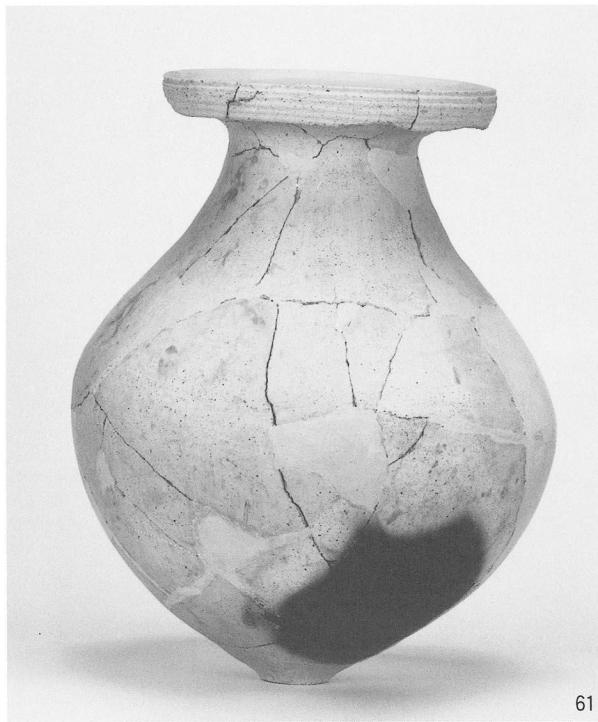
42



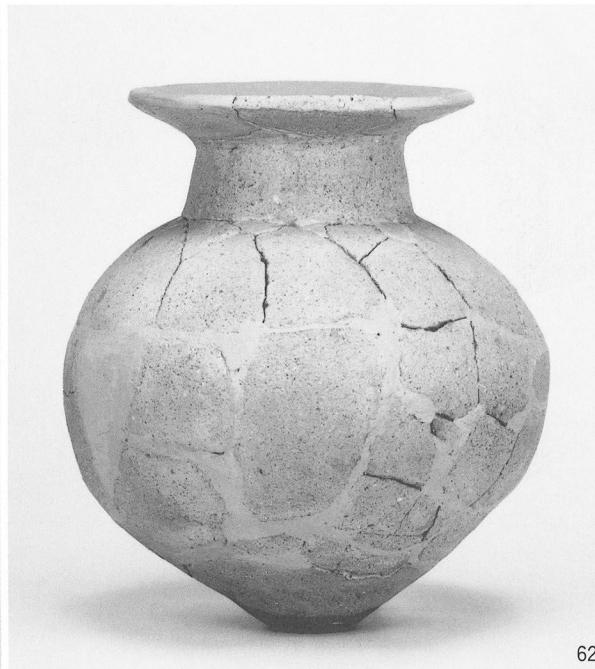
44

波毛遺跡

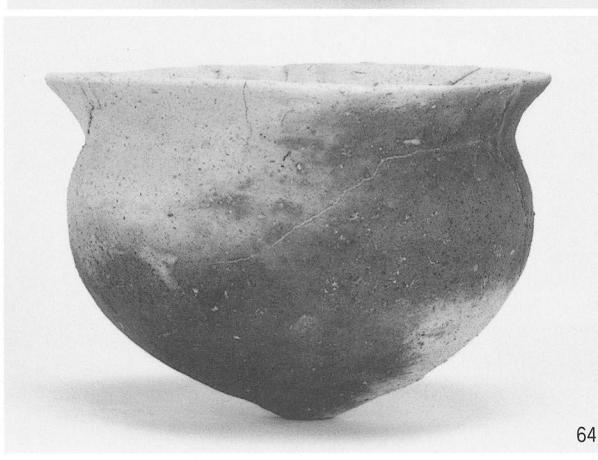




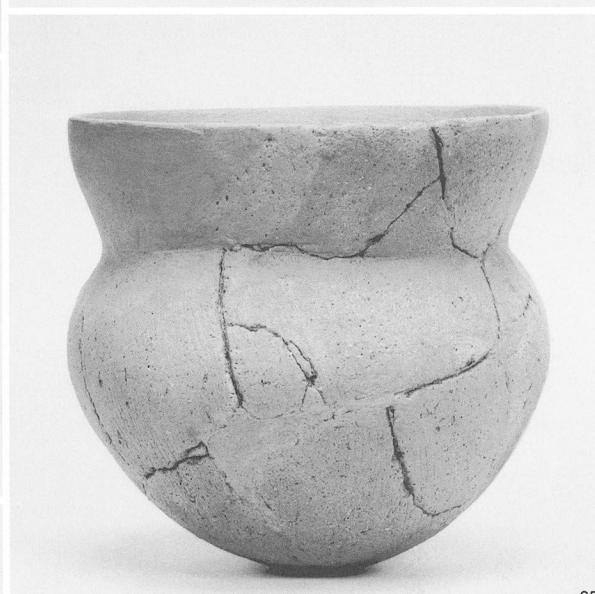
61



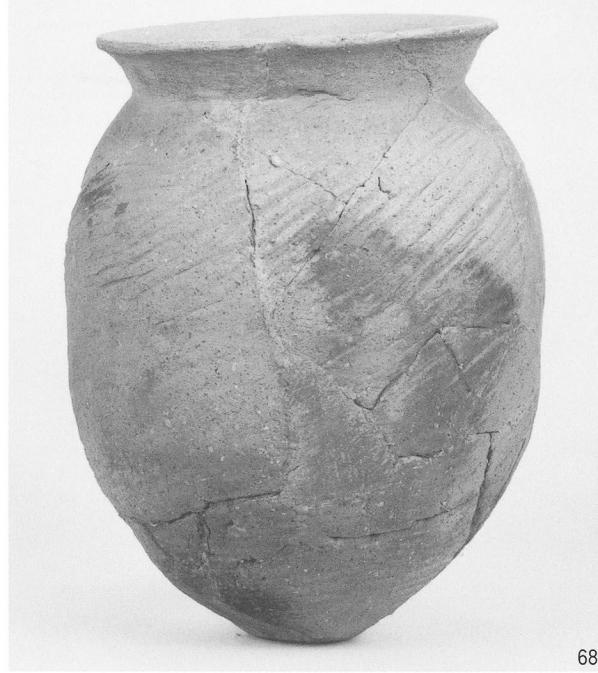
62



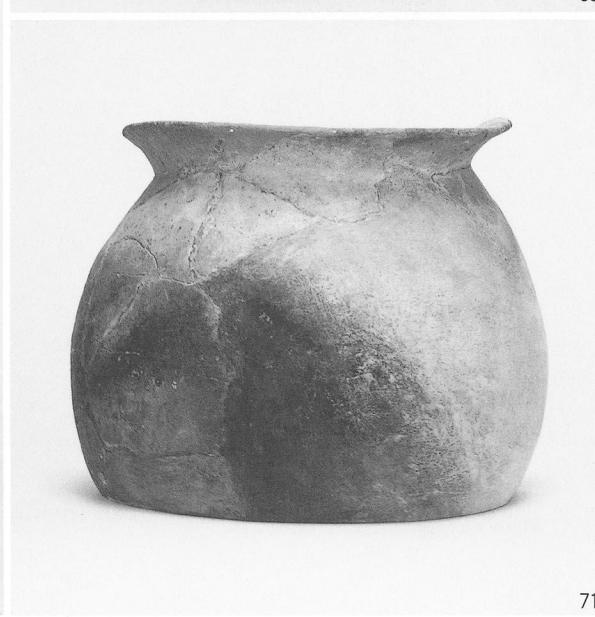
64



65

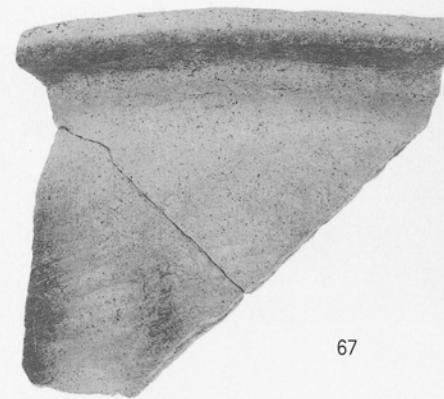


68



71

波毛遺跡



67



66



70



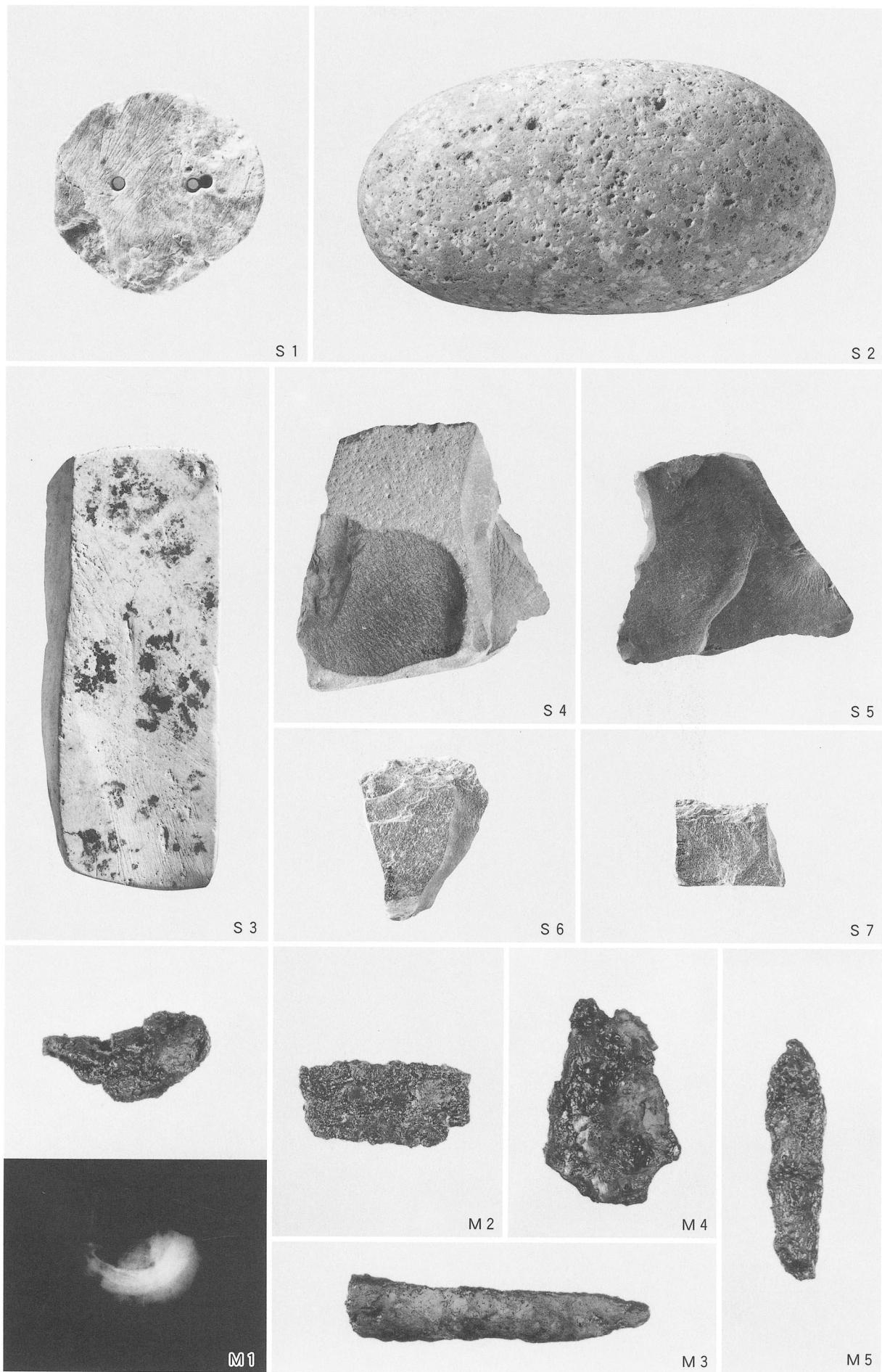
63



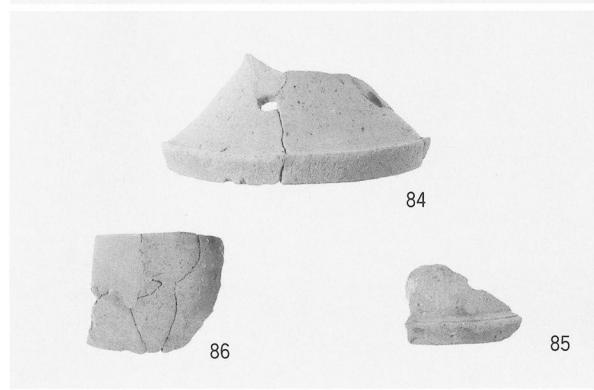
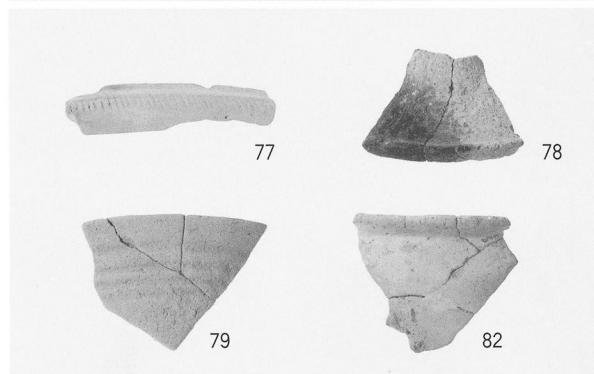
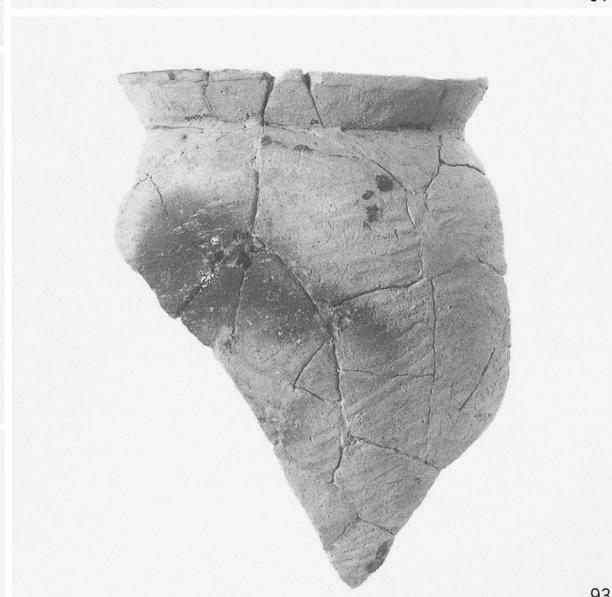
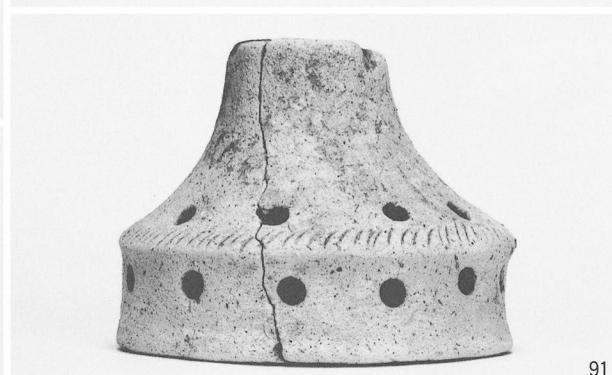
72

波毛遺跡

写真図版49
D地区出土石器・鉄器

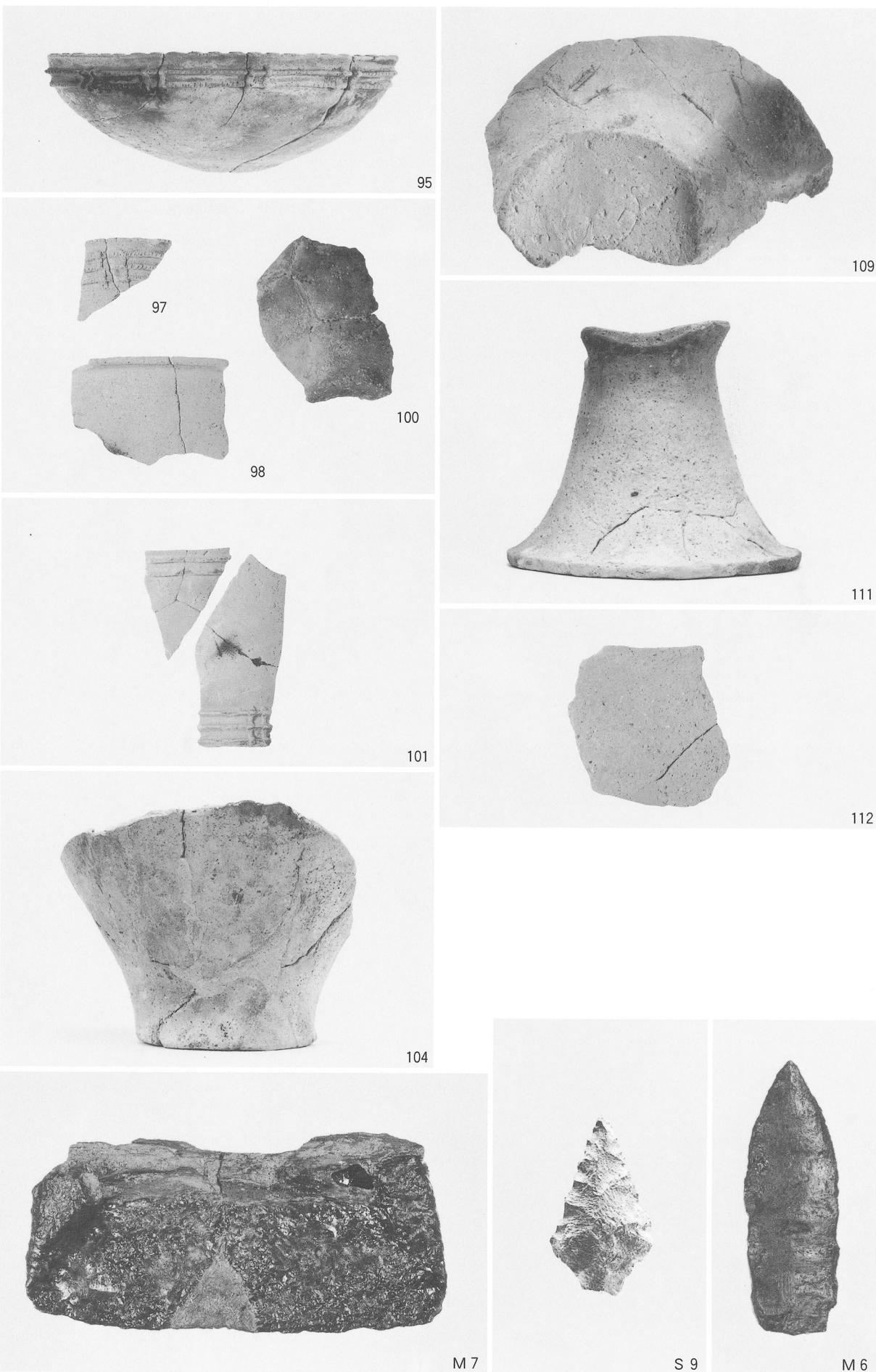


波毛遺跡

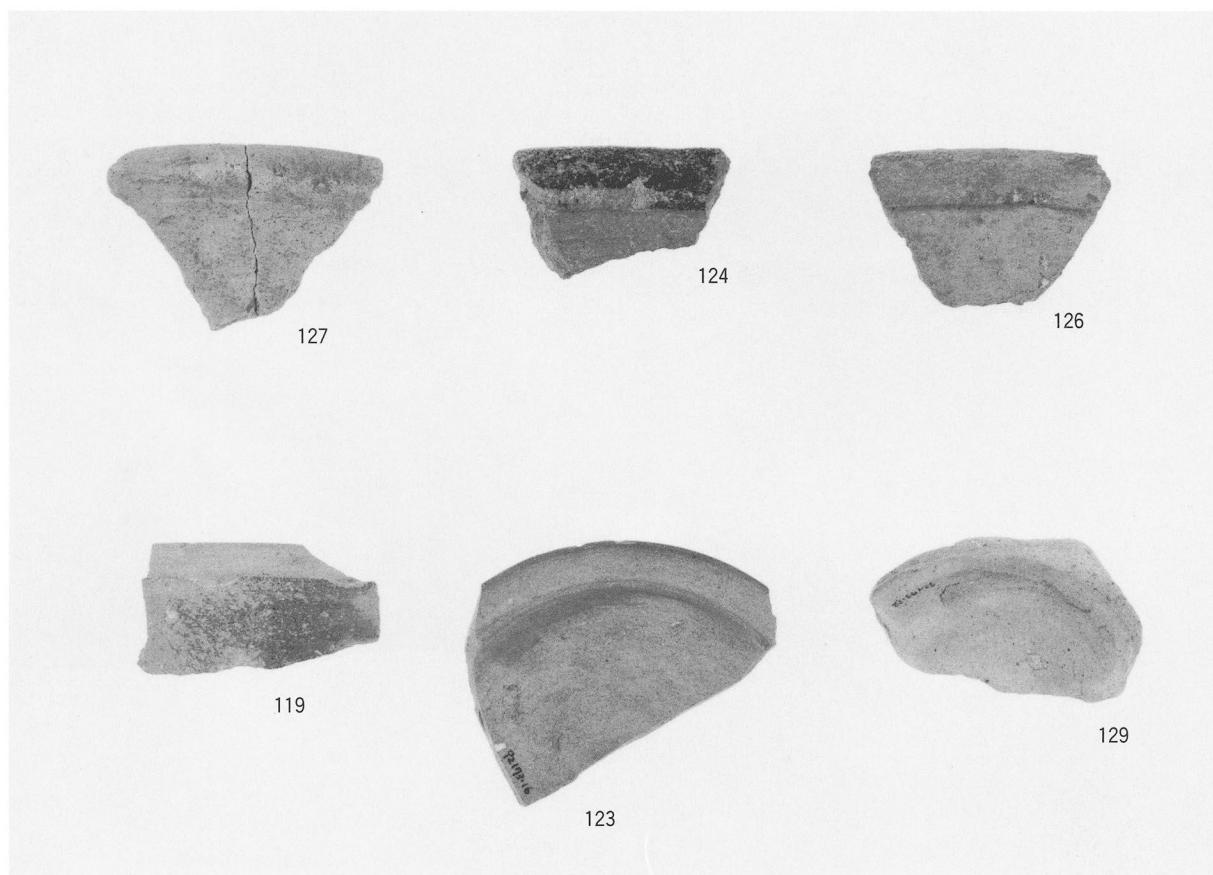
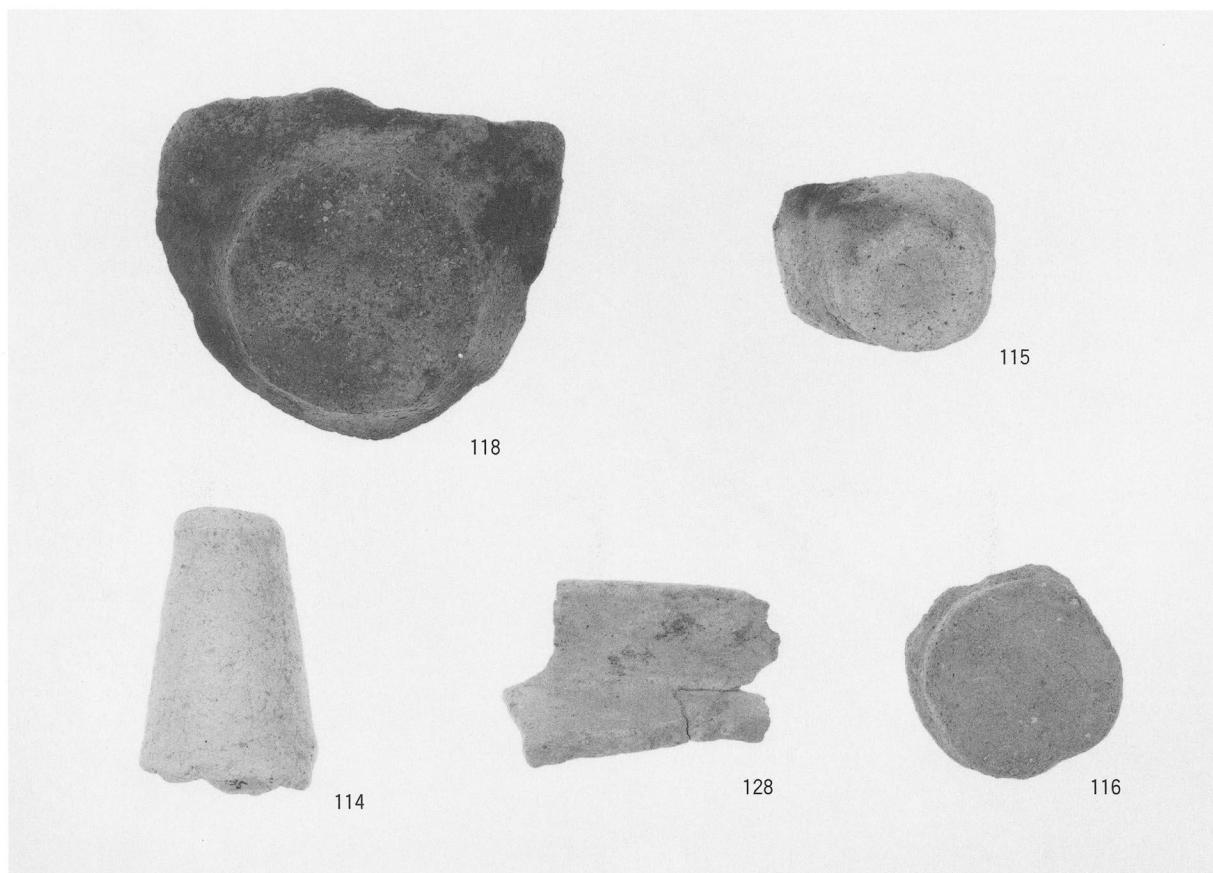


波毛遺跡

写真図版51
C地区出土遺物(2)



波毛遺跡



川添遺跡

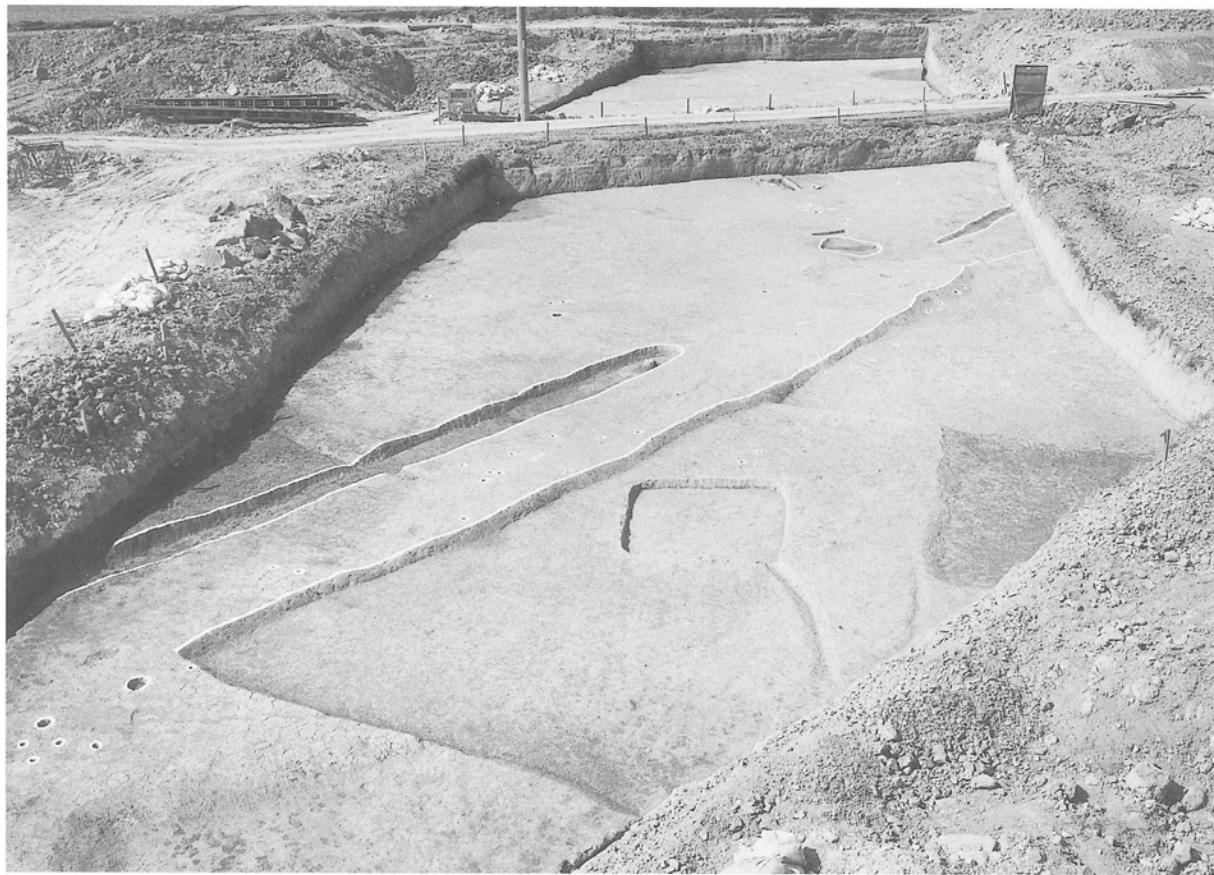


調査前風景（南東から）



調査区全景 航空写真

川添遺跡



A区 全景（東から）



B区 遺構検出状況（北から）

川添遺跡

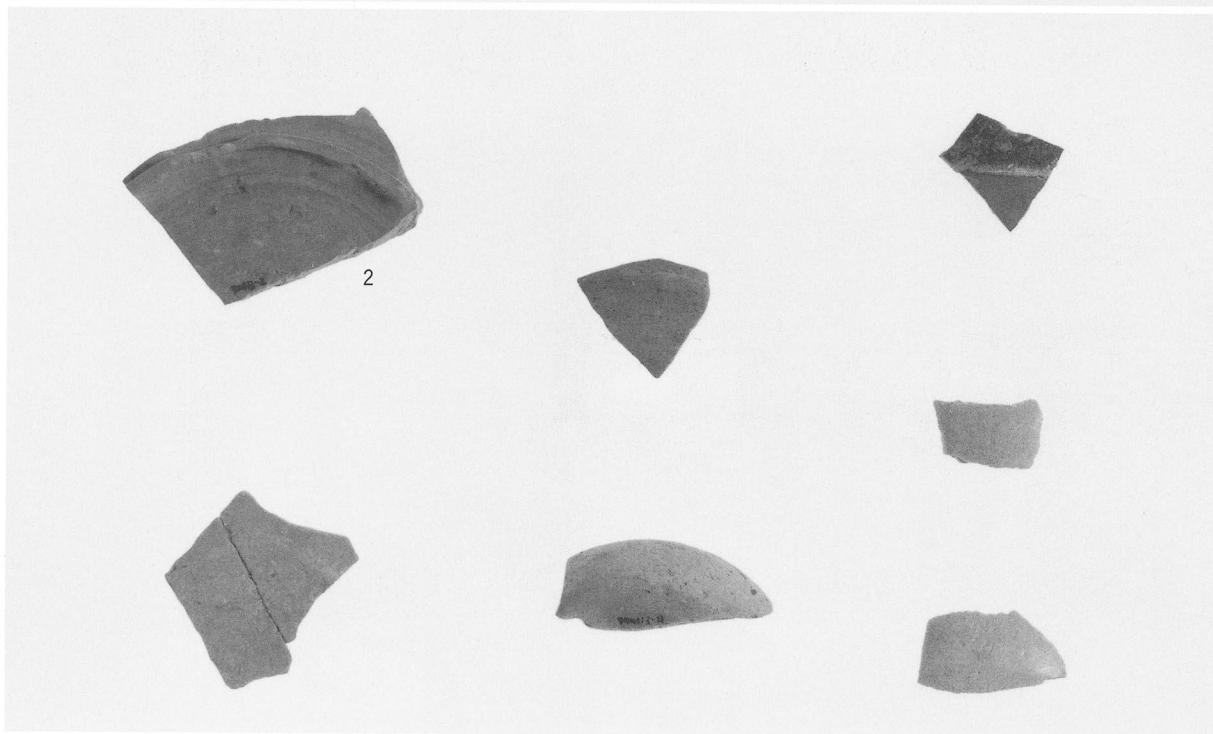
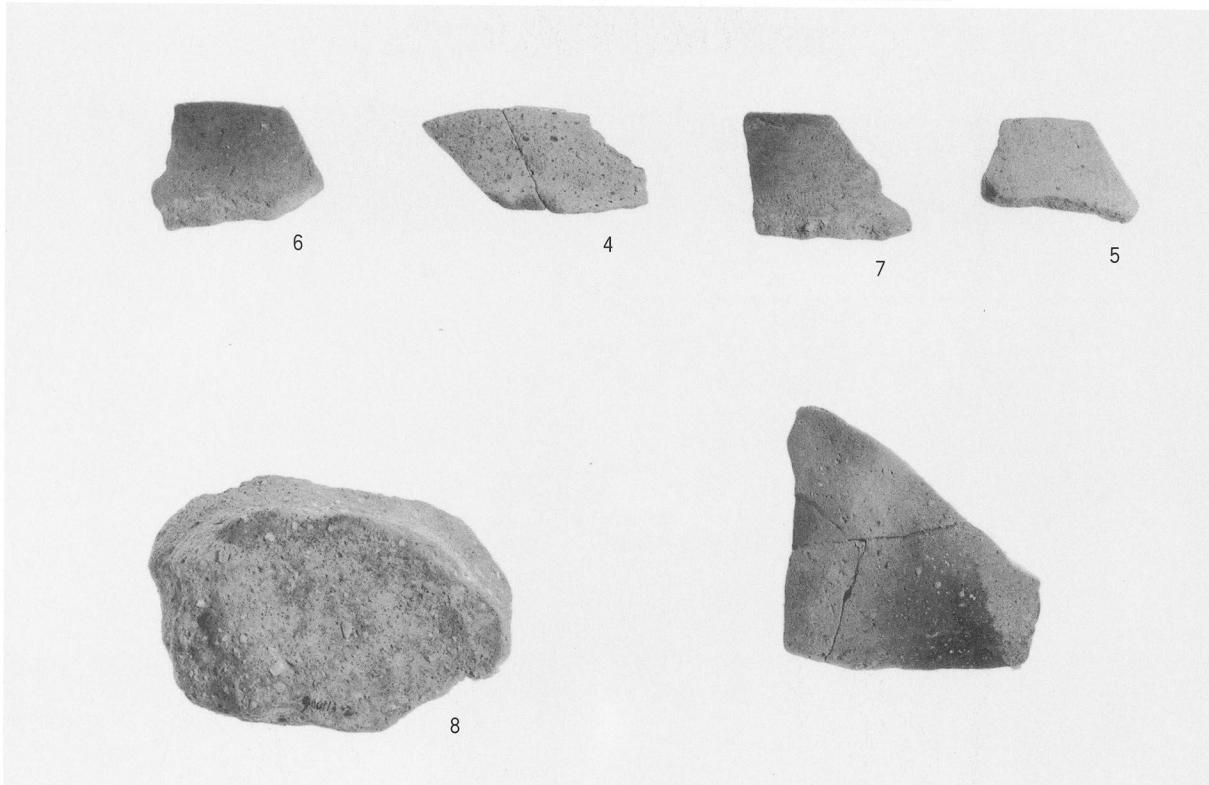
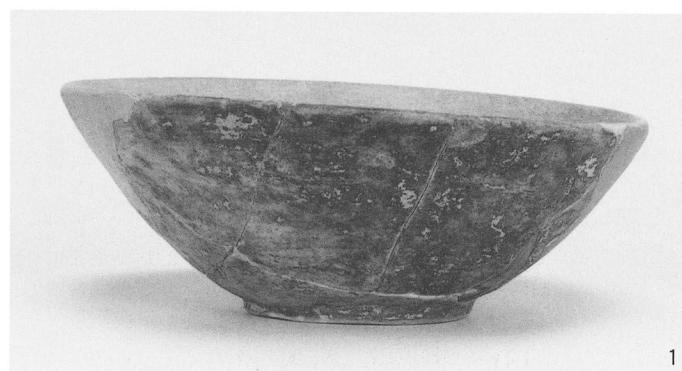


掘立柱建物 S B 01 (北から)



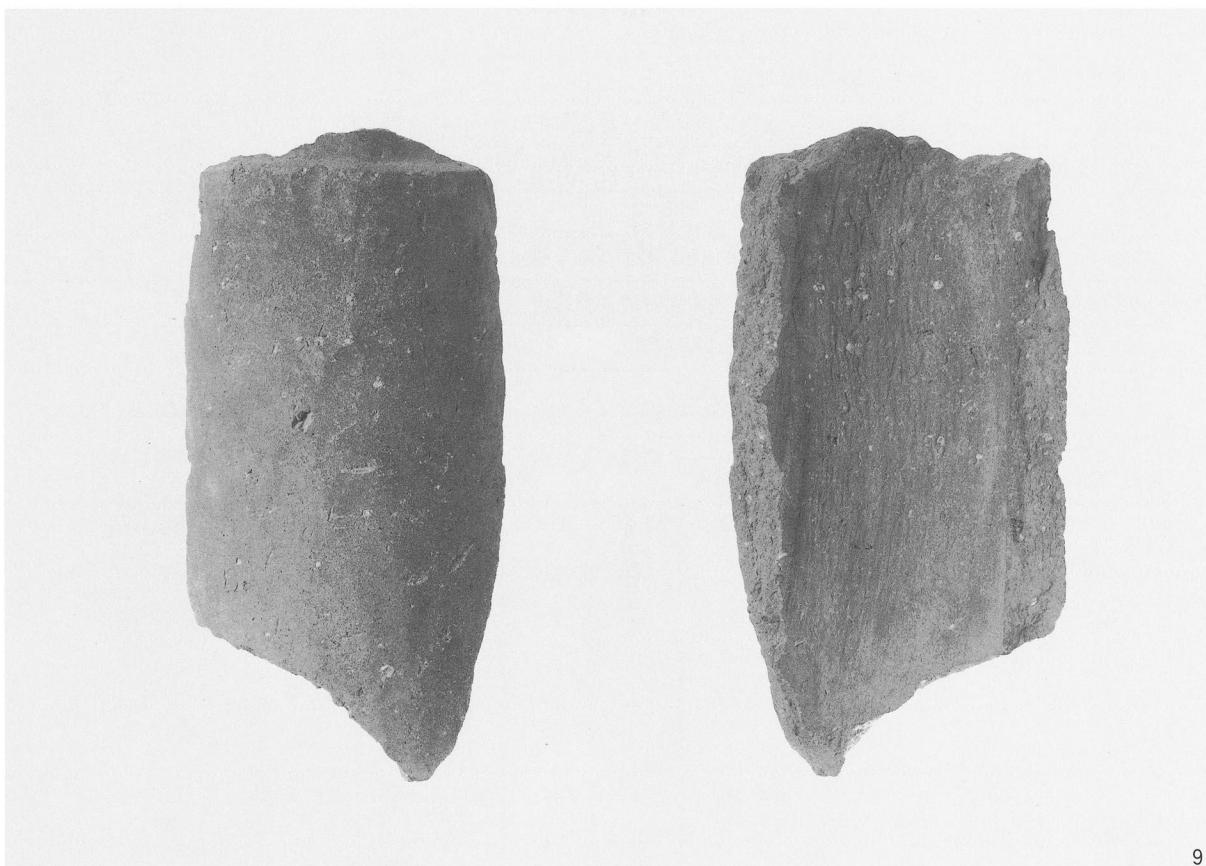
土坑 S K 01 (西から)

川添遺跡

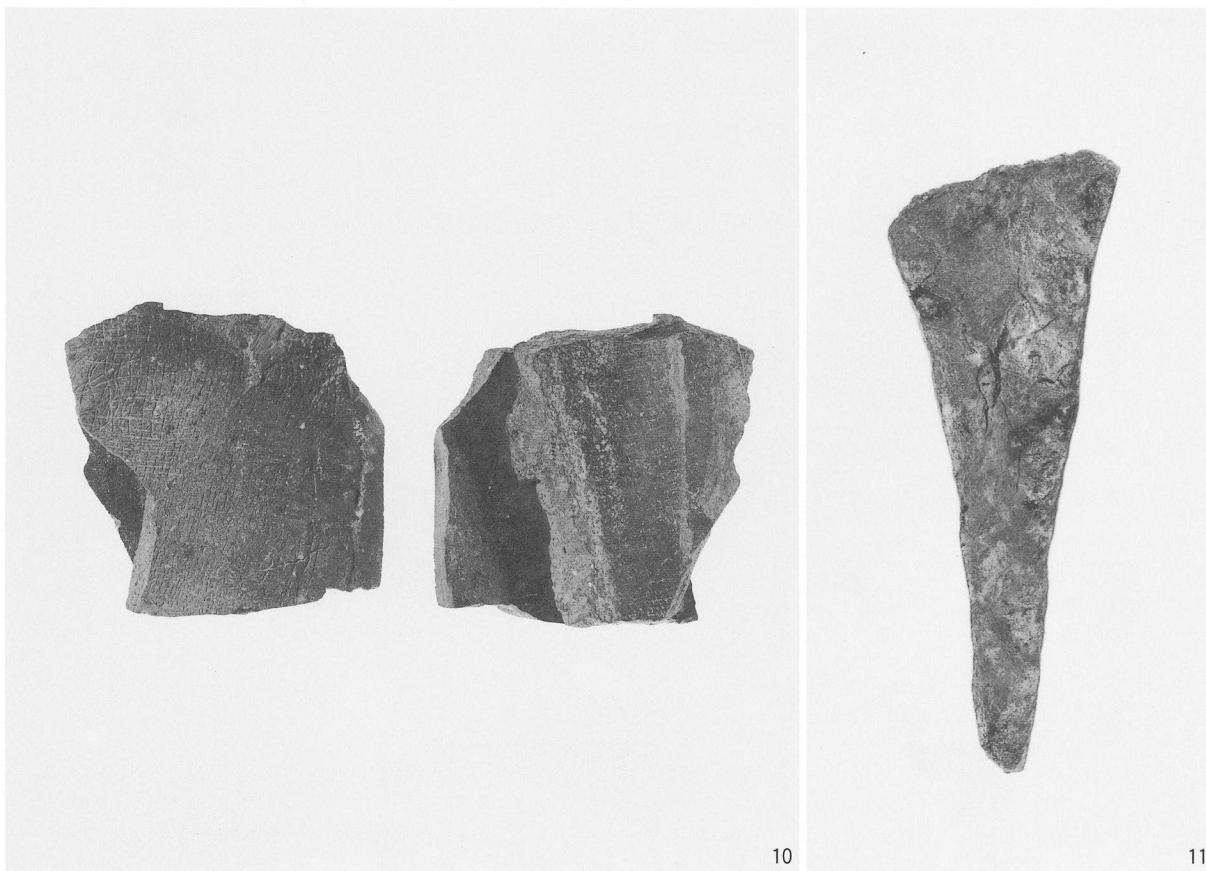


川添遺跡

写真図版57
出土瓦・鉄器



9



10

11

報告書抄録

ふりがな	はけいせき・かわぞえいせき						
書名	波毛遺跡・川添遺跡						
副書名	一般国道28号（洲本バイパス）建設事業に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告						
シリーズ番号	第199冊						
編著者名	岡田章一、中川 渉、山上雅弘、鈴木敬二						
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所						
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2-1-5 Tel 078-531-7011						
発行年月日	2000(平成12)年3月17日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因			
		市町村	遺跡調査番号								
はけいせき 波毛遺跡	ひょうごけんすもとし 兵庫県洲本市 おさめあざはけ 納字波毛・ト カリ	910053	34° 20'	134° 51'	1991.7. 1991.12.	~ ~	確認 350m ² 全面 2,202m ²	一般国道28号 (洲本バイパス) 建設事業			
		910086	00"	10"	1992.3. 1992.5. ~		全面 6,671m ²				
		920173			1992.12.						
かわぞえいせき 川添遺跡	ひょうごけんすもとし 兵庫県洲本市 おおのしも 大野下	900006	34° 19'	134° 51'	1990.6.13~ 1990.6.22		確認 76m ²				
		900113	55"	15"	1990.12.19~ 1991.3.15		全面 1,000m ²				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項					
波毛遺跡	集落	弥生時代前期	土坑	弥生土器		弥生時代中期の工房跡・焼土坑といった生産関連の遺構が見つかっている。特に焼土坑は4m×3mの範囲に焼土塊が広がっており、大掛かりな火を用いた生産遺構とみられる。					
		弥生時代中期	竪穴住居跡・土坑 掘立柱建物跡・溝 工房跡・焼土坑	弥生土器・石器・鉄器							
		弥生時代後期	溝	弥生土器							
		古墳時代	竪穴住居跡・掘立柱建物跡	土師器・須恵器・鉄器							
		奈良時代	水田	石器							
川添遺跡	集落	平安時代後半	掘立柱建物跡	瓦器・土師器							

兵庫県文化財調査報告 第199冊

波毛遺跡 川添遺跡

一般国道28号（洲本バイパス）建設事業に伴う発掘調査報告書—

平成12年3月17日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社トライス
〒650-0016 神戸市中央区橘通1丁目1番9号
